

『ラーマナ王物語』研究：解題および前半部の訳註

根本裕史・扎布

1 序

本稿は、ゲルク派の論師にして詩人であるシャンシュン・チューワンタクパ (Zhang zhung chos dbang grags pa: 1404–69) が著したチベット語叙事詩『ラーマナ王物語』 (*Rā ma na'i gtam rgyud*)¹ の和訳研究である。同書はインドから伝わったラーマーヤナ物語²を題材にして書かれた極めて芸術性の高い美文詩 (snyan dngags, Skt. *kāvya*)³である。以下ではチベットに伝わったラーマーヤナ物語について概観し、チューワンタクパ作『ラーマナ王物語』の特色を論じた後、その前半部の訳註を与える。

2 チベットにおけるラーマーヤナ物語の受容

ラーマーヤナ物語は古くからチベットに伝わっていたようである。20世紀に発見された敦煌文書に含まれるチベット語古写本の中には、少なくとも六つの版 (欠落箇所を含む) のラーマーヤナ物語が存在する⁴。de Jong (1972: 191) の推定によると、それらはチベットによる敦煌統治時代に敦煌で筆写されたものである⁵。また、de Jong (1983: 163) の修正提案によると、それらの写本は中央チベットで書写された後、その時代に敦煌に運ばれたという可能性もある。写本 A、C、D、F は同一系統のものであり、写本 B、E は別の同じ系統に属する。インドのヴァールミーキ (Vālmīki) によって編纂された『ラーマーヤナ』 (*Rāmāyaṇa*) とは異なる内容を多く含み⁶、中国に伝わるラーマーヤナ物語に見られるような仏教的要素はない。さらに、814年に成立した『翻訳名義大集』 (*Mahāvīyutpatti*) には (Skt.) *sītāharaṇam*, (Tib.) *rol rnyed phrogs pa* (no. 7629) の項目がある。シーター (Sītā) の強奪 (*āharaṇa*) を主題とする物語といえ、明らかにラーマーヤナである。これら

¹根本 2016a で本作品に関する一般向けの紹介を行なった。

²後述するように、チベットに伝わるこの物語の主人公の名はラーマナ (*Rāmaṇa*, Tib. *Dga' byed*) である。本稿で紹介する古典期のチベット文献に *Rāmāyaṇa* 「ラーマ (*Rāma*) の行状 (*ayaṇa*)」やそれに類する表現は見られない。チベットに伝わったこの物語を「ラーマーヤナ」と呼称することは必ずしも妥当でないかもしれないが、本稿では従来の慣習 (Thomas: “a *Rāmāyaṇa* story in Tibetan”; Lalou: “l’histoire de *Rāma* en tibétain”; de Jong: “an old Tibetan version of the *Rāmāyaṇa*”) に従って便宜的にこの表現を用いる。

³後述するように作品の題目には *snyan dngags kyi bstan bcos* 「(美文) 詩書」という語が含まれる。内容と形式のいずれの点から見ても、本書は「美文詩」の定義を満たすと言えるであろう (cf. *KĀ I* 14–19)。なお、チベット語の「ニェンガー」には *snyan dngags* と *snyan ngag* の二つの表記が存在する。ツェテン・シャプドゥンの説明によれば、*dngags* は *ngag* の古形である (根本・扎布 2020: 16)。

⁴1929年に F. W. Thomas はロンドンにある A. Stein 収集の敦煌文書の中から、四種の写本 (A, B, C, D) にラーマーヤナ物語を見出し、自身の英訳と共に紹介した。その後、M. Lalou はパリにある他の二種の写本 (E, F) に含まれるラーマーヤナ物語を新たに発見し、1936年に発表された論文で紹介している (de Jong 1972: 190)。敦煌文書に見られるラーマーヤナ物語の校訂テキストと翻訳が Balbir 1963、de Jong 1989 に与えられている。

⁵de Jong はチベットによる敦煌統治時代を「787年もしくは782年から848年までの間」とする。チベットによる敦煌陥落を787年とする説は Demiéville 1952 によるものであり、782年とする説は Fujieda 1969 によるものである。しかしながら、その後発表された上山 (1990: 30) の考証によると、チベットによる敦煌陥落は786年であるという。岩尾 (2011: 219) も上山説を支持している。この説に従えば、かつて de Jong によって推定された敦煌写本所収ラーマーヤナ物語の書写時期も「786年から848年までの間」と修正するべきであろう。

⁶de Jong 1972: 198ff. を参照。

のことから、おそらく西暦 800 年頃には、チベット中央部と東北部のいずれにおいても、ラーマヤナ物語が伝わっていたと考えられる。

後伝期に活躍したアティシャ（Atiśa: 982–1054）の事績を綴った伝記『広伝』（*Rnam thar rgyas pa*）には Rol mnyed ma phrogs pa dang gnod sbyin a sha pa bsad pa'i gtam rgyud 「シーター強奪と夜叉アシャバ殺害の物語」が言及される⁷。果たして「アシャバ」がシーターを強奪して結果的に殺害される悪魔ラーヴァナ（Rāvaṇa）に一致するのかどうかという問題⁸はあるにせよ、これはラーマヤナ物語を指しているとみなして良いであろう。ただし、この「シーター強奪と夜叉アシャバ殺害の物語」が『広伝』に言及されるという事実は、必ずしもアティシャ（1040 年入蔵）がチベットにいた当時、ラーマヤナ物語がかの地で広く普及していたという証拠にはならない。Eimer 1979 によると『広伝』は 1257 年から 1469 年までの間に編纂されて現在の形になったものだからである。そこに言及される物語が実際にどの時代に知られていたものであるかは不明である⁹。

チベット大蔵経テンギュルに収録される論書のチベット語訳にもラーマヤナ物語が言及されることがある。11 世紀に翻訳されたプラジュニャーヴァルマン（Prajñāvarman）の『殊勝讚疏』（*Viśeṣastavaṭīkā*）にラーマヤナ物語が紹介される¹⁰。『殊勝讚』（*Viśeṣastava*）については現代の学僧セツァン・ロサン・ペルデン（Bse tshang blo bzang dpal ldan: b. 1938）による浩瀚な註釈があり、そこではラーマヤナ物語の内容がより詳細に論じられている¹¹。

インド人の学者達のもとで学んだ経験を有するサキヤ・パンディタ・クンガ・ギェルツェン（Sa skya paṇḍita kun dga' rgyal mtshan: 1182–1251）は当然のことながらラーマヤナを知っていた。彼の有名な格言集『サキヤ・レクシェ』（*Sa skya legs bshad*）第 321（322）詩節¹²に次の文言がある。

「偉大な人々というのは娯楽と
安楽と飲食への執着を捨てるものである。
欲望の向かう対象に執着した報いにより¹³
ラーヴァナがランカー島で殺されたのは周知の通り。」¹⁴

サキヤ・パンディタはラーヴァナ殺害の物語を「周知の通り」とし、譬え話として使っている。このことから推し量れば、当時のチベットでラーマヤナ物語は人々の間で広く知られていたのでは

⁷Eimer 1979: [I] 236, [II] 206 を参照。

⁸de Jong (1972: 191) によれば、敦煌文書に現れるラーマヤナ物語に「アシャバ」という名の夜叉は登場しない。したがって、少なくともアティシャ伝に言及される物語が、敦煌版と同一のものでないことは確かである。

⁹Eimer 1979: [I] 8; de Jong 1983: 167 を参照。

¹⁰de Jong 1983: 180f.; Schneider 1993: 118f.; van der Kuijp 1996: 394 を参照。プラジュニャーヴァルマンが物語の紹介を行なっているのは、『殊勝讚』の次の詩節に対する註釈である。VS 16 (Schneider 1993: 56): mi dbang dga' byed gos sred sogs || nags tshal nas ni phyir yang mchis || bde gshegs khyod ni dben pa yi || bdud rtsis ngoms pas phyir mi byon || （「ラーマやアンバリーシャなどの王達は森から再び戻って来た。しかし、善逝よ、あなたは隠遁という甘露に満足していたので、決して戻って来ることがなかった。」）

¹¹*Mchod sprin* 205.19ff. (ad VS 16) を参照。さらに、セツァン・ロサン・ペルデンは、プラジュニャーヴァルマンが註釈を施していない『殊勝讚』第 33 詩節についても詳細な説明を与え、ラーマヤナ物語の内容を紹介している（*Mchod sprin* 292.8ff.）。VS 33 (Schneider 1993: 60): dga' byed chung ma'i don gyi phyir || rgya mtsho'i pha rol son zhes brag || khyod kyis bud med stong phrag ni || brgyad cu spangs nas nags su gshegs || （「ラーマは妻のために海の向こうへ渡ったということが知られている。ところが、あなたは八万の女性を捨てて森に行った。」）

¹²第 8 章「行動についての考察」（*bya ba brtag pa*）の第 18 番目の詩節である。

¹³ここでは'dod を「欲望」ではなく「欲望対象」の意味で理解するべきである。「欲望に執着した」では意味をなさない。今枝 2002: 142: 「欲望に執着したためにスリランカのラーヴァナ王は殺された。」

¹⁴*Sa skya legs bshad* 322 (cf. Davenport 2000: 321ff.): chen po nmams kyis rtsed mo dang || bde dang zas la chags pa spang || 'dod la zhen pa'i le lan gyis || 'bod grogs lang kar bsad ces grags ||

ろう。マルトゥン・チューギェル (Dmar ston chos rgyal: 13 世紀) が著した『サキヤ・レクシエ註釈』には、ラーマヤナ物語の全体が詳述される¹⁵。本稿で取り上げるシャンシユン・チューワンタクパの『ラーマナ王物語』は、マルトゥン・チューギェルが伝える物語に基づいて書かれていると考えられる。さらに、『サキヤ・レクシエ註釈』に現れるその物語は、その後多くのチベット文献で語られるラーマヤナの情報源になったと思われる。例えばリンブンパ・ガワン・ジクテン・ワンチュク・タクパ (Rin spungs pa ngag dbang 'jig rten dbang phyug grags pa: 1482/1542–1595?) によって 1586 年に書かれた『詩鏡』(Kāvyādarśa) の註釈にラーマヤナが紹介され、その説明は部分的に相違点も見られるが、おおむねマルトゥン・チューギェルが伝える物語に依拠していると思われる¹⁶。

インドの詩論家ダンディン (Daṇḍin: 7 世紀頃) の『詩鏡』第 2 章の第 301–302 詩節に「高貴 (udātta, Tib. rgya che ba) という修辞法の作例が示される。そこでは次のような形でラーマヤナ物語が言及される。

「ラーヴァナの首の切断という重い任務にも恐れ慄くことのないラーマ (ラグの子孫) であったが、彼でも父の命令には逆らうことはできなかった。」¹⁷

「ランカー島の支配者は宝石で出来た壁に反射した幾百もの映像に取り囲まれていたので、ハヌマット (アンジャンナーの息子) は彼を正しく識別するのに苦労した。」¹⁸

第 301 詩節は、父王を拒絶するだけの十分な力を有しながらも、その理不尽な命令を進んで受け入れて森に移り住むことを決めたラーマの並外れた高邁な精神 (bsam pa rgya che ba) を描写している¹⁹。第 302 詩節は、悪魔ラーヴァナの傑出した財力 ('byor ba rgya che ba) を描写している²⁰。

これらの詩節に対する註釈の中で、多くのチベットの註釈者達がラーマヤナ物語の内容を叙述している。それらの内で、リンブンパの註釈に先立って書かれたナルタン・ロツァーワ・ゲンドゥンベル (Snar thang lo tsā ba dge 'dun dpal: ca. 1400)、別名サンガシュリー (Saṅghaśrī) の 1429 年頃に書かれた註釈には、独自の要素を多く含んだ物語が紹介される²¹。18 世紀に現れたカムトゥル・テンジン・チューキ・ニマ (Khams sprul bstan 'dzin chos kyi nyi ma: 1730–1779) は、ナルタン・ロツァーワの伝承の誤りを指摘している²²。カムトゥルは自身の『詩鏡』註釈において、マルトゥン・チューギェルとリンブンパが伝える物語を下敷きとし、自身の師シトゥ・チューキ・チュンネ (Si tu chos kyi 'byung gnas: 1699/1700–1774) を通じて知り得たインドの伝承に関する情報を与えながら、ラーマヤナ物語を記述している。また、カムトゥルはインドやネパールに伝わる口承に基づいて著した、ヴィシュヌの十の化身 ('jug pa bcu, Skt. daśavatāra) に関する備忘録も著しており、そこではマルトゥンやリンブンパが伝える物語とは全く異なったインド・ネパール由来のラーマの伝説を紹介している²³。つまり、彼はラーマヤナに関する複数の伝承を知っていたのである。

¹⁵ Sa legs 'grel pa 190.12ff. (cf. de Jong 1983: 169ff.) を参照。

¹⁶ Seng ge'i nga ro 288.12ff. (cf. de Jong 1983: 177, 181) を参照。

¹⁷ KĀ II 301: guroḥ śasanam atyetuṃ na śāsāka sa rāghavaḥ | yo rāvaṇaśiraśchedakāryabhāre 'py aviklavaḥ ||; KĀ_S 31b2: rā ba ṇa yi mgo gcod pa'i || bya ba'i khur yang bzod pa yi || ra ghu'i bu des bla ma yi || bka' las 'da' bar nus ma gyur ||

¹⁸ KĀ II 302: ratnabhittiṣu saṃkrāntaiḥ pratibimbaśatair vṛtaḥ | jñāto laṅkeśvaraḥ kṛcchrād āñjaneyena tattvataḥ ||; KĀ_S 31b2f.: rin chen rtsig pa la 'phos pa'i || gzugs brnyan brgya yis bskor gyur pa || langka'i dbang phyug de kho na || anydza na phus dka' bas shes ||

¹⁹ Seng ge'i nga ro 435.3ff. を参照。

²⁰ Seng ge'i nga ro 442.17ff. を参照。

²¹ de Jong 1983: 173ff. を参照。

²² de Jong 1983: 177 を参照。

²³ Jug pa bcu'i gtam 711.4ff. (cf. van der Kuijp 1996: 399) を参照。

その後、19 世紀から 20 世紀にかけて活躍したシェルシュルワ・ガワン・テンペー・ギャンツォ（Zhal shul ba ngag dbang bstan pa'i rgya mtsho: 1858–1917）はチューワンタクパの『ラーマナ王物語』に対する註釈を著した。この註釈付きの『ラーマナ王物語』刊本は四川民族出版社から出版され、難解で知られる同作品が多くのチベット人読者に受け入れられる契機を作った。アムド地方出身で夭折した作家トンドゥプギャ（Don grub rgyal: 1953–1985）は『ラーマナ王物語』の講義を行ない、シェルシュルワの解釈を所々で批判しながら独自の解釈を展開した。青海ラジオ局（Mtsho sngon rlung 'phrin khang）で収録されたトンドゥプギャの講義の音源は広く普及し、現在もアムド地方の知識人や学生の間で聴かれている。

ゲンドウン・チューペル（Dge 'dun chos 'phel: 1903–51）はインド滞在中に得た知識をもとに『新訳ラーマヤナ』（*Gsar bsgyur rā ma yā na'i rtogs brjod*）と題する叙事詩を創作している。さらに、21 世紀に入るとウゲン（O rgyan）がヴァールミーキ版『ラーマヤナ』中国語訳をチベット語に翻訳するという試みを行っており、現在に至るまでチベット人のラーマヤナ受容は新たな展開を見せ続けている。

3 シャンシュン・チューワンタクパの『ラーマナ物語』

3.1 シャンシュン・チューワンタクパとその作品

チベット古典文学史上、ラーマヤナを題材とする作品として最も重要なのは、シャンシュン・チューワンタクパの『ラーマナ王物語』であろう。高度な修辞技法を凝らし、登場人物の心情を巧みに表現したこの叙事詩は、その芸術性の高さからチベットで広く愛好されている。

作者チューワンタクパは、晩年のツォンカパ・ロサンタクパ（Tsong kha pa blo bzang grags pa: 1357–1419）の薫陶を受け、その高弟ケドゥプジェ・ゲレク・ペルサンポ（Mkhas grub rje dge legs dpal bzang po: 1385–1438）に師事したゲルク派の学僧である。デシ・サンギェ・ギャンツォ（Sde srid sangs rgyas rgya mtsho: 1653–1705）が著した『ヴァイドウーリヤ・セルポ』（*Baidūrya ser po*）には、ツォンカパの弟子達の中で「考察力が特に優れた者」（*rnam dpyod phul du byung ba*）としてシャンシュンパ・チューワンタクパの名が挙げられている²⁴。

チューワンタクパは 1404 年に西チベットのガリー地方に生まれ、中央チベットでツォンカパやケドゥプジェらに師事して学問を修めた。38 歳（1438 年）にガンデン僧院において『ラーマナ王物語』を著作し、詩人としての傑出した才能を現した。55 歳（1458 年）にチャムド（Cha mdo）のチャンパリン僧院（Byams pa gling）の座主の位に就き、さらにその後、クル・ペルコル僧院（Gu ru dpal 'khor）の座主も務めた。1469 年にナクシヨ（Nags shod）のナムギェル・ペルバル（Rnam rgyal dpal 'bar）僧院にて遷化した²⁵。

チューワンタクパの全集（*gsung 'bum*）は存在しない。ケドゥプジェ全集の中にはチューワンタクパが著したツォンカパ作『縁起讚』（*Rten 'brel bstod pa*）に対する註釈『至高の真髓』（*Snying po mchog*）が収められている²⁶。さらに、『カーラチャクラタントラ』（*Kālacakratāntra*）に対するケドゥプジェの未完の註釈をチューワンタクパが完成させている。

詩作品としては『ラーマナ物語』の他に、チベット後伝期の仏教再興に貢献したリンチェン・サンポ（Rin chen bzang po: 958–1055）の事績を描写した叙事詩『翻訳官リンチェン・サンポ伝』（*Lo*

²⁴ *Baidūrya ser po* 72.8ff. を参照。同じ記述がトゥカン・ロサン・チューキ・ニマ（Thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma: 1737–1802）の学説綱要書にも見られる（立川他 1995: 54）。

²⁵ チューワンタクパの事績については『雪域歴代名人辞典』の Zhang zhung chos dbang grags pa の項目および *Gser gyi sbram bu* [I] 466.1ff. を参照。

²⁶ 同作品については根本 2016b: 21 を参照。

tsā ba rin chen bzang po'i rnam thar)²⁷や、ツォンカバ讚の詩²⁸などを残している。いずれも技巧的な修辞表現を豊富に用いた芸術性の高い作品である。

3.2 『ラーマナ物語』とその註釈

『ラーマナ王物語』の正式な題目は以下の通りである。

Rgyal po rā ma ṅa'i gtam rgyud las brtsams pa'i snyan dngags kyi bstan bcos dri za'i bu mo'i rgyud mangs kyi sgra dbyangs

ラーマナ王の物語に基づく詩書：ガンダルヴァの天女が奏でるヴィーナーの音色

題目が示すように、本書は美文詩（*snyan dngags*, Skt. *kāvya*）の作品である。ここで *bstan bcos* (Skt. *śāstra*) という語は、必ずしも仏教文献で定義されるような、煩惱の制圧（*'chos pa*, Skt. *śāsana*）と救済（*skyob pa*, Skt. *trāṇa*）をもたらす清浄な言葉からなる論書²⁹ではなく、書一般を意味するのであろう。本書が扱うのは「物語」（*gtam rgyud*, Skt. *ākhyāna*）である。*rā ma ṅa'i gtam rgyud* 「ラーマナ物語」の代わりに *rā ma ṅa'i rtogs brjod* 「ラーマナ・アヴァダーナ」という呼称が用いられることもあるが、本書は決して証得（*rtogs pa*）の功德についての叙述（*brjod pa*）を行なう宗教作品ではない³⁰。その場合の *rtogs brjod* (Skt. *avadāna*) という語は、例えばポラワ・ソナム・トプギェ（*Pho lha ba bsod nams stobs rgyas*: 1689–1747）の生涯を綴った物語 *Mi dbang rtogs brjod* 『王者のアヴァダーナ』の場合と同様に、人物の外的な活動を述べた「物語」を意味するものとして理解すべきであろう。

『ラーマナ王物語』は全て韻文で書かれている。Bkra bho (ed.) 2002: 680 によれば、合計 1020 の詩脚（*tshig rkang*）が含まれる。多くの韻文が 7 音節（*tsheg bar*）の詩脚で構成されるが、19 音節、23 音節、29 音節、31 音節といった多音節の詩脚からなる韻文も存在する。必ずしも 4 詩脚で一つの意味的なまとまりを有する詩節（*tshig bcad*）をなすとは限らず、1 詩節の範囲を特定するのが難しい箇所もあるため、作品に含まれる詩節数を確定することは容易でない。シェルシュルワの註釈に従って数えると 140 の詩節が含まれることになり、一方、トンドゥプギャの説明によれば 139 の詩節が含まれる。

全ての詩において『詩鏡』に規定される修辞法が用いられる。『詩鏡』第 2 章に「意味の装飾要素」（*don rgyan*, Skt. *arthālamkāra*）として挙げられる隠喩（*gzugs can*, *rūpaka*）、詩的空想（*rab rtog*, *utprekṣā*）、縮約表現（*bsdus brjod*, *samāsokti*）などや、第 3 章に「言葉の装飾要素」（*sgra rgyan*,

²⁷Martin 2008 に『翻訳官リンチェン・サンボ伝』の解題、チベット語校訂テキスト、詳細な註を含む英訳がある。

²⁸Rgya ye bkra bho (ed.) 2018: 85ff. を参照。

²⁹ジャムヤンシェーパ・ガワン・ツォンドウの『般若波羅蜜多考究』（*Phar phyin mtha' dpyod*）によると、論書（*bstan bcos*）は以下のように定義される。*Rin chen sgron me* 121b1ff.: *'chos skyob kyi yon tan gnyis dang ldan pa'i rjod byed rnam dag bstan bcos kyi mtshan nyid yin te | bstan bcos kyi skad dod shāsatra la nges tshig gis bshad na shā sa na 'chos pa dang | tra'am tra ya ni skyob pa dang srol ba sogs la 'jug pa'i phyir | rnam bshad rigs pa las | nyon mongs dgra rnam ma lus 'chos pa dang || ngan 'gro'i srid las skyob byed gang yin pa || 'chos skyob yon tan phyir na bstan bcos te || gnyis po 'di dag gzhan gyi lugs la med || ces gsungs pa'i phyir | 'chi med mdzod las kyang || shāsatra nges par bstan dang gzhang || zhes gsungs pa'i phyir |*（「論書は『制圧と救済という二つの美質を有する清浄なる言葉』と定義される。*bstan bcos* の原語である *śāstra* を通俗的語義解釈に基づいて解釈すると、*śāsana* が制圧を意味し、*tī* [*< tra*] あるいは *traī* [*< tra ya*] がそれぞれ救済あるいは超越などの意味で適用されるゆえに。『釈軌論』に『全ての煩惱という敵を制圧し、悪趣から、またひいては生存から救済するものは、*śāsana* [制圧] と *trāṇa* [救済] という美質のゆえに *śāstra* [論書] といわれる。この二つの性質は他の教義にはない』と説かれるゆえに。また、『アマラ・コーシャ』にも『*śāstra* という語は *nideśa* [命令] と *grantha* [論書] の意味で用いられる』と説かれるゆえに。）」

³⁰*rtogs brjod* の語義解釈については根本・扎布 2020: 16 を参照。

śabdālamkāra)として挙げられる同音節群反復(zung ldan, yamaka)などが多用される。さらに、『詩鏡』には規定されないが、チベット古典詩ではしばしば用いられるカテン(ka phreng)という日本語のあいいうえお作文に類似した技法も登場する³¹。後述するように、インド東部のガウダ様式を思わせるような誇張表現や、難解な表現が随所に現れる。

『ラーマナ王物語』が1438年に成立してから19世紀に至るまでの間に、チベットでどのように読み継がれてきたのかは明らかでない。19世紀後半から20世紀初頭にかけて活躍したシェルシュルワ・ガワン・テンペー・ギャンツォがこの極めて難解な作品に対する註釈を著したことは、その受容の歴史において画期的な出来事であった。シェルシュルワの註釈付きの刊本は*Rā ma ṅa'i rtogs brjod*の題名で1981年に四川民族出版社より出版された。1988年に出版された『チベット歴史文学作品選《金塊》』(*Gangs ljongs mkhas dbang rim byon gyi rtsom yig gser gyi sbram bu*)³²には『ラーマナ王物語』全文が収録されている。1980年代に現れたこの二冊が、現代チベットの知識人の間で『ラーマナ王物語』を浸透させる要因となった。

シェルシュルワは、しばしば『ラーマナ王物語』のタシルンポ木版本(Bkra shis lung po dpar ma)が与える異読に言及している。残念ながら現時点で筆者はタシルンポ版を入手できていない。また、彼は複数の手書き写本(bris ma rnams)の存在を明らかにしており、それらに見られる異読の情報を与えている。1976年にティンプー(Thimphu)で出版された*Kāvya Texts from Bhutan*に収録される『ラーマナ王物語』の手書き写本の影印版が、シェルシュルワによって言及されるものと同一であるかどうかは定かでない。

既に述べたように、20世紀の作家にして詩論家でもあったトンドゥプギャは、シェルシュルワの解釈を批判的に検討しながら自身の新解釈を示している。トンドゥプギャの『ラーマナ王物語』講義は青海ラジオ局で収録され、その音源が残されている。また、その講義内容に一致する未完の註釈と語彙集が彼の著作集に収録されている。出版された註釈は冒頭のわずか6詩節のみに対する非常に短いものである。

2000年に『ラーマナ王物語』の新たな註釈書が甘肅民族出版社により出版された。著者カンブム(Mkha' 'bum)は青海師範大学の教授を務めた現代の学者である。『ラーマナ王物語』を全19章に分け、シェルシュルワの註釈には見られなかった新たな知見を数多く与えている。2018年には中央民族大学でチベット文学を講じ、現代作家としても有名なジャバ(Bkra bha: b. 1960)による新たな註釈書が出版された³³。全ての詩節について単語の意味説明(ming 'grel)、逐語的註釈(tshig 'grel)、内容分析(don 'grel)、備考考察(phran dpyad)を行ない、随所で従来とは異なる新解釈を提示している。

3.3 物語のあらすじ

チューワンタクパの『ラーマナ王物語』は、他の多くのチベット版ラーマナと同様に、インドで最もよく知られている聖仙ヴァールミーキの手になる物語とは異なる点が多い³⁴。既に述べたように『ラーマナ王物語』が下敷きになっていると思われるのは、マルトゥン・チューギェルの『サキヤ・レクシェ註釈』に紹介される物語である。以下では、カンブム(Mkha' 'bum)の註

³¹van der Kuijp 1996: 401に指摘されるように、カテン(ka phreng)の技法はサラハ(Saraha)の『カカスヤ・ドーハー』(*Kakhasyadohā*)のチベット語訳に既に見られる。

³²チベット古典期に活躍した計76人の著者によって書かれた計180の作品を収録する全3巻からなる作品集である。文化大革命後の古典文学復興の気運の高まりの中で編纂されたこの作品集の特色についてはKapstein 2003: 789を参照。

³³入手の労を取って頂いた海老原志穂博士(東京外国語大学)に感謝の意を表す。

³⁴さらに、『ラーマナ王物語』の内容は敦煌文書に見出されるラーマナ物語とも多くの点で異なっている。敦煌版のラーマナのあらすじはde Jong 1972: 193ff. および de Jong 1983: 164ff. に示されている。

釈に与えられる章立てに従って『ラーマナ王物語』のあらすじを紹介する。

1. ラーヴァナ、シヴァ神に不死の境地を懇願する　ランカー島を支配する悪魔の王ラーヴァナ（別名ダシャグリーヴァ「十の首を持つ者」）は不死の境地を求めて最高神シヴァのもとに行き、自らの十の首を次々に切り落として供物として捧げた。
2. ラーヴァナ、ウマーとハヌマンタからの申し出を拒絶する　シヴァはラーヴァナに恩恵を与えることを妻ウマーに命じた。シヴァの命令を受けてウマーはラーヴァナのもとに赴いたが、ラーヴァナは女性から不死の境地を授かりたいとは思わなかったので、ウマーを拒絶した。ウマーは激昂し、「おまえの王権は女のせいで滅びるがよい」と呪いをかけた。次にシヴァの息子である猿のハヌマンタ（Hanumantha）³⁵が父の命令を受けて現れ、ラーヴァナに恩恵を与えようとするが、ラーヴァナは猿から不死の境地を授かることを嫌い、その申し出も拒否した。拒絶されたハヌマンタは激怒した³⁶。
3. シヴァ、ラーヴァナに不死の境地を授けたふりをする　シヴァ神がラーヴァナの前に姿を現すが、不死の境地を授ける能力がなかったので、サラスヴァティーの力を借りながら、ラーヴァナにそれを与える振りをする。ラーヴァナが望んでいたのは不死の境地であったが、実際にシヴァが授けたのは、「十の首の中央にある馬の首を斬り落とされない限りは死なない」という条件付きの不死であった³⁷。ラーヴァナは自分が騙されていることに気づかず、満足してランカー島に帰って行く。
4. シーター、ラーマナの妃として迎えらる　ラーヴァナに美しい一人の娘が誕生する。「将来この娘は悪魔の国を滅ぼすであろう」というバラモンのお告げにより、箱に入れられ、河に流されてしまった。やがて箱は農村を流れるせせらぎに辿り着き、農夫達によって中の娘が発見された。箱から出てきた美しい娘はシーター（Rol rnyed ma「溝から発見された娘」）³⁸と名付けられ、大切に育てられた。シーターが成長すると、農夫達は相談をし、娘を国王ラーマナ（Dga' byed「喜ぶ人」）に捧げた。
5. ラーマナ、森に移り住む　シーターと結婚したラーマナ王は、王権を末弟ビーマセーナに委譲した。シーターの美貌が他の男達の目に止まってはならないと考え、夫婦で森に移り住むことにした。次弟のラグマナ（Yid bsdus / La ghū ma na）³⁹も同行し、愛し合う夫婦に仕えるか

³⁵本作品を含む多くのチベットに伝わるラーマナヤナにおいて、Hanumat の代わりに*Hanumantha という語形が用いられる。この語形をサンスクリット文法に基づいて正当化することはできないが、本研究ではチベットの伝統を尊重して「ハヌマンタ」という表記を用いる。

³⁶マルトゥンが伝える物語では、ハヌマンタは「おまえの王権は猿によって滅びるがよい」と呪いをかける（*Sa legs 'grel pa* 191.1f.）。

³⁷マルトゥンが伝える物語では、シヴァの舌に乗り移ったサラスヴァティーが無条件の「不死」という言葉、そのような条件付きの不死を意味する言葉に変えてしまったことにより、シヴァはラーヴァナを騙す結果となる（*Sa legs 'grel pa* 191.10ff.）。チューワンタクパの物語では、シヴァの欺瞞は彼自身の無能力によるものとされている。

³⁸かつて Chandra Das は Rol rnyed ma というチベット語から*Lilavatīというサンスクリットを想定した（*Tibetan-English Dictionary*, s.v., rol rnyed）。しかし、その想定が誤りであることは de Jong 1972: 192 に指摘されている通りである。

³⁹ラクシュマナ（Lakṣmaṇa）のことであるが、本作品では Laghu、*Laghuna、*Laghūmana、Yid bsdus などの名称で呼ばれる。*Laghuna および*Laghūmana はサンスクリット文法では正当化できない語形である。laghumanas の転訛形であろうか。Yid bsdus というチベット語の意味や、この人物が禅定の実践を行なう行者であることから推測すると、これらの名称は「軽やかな心を持つ者」あるいは「（外界対象から）心を閉

たわら、森で静かな瞑想に耽った。

6. ラーヴァナ、鹿の姿に化ける 悪魔ラーヴァナはシーターの美貌の噂を聞く。シーターが自らの血を引く娘であることも知らず、ラーヴァナは彼女を略奪しようと画策し、鹿の姿に変身して花園に現れた⁴⁰。シーターには鹿の肉を食べたいという欲望が生まれ、躊躇するラーマナに向かって、鹿を狩りに行くように要求した。

7. ラーマナ、鹿を追って行く ラーマナは妻シーターと弟ラグマナを守るために光の壁を作って二人を囲んでから、鹿を追って出かけて行った⁴¹。

8. ラグマナ、兄を探しに行く 帰りが遅いラーマナを心配するシーターは精神錯乱に陥り、ラグマナに罵詈雑言を浴びせた。耐えられなくなったラグマナは兄ラーマナを探すために旅に出る。旅先で兄弟は再会するが、鹿の本性を知ると、森へ引き返すことにした。

9. ラーヴァナ、シーターをさらって羅刹の国に行く ラーマナが狩りに失敗している間、シーターは悲しみにくれていた。ラーヴァナは仙人の姿をとってシーターに接近し、光の壁で囲まれたシーターを周囲の地面もろとも運んでランカー島に連れて行った。

10. シーター、羅刹の国で嘆き悲しむ 羅刹が住むランカー島で幽閉されたシーターは自らの言葉の過ちを責め、ラーマナを鹿を捕まえに行かせてしまったことを心から悔んで懊悩の日々を送った⁴²。

11. ラーマナ兄弟、森に帰る ラーマナとラグマナの兄弟は森に戻った。シーターが誘拐されたことを知ったラーマナは衝撃のあまり気絶してしまう。ラグマナがかけた清水のおかげで、ラーマナは目を覚ました。

12. ラーマナ、猿王スグリーヴァに出会う ラーマナはラグマナを連れ、妻シーターを探す旅に出た。道中で兄弟はスグリーヴァという猿の王に出会う。ラーマナはシーター誘拐の経緯をスグリーヴァに話した。一方でスグリーヴァは彼を苦しめているバーリンという邪悪な猿のことをラーマナに話した。一致団結した彼らは初めにバーリンを退治した後、協力してシーターを奪還することを決意した。

13. ラーマナ、バーリンを敗る スグリーヴァとラーマナは、バーリンとの戦いに挑んだ。二匹の猿が熾烈な戦闘を開始すると、ラーマナは手出しができず、激しく絡み合う二匹のいずれ

ざした者」を意味すると思われる。本研究では「ラグマナ」という表記を用いることにする。なお、敦煌版のラーマナでは、この人物は*Lagśana という名で呼ばれる (de Jong 1972: 194)。これは Lakṣmaṇa の転訛形かもしれない。

⁴⁰ リンブンパヤカムトゥルが伝える物語では、羅刹女が鹿の姿に変身して現れ、ラーマナが鹿を追いかけている内に、ラーヴァナがバラモンの姿になってシーターに接近している (Seng ge'i nga ro 290.22ff.; Rol mtsho 436.15f.)。

⁴¹ マルトゥンが伝える物語では、シーターに誘惑されそうになった弟ランクマナ (Lang ku ma na) が自らの梵行を貫くため、彼女の周囲に光の壁を作っている (Sa legs 'grel pa 192.18ff.)。

⁴² シーターの嘆きの場面はマルトゥンが伝えるラーマナ物語には存在しない。この箇所はチューワンタクパの創作であろう。

が敵バーリンであるのかさえ判別できなかった。そこでスグリーヴァは自らの腕に月の印を付け、ラーマナはその印を頼りにもう一方のバーリンを見出し、弓で仕留めることに成功した⁴³。

14. ハヌマンタ、シーターを探し出す 猿王スグリーヴァに仕える猿の大臣ハヌマンタ（シヴァの息子でもある）は主人の命令に従って、シーター捜索を引き受けた。ランカー島に行こうとしてハヌマンタが飛び跳ねると、あまりに強い跳躍力のために、彼の母の一族が住む風神の国に行ってしまった。ハヌマンタは元の場所に引き返した後、再び跳躍してランカー島にあるラーヴァナの庭園に辿り着いた。まもなく囚われのシーターを発見すると、自らがラーマナの使者であることを伝え、一緒に逃げようとする。シーターは悲しみに打ちひしがれていたが、持ち前の自尊心から、島から逃亡することは不名誉な振る舞いであるとして、逃亡を拒絶した。

15. ハヌマンタ、羅刹の軍勢に捕らえられる ハヌマンタは羅刹の軍勢に捕らえられた。処刑されそうになったハヌマンタは羅刹達に向かって、二種の殺害方法のいずれかを選ぶように懇願する。第一は彼に一杯のご馳走を食べさせて窒息死させるという方法であり、第二は彼の尾に油を塗り、火をつけて殺害するという方法である⁴⁴。

16. ハヌマンタ、羅刹の国を焼き討ちにする 羅刹達は後者の方法を選び、ハヌマンタの尾に火をつけた。すると、その火がランカー島全体を燃やす程の勢いになった。海にいる龍の力によって火は鎮められた。

17. ラーマナ、ラーヴァナを征伐する ハヌマンタはラーマナのもとに帰還した。ラーマナは猿の軍隊を組織して進軍した。ランカー島の対岸に到着すると、聖仙ヴァールミーキが、海の中には魚を食べるティミ (timi) という生き物がいて、さらにそのティミを食べる凶暴な生き物と、その生き物を食べる最も凶暴な生き物がいることを告げる⁴⁵。猿の軍隊が協力して海に橋をかけ⁴⁶、ランカー島に軍隊を進めた。羅刹の大群との激しい戦争の末、ラーマナはハヌマンタの忠告に従って、ラーヴァナの十の首の中央にある馬の首を切り落とし、勝利を取めた⁴⁷。ラーマナはシーターを取り戻し、元の住居と幸せな暮らしを手に入れた。

⁴³ マルトゥンの物語では、この戦争は三日間にわたって行われている。スグリーヴァは額 (dpral ba) に鏡 (me long) を付けることによって目印としている (*Sa legs 'grel pa* 193.8ff.). リンプンパヤカムトゥルが伝える物語では、戦闘の一日目にラーマナはただ眺めているだけであり、二日目になってスグリーヴァに加勢しようとしたが、激しく絡み合う二匹のいずれが敵でいずれが味方であるかを判別できず、三日目にスグリーヴァが額に鏡を付けたので、バーリンを見出し、弓で仕留めている (*Seng ge'i nga ro* 291.20ff.; *Rol mtsho* 437.16ff.).

⁴⁴ マルトゥンが伝える物語によると、前者は「母の方法」(ma'i lugs) であり、後者は「父の方法」(pa'i lugs) である (*Sa legs 'grel pa* 195.4ff.). 敦煌版ラーマナヤナの記述から分かるように、前者はハヌマンタの母が殺害された方法であり、後者はハヌマンタの父が殺害された方法である (A256–272, E 240–253; de Jong 1972: 196).

⁴⁵ 海の魚を食べるティミ (timi)、そのティミを食べるティミンギラ (tимиngila)、そのティミンギラを食べるティミティミンギラ (timitимиngila) という三種の怪物が『ディヴィア・アヴァダーナ』(*Divyāvadāna*) の「ダルマルチ物語」に言及される (de Jong 1983: 172).

⁴⁶ カムトゥルは、この橋の痕跡がインドのランカー島対岸に残っており、聖地として崇拝の対象になっていること、羅刹が流した血で赤く染まった岩山が南インドにあり、セートゥバンダ・ラーメーシュヴァラ (setubandharāmeśvara) という名で知られていることを記録している (*Rol mtsho* 439.3ff.).

⁴⁷ リンプンパとカムトゥルは、ラーマナが数多くの羅刹を殺害した罪を清めるために、カリユガ期に仏陀というヴィシュヌの化身となって世界に出現したというインドの伝承に言及している (*Seng ge'i nga ro* 293.16ff.; *Rol mtsho* 439.19ff.).

18. ラーマナ軍の兵士達を復活させる 羅刹の残党が結集し、ラーヴァナの弟で行者のウパカルナ (Upakarṇa)⁴⁸の神通力に頼って、ラーマナとハヌマンタを除く全ての猿の兵士達とシーターを骸骨の姿にしてしまった。ハヌマンタは雪山カイラーサを引き抜いて魔法の薬草を手に入れ、皆を復活させた。物語はハヌマンタがカイラーサを元の位置に戻し、その山頂がいびつに傾いたところで終わっている。

このように『ラーマナ王物語』にはヴァールミーキ版の『ラーマヤナ』とは異なる点が多くある。主人公の名前はラーマ (Rāma) ではなく、ラーマナ (Rāmaṇa)⁴⁹である。ヴィシュヌ神がラーヴァナ退治のために人間として化身する場面の描写はない。物語はラーヴァナがシヴァ神に対して供犠を実行する場面から始まる。シヴァは全知全能の神ではなく、ラーヴァナに不死の境地を授けることができない。自尊心が強くユーモラスなキャラクターとして描かれる猿のハヌマンタはシヴァの息子である。ラーマナは王子ではなく、既に王座に就いている。この物語に父王のダシャラタ (Daśaratha) は登場せず、王妃カイケーイー (Kaikeyī) とその息子のバラタ (Bharata) 王子も登場しない。ラーマナはシーターと結婚後、自らの意思でその地位を放棄している。シーターはジャナカ王の娘ではなく、悪魔ラーヴァナの娘であり、バラモンの不吉な予言により、箱に入れられて川に流された後、農夫達によって見出される⁵⁰。シーターは清純な女性というよりも、むしろ悪魔的な性格を有し、しばしば嫉妬や怒りに駆られて我を忘れる悪女として描かれる。勇敢な弓の名手ラーマナも、シーターの怒りや精神錯乱に振り回されてしまう。そうした女の悪魔的感情に翻弄されるラーマナの惨めな姿を、チューワンタクパは冷めた目で描写している。

中国やコータンに伝わるラーマヤナ物語とは異なり、『ラーマナ王物語』に仏教的要素は希薄である。敢えて挙げるとするならば、ここに登場するシヴァが世界の創造と破壊を司る最高神ではなく、衆生の生と死を支配する力を持たず、ラーヴァナに欺瞞を働く神として描写される点は仏教的脚色によるものといえようか。この作品の最大の特徴は心情の機微の精緻な表現にある⁵¹。

⁴⁸ マルトゥンが伝える物語ではクンバカルナ (Kumbhakarṇa) という名前になっている (*Sa legs 'grel pa* 196.4)。敦煌版のラーマヤナではクンバカルナ (Bum rna) の挿話がラーヴァナとの最終戦争の前に置かれている (A301–311; de Jong 1972: 196f.)。

⁴⁹ 本作品を含む多くのチベットに伝わるラーマヤナにこの語形が見られる。rāmaṇa は使役語幹から派生した語形 (ram + ṆiC + Lyuṭ) であり、「喜ばせる人」を意味する。rāmaṇa のチベット語訳 dga' bar byed pa (もしくは dga' byed) もその意味で理解し得る。ところが、興味深いことに註釈者シェルシュルワは rāmaṇa に使役主体の意味を認めておらず、この語を「喜ぶ人」の意味で理解している。使役主体の意味を持たない rāmaṇa という語の形を正当化するために、彼はアヌブーティ (Anubhūti) の『サーラスヴァタ文典』(*Sārasvatavyākaraṇa*) に依拠して次のような説明を与える。[1] 動詞語根 ram 「喜ぶ」「戯れる」に Kṛt 接辞 yu が導入される。[2] yu 接辞に ana が代置される。[3] ana 接辞の n 音に反舌音 ṇ が代置され、ram-の最初の母音 a にヴリッディ (vr̥ddhi) の ā 音が代置される。以上により rāmaṇa という語形が成立する。[4] rāmaṇa は行為者名詞であり、「喜ぶ人」(dga' bar byed pa) もしくは「戯れる人」(rtsed mo byed pa) を意味する (*'Bab stegs* 68.2ff.)。

[1] SV_D 8a3f. (cf. A 3.1.134): pa tsi na nī gra hā sogs la a yu ṇi ni'o || (「動詞語根 pac 群、nand 群、grah 群の後にそれぞれ a 接辞、yu 接辞、ṇi 接辞が起こる。)」 [2] SV_D 8a3 (cf. Kāśikā on A 7.1.1): yu bu dag gi a na a ka dag go || (「yu に ana が、vu に aka が代置される。)」 [3] SV_D 2b7f. (cf. A 8.4.1): ṣa ra rī las mtha' ma yin pa'i na'i ṇa'o || (「ṣ 音、r 音、ṛ 音のいずれかに後続し、最終音でない n 音に ṇ が代置される。)」; SV_D 5a1 (cf. A 7.2.116): dbyangs dang po'i n ny 'gro ba la'ang 'phel ba'o || (「さらに、ṇ または ṅ を指標辞とする接辞が起こる時、最初の母音にヴリッディが代置される。)」

⁵⁰ シーターをラーヴァナの娘とする設定は敦煌文書にある古チベット語のラーマヤナに既に見られる他、ジャイナ教の中に伝わる伝承や、カシミール、コータン、ラオス、マレーシアに伝わったラーマヤナに共通して見られる (Kapestein 2003: 760, fn. 43; 榎 1940: 145; 原 1978: 526ff.)。

⁵¹ Rgya ye bkra bho (ed.) 2008: 699 で指摘しているように、『ラーマナ王物語』が主眼とするのは物語のあらすじを記述すること (gtam rgyud kyi byung rim brjod pa) ではなく、情景や人物の心情を精緻に描写すること (khor yug gi rnam pa dang mi sna'i nyams 'gyur zhib tu 'bri ba) である。物語のあらすじは作品のスケッチ (skya thig) のようなものを与える副次的な要素に過ぎず、情景と心情の描写の方が作品の主要素となっている。この点において『ラーマナ王物語』は極めて独創的な叙事詩であるといえる。

作者が観察したであろう現実の人間の様々な感情が登場人物に付託され、それらがダンディンの『詩鏡』に規定される修辞法によって鮮明に描写される。『ラーマナ王物語』はゲルク派の仏教僧によって書かれたものとしては極めてまれな純文学的作品である。

3.4 『ラーマナ物語』の文体

『ラーマナ物語』の全ての詩で、ダンディンの『詩鏡』に規定される諸々の修辞法が用いられる。チューワンタクパが用いる修辞法の分析は次稿で行なうことにしたい。以下では『ラーマナ物語』の文体の特色を論じる。

『ラーマナ物語』は、例えばマーガ (Māgha) の『シシュパーラ・ヴァダ』 (*Śiśupālavadhā*) を彷彿とさせるような、極めて技巧的で難解な文体で書かれている。現代の学僧にして詩論家であるセツァン・ロサン・ペルデンは、チューワンタクパをガウダ様式 (Gauḍī) の文体を好む詩人として分類している⁵²。平明で端正な南インドのヴィダルバ様式 (Vaidarbhī) とは対照的に、東インドのガウダ様式で書かれた文章は技巧的で難解であり、極端に長い複合語の使用や、世間の常識を逸脱する誇張表現の使用などを特徴とする。ここでは『ラーマナ王物語』に見られる誇張表現の実例を見てみよう。

以下に引用するのはシーター誕生を描写した第37詩節である。ここに註釈者達はガウダ様式に特有の「愛らしさ」 (mdzes pa, *kānti) という美質 (yon tan, *guṇa) を認めている。

དེ་ནི་རྒྱལ་སྲིད་འཛིན་མ་ལ།
 འཕྲིན་ཡིག་རྒྱང་རྗེས་འགོད་པ་ན།
 རྒྱ་མཚོའི་མངལ་ནས་རྒྱ་དཀར་བཞེན།
 འཛི་མེད་སུ་མེདེ་ལང་ཚོ་ནི།
 ལྷོ་སུར་ཉིད་དུ་རྫིངས་བྱེད་པ།
 མདངས་བཀྲ་སུ་མོ་མཛེས་མ་བཅས།

de ni rgyal srid 'dzin ma la ||
 'phrin yig rkang rjes 'god pa na ||
 rgya mtsho'i mngal nas zla dkar bzhin ||
 'chi med bu mo'i lang tsho ni ||
 glo bur nyid du rnyings byed pa ||
 mdangs bkra bu mo mdzes ma btsas ||

彼（ラーヴァナ）が王政という地に
 勅書という足跡を残していた頃
 海という子宮から白い月が誕生するように
 神々の娘達の若さ溢れる魅力を
 たちまち色褪せたものにしてしまう
 色鮮やかに輝く美しい娘が誕生した。(37)

⁵²セツァン・ロサン・ペルデンはヴィダルバ様式の文体を好むチベットの書き手としてプトゥン・リンチェンドゥブ (Bu ston rin chen grub: 1290–1364)、ツォンカパ・ロサントクパ、ギェルツァプジェ・タルマリンチェン (Rgyal tshab rje dar ma rin chen: 1364–1432)、クンタン・テンペードゥンメ (Gung thang bstan pa'i sgron me: 1762–1823) の名を挙げ、ガウダ様式の文体を好む書き手としてはケードゥブジェ・ゲレク・ペルサンポ、シャンシュン・チューワンタクパ、ダライ・ラマ5世ガワン・ロサン・ギャンツォ (Ngag dbang blo bzang rgya mtsho: 1617–82)、ジャムヤンシェーパ・ガワン・ツォンドゥ ('Jam dbyangs bzhad pa ngag dbang brtson 'grus: 1648–1721) の名を挙げている (*Snyan ngag 'jug sgo* 53.20ff.; Nemoto 2014: 305)。

6詩脚で一つのまとまりをなす詩である。それぞれの詩脚は7音節で構成される。第1・2詩脚では「王政＝地」、「勅書＝足跡」という隠喩（gzugs can, *rūpaka）が用いられ、第3詩脚では乳海攪拌の神話に基づく「海という子宮から白い月が誕生するように」という比喩表現が用いられる。「海」はシーターを産んだ母の子宮を表す直喩（dpe, *upamā）であり、「月」は美しい娘シーターを表す直喩である。第6詩脚に現れる「色鮮やかに輝く」（mdangs bkra）という性質は「月」と「娘」の両者に共通して成立する属性である。

ここで注目すべきは、第4・5詩脚の「神々の娘達の若さ溢れる魅力をたちまち色褪せたものにしてしまう」という表現である。神々の娘達の魅力が減ぜられるというのは、古典期の詩人達が共有する常識ではあり得ないことである。このように世間の常識を逸脱して語られた誇張表現をガウダ地方の人は愛好するとダンディンと言う。

「まるで非常識のようですらあり、極度に空想して語ろうと意図された内容によって賢者達はとても満足する。他の人々はそれでは満足しないのであるが。例えば以下の例のように⁵³。

[例文1] 今日から私達の家は、神の住居のように崇拜されるべきである。なぜなら、そこにあなたの両足の塵が落ちたことによって完全に罪が清められたのだから⁵⁴。

[例文2] ここなる貴女の両胸の膨らみがこのようなものになるであろうとは全くよく考えもせず、創造主は小さな天空を創造したのだ⁵⁵。

これは誇張表現であると言われる。これがガウダ人に好まれる。一方、先程示した手法はもう片方の道の真髄である。⁵⁶

第一の例文は「あなた」の偉大さを述べたものであり、第二の例文は「貴女の両胸の膨らみ」の大きさを述べたものである。いずれも世間の常識を逸脱して、過度な空想を膨らませた誇張表現である。なお、『詩鏡』第1章第89詩節の「賢者達」（vidagdha, mkhas pa）とそれに対比される「他の人々」（itara, cig shos）がそれぞれガウダ人とヴィダルバ人を指しているのか、それとも世間の賢者と愚者を指しているのかという問題がプーケーパ・ミパム・ゲレク・ナムギェル（Bod mkhas pa mi pham dge legs rnam rgyal: 1618–1685）の『詩鏡』註釈に論じられ、彼は後者の解釈を支持するのであるが、今その問題に立ち入る必要はないであろう⁵⁷。いずれにせよ、ここに引用したダンディンの説明が示すように、シーターの美しさを「神々の娘達の若さ溢れる魅力をたちまち色褪せたものにしてしまう」と表現する上掲の詩は、間違いなくガウダ様式の手法を模倣したものである。

さらに、『ラーマナ王物語』に現れるもう一つの誇張表現の例を見てみたい。以下はシーターの美しさの虜になった男達を描写する第50詩節である。

⁵³KĀ I 89: lokāṭita ivātyartham adhyāropya vivakṣitaḥ | yo 'rthas tenātituṣyanti vidagdha netare yathā ||; 'jig rten 'das shing brjod 'dod kyis || don gang shin tu bkod gyur pa || de yis mkhas pa shin tu ni || tshim 'gyur cig shos ma yin dper ||

⁵⁴KĀ I 90 (cf. KĀ I 86): devadhiṣṇyam ivārādhyaṃ adya prabhṛti no gṛham | yuṣmatpādarajaḥpātadhautāniḥṣeṣakilbiṣam ||; deng nas bzung ste bdag gi khyim || lha yi khyim bzhin bsten par 'os || khyod kyī zhabs rdul lhung ba yis || nyes pa dag ni ma lus bkruṣ ||

⁵⁵KĀ I 91 (cf. KĀ I 87): alpaṃ nirmītam ākāśam anālocyaiva vedhasā | idam evaṃvidhirī bhāvi bhavatyāḥ stanajṛmbhaṇam ||; khyod kyī nu ma 'di lta bur || rnam par rgyas par 'gyur ba 'di || nges par ma brtags byed po yis || nam mkha' dag ni chung ngur sprul ||

⁵⁶KĀ I 92: idam atyuktir ity uktam etad gauḍopalālitam | prasthānaṃ prākpraṇītaṃ tu sāram anyasya vartmanāḥ ||; 'di ni ha cang brjod pa 'di || gau ḍa pa la mdzes par brjod || 'jug pa snga ma gzhan gyī ni || lam la snying po nyid du bshad ||

⁵⁷Danḍi'i dgongs rgyan 184.11ff. を参照。また、この問題がカンブムの『ラーマナ王物語』註釈（Dgongs rgyan 54.11ff.）にも言及される。

སྐྱེ་རྒྱུ་འི་རིག་སྐྱེ་སྐྱེ་མཁན་དེ་རྣམས། །
 སྐྱེ་རྒྱུ་མིང་གི་བཟླས་བཤོད་ཀྱིས། །
 འགྲམ་པ་རུས་པའི་འཕུལ་འཁོར་ནི། །
 དལ་བ་རུ་མའི་ངོས་སུ་འཕུང་། །

skye rgu'i rig sngags mkhan de rnam ||
 sī tā'i ming gi bzlas brjod kyis ||
 'gram pa rus pa'i 'phrul 'khor ni ||
 dral ba nu ma'i ngos su 'phyang ||

かの男達という呪術師達は
 シーターの名を唱えてばかりいたので
 頬骨という絡繰り装置は
 壊れて両胸にぶら下がっていた。(50)

「呪術師達」は世の中の男達を表す隠喩である⁵⁸。シーターに熱狂する彼らは、頬が削げ落ちるまで、シーターの名をまるで呪文のように唱え続けていた。その結果、男達の頬骨は顔面から脱落し、両胸にぶら下がる状態にまでなったというのである。これもまた世間の常識を逸脱して語られた誇張表現である。

チューワンタクパはシーターの美しさを極度に誇張すると同時に、世の中の男達の愚かさを極度に誇張して描く。これらの詩の中には作者自身の人間観が反映されていると考えて良いであろう。シーターの美貌とその悪魔的精神に翻弄される男の姿を、チューワンタクパはまさしく仏教者の眼差しで冷静に眺めているのである。

3.5 翻訳研究について

ここに提示する翻訳は、2013年から2014年に青海師範大学（青海省・西寧）で実施した、扎布（Rgya ye bkra bho, ギャイ・ジャブ）と根本裕史の二名による共同研究の成果である。

共同研究会において『ラーマナ物語』本文の翻訳を検討した後、シェルシュルワの註釈（'Bab stegs）、カンブムの註釈（Dgongs rgyan）、ジャバの註釈（Mun sel）、トンドゥブギャの講義音源⁵⁹を精査して訳註を施し、最終的な取りまとめを根本が行なった。

『ラーマナ物語』の読解に当たっては、『チベット歴代文学作品選《金塊》』（Gser）、ティンプーで出版された手書き写本の影印版（Thimphu）、シェルシュルワの註釈に示される本文（Zhal）、カンブムの註釈に示される本文（Mkha'）、ジャバの註釈に示される本文（Bkra）の五版を参照し、校合を行なった。

1. Gser:

Gangs ljongs mkhas dbang rim byon gyi rtson yig gser gyi sbram bu. Ed. Blo bzang chos grags and Bsod nams rtse mos bsgrigs. Xining: Mtsho sngon mi rigs dpe skrun khang. 1988–1989.

⁵⁸あるいは「呪術師達」は隠喩ではなく、呪術に精通する大聖仙達（drang srong chen po rnam）を指しているとも解釈できる（本稿の翻訳研究を参照）。この解釈によれば、輪廻の本質を理解している聖仙達ですらシーターの魅力に取り憑かれて自制心を失い、本来唱えるべき真言を忘れて、代わりにシーターの名を唱えるようになったという意味になる。

⁵⁹以下の訳註では「Track 1, 7:10」のように、mp3音源のトラック番号と分・秒数を示す。なお講義音源をインターネット上で聴くことが可能である（<https://soundcloud.com/serajeyrigzodchenmo/sets/llqmaawrreg0> [2021年3月1日閲覧]）。

2. **Thimphu:**

Kāvya Texts from Bhutan: Reproductions of a Collection of Eleven Manuscripts of Works by Druñ-yig Rta-mgrin-dban-rgyal, Bod mkhas-pa Mi-pham-dge-legs-rnam-rgyal, Žan-žun Chos-dbang-grags-pa, and Bo-doñ Pañ-chen Phyogs-las-rnam-rgyal from the Monastery of Dpal-ri Rdo-rje-gdan (Nor-bu-sgan). Thimphu. 1976.

3. **Zhal:**

Rgyal po rā ma ṅa'i gtam rgyud las brtsams pa'i snyan ngag gi bstan bcos dri za'i bu mo'i rgyud mang gi sgra dbyangs kyi 'grel ba dri med shes gyi 'bab stegs (Zhal shul ngag dbang bstan pa'i rgya mtsho). In Rā ma ṅa'i rtogs brjod. Chengdu: Si khron mi rigs dpe skrun khang. 1995.

4. **Mkha':**

Rā ma ṅa'i rtogs brjod chos dbang grags pa'i dgongs rgyan (Mkha' 'bum). Lanzhou: Kan su'u mi rigs dpe skrun khang. 2000.

5. **Bkra:**

Zhang zhung pa'i rā ma ṅa'i rtogs brjod kyi 'grel pa skal ldan yid kyi mun sel (Bkra bha). Xining: mtsho sngon mi rigs dpe skun khang. 2018.

カンブムの註釈に与えられる章立てを採用し、詩節の区切りを任意に行なった。便宜的に詩節番号を与え、和訳の末尾にそれを示した。サンスクリット辞書学（mngon brjod, abhidhāna）の知識に由来する詩的語彙が用いられる箇所では、その表現が指示する意味を提示し、直訳を括弧内に与えた。例えば、風（香りの乗り物）、山（財を保持する者）、シヴァ（骸骨を手にする者）などのようにである。

4 翻訳研究

ལྷུ་པོ་རྒྱ་མ་ཚའི་གཏམ་རྒྱུད་ལས་བརྒྱུས་པའི་སྣེ་དང་གས་ཀྱི་བསྟན་བཅོས་དྲི་བའི་བྱ་མོའི་རྒྱུད་མངས་ཀྱི་སྣ་དབྱངས་
ཞེས་བྱ་བ།

ラーマナ王の物語に基づく詩書：ガンダルヴァの天女が奏でるヴィーナーの音色

[0] 序

ཚངས་པའི་བྱ་མོ་དབྱངས་ཅན་མ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །

ブラフマン神の娘サラスヴァティーに帰命する。

སློབ་བཟང་གཞལ་མེད་ཁང་ཆེན་དུ། །

བསོད་ནམས་རིན་ཆེན་ལ་ཆགས་ཏེ། །

བདག་ཉིད་ལ་ནི་སྦྱིང་ཉེ་བ། །

སངས་རྒྱས་དབང་གི་རྒྱལ་པོར་འདུད། །

1a: གཞལ་མེད་] Σ; རྒྱལ་པོར་ Bkra.

1b: ཆགས་ཏེ་] Σ; ཆགས་པ་ Bkra.

1c: ཉེ་བ་] Σ; ཉེ་བས་ Thimphu.

測り知れない叡智という大宮殿で
福德という宝物の只中に出現し
他ならぬ私に御心を寄せて下さる
仏陀という自在王宝に頂礼する。(1)

blo bzang 「叡智」 輪廻的生存という一つの極端を終息させる手段 (srid mtha' 'gog byed) となる智慧⁶⁰。甚深なる諸事物の実相をありのままに知る仏陀の智慧である ('Bab stegs 14.12f.)。この「ロサン」(blo bzang) という語は、作者自身の師でもあるゲルク派の祖ツォンカパ・ロサンタクパ (Tsong kha pa blo bzang grags pa) を暗示する。

gzhal med 「測り知れない」 トンドゥップギャによると、「測り知れない価値を有する」(rin thang gzhal du med pa)、もしくは「測り知れない広さを有する」(rgya khyon gzhal du med pa) という意味である。いずれの意味で理解しても良い (Track 1, 7:10)。

bsod noms 「福德」 寂静というもう一つの極端を終息させる手段 (zhi mtha' 'gog byed) となる菩提心など ('Bab stegs 14.13f.)。

chags te 「出現し」 ここでの動詞 chags は thon 「出現する」の意味である ('Bab stegs 14.15)。chags には「固着する」「執着する」「愛好する」などの意味もあるので、「福德という宝物を愛好する」

⁶⁰AA I : prajñayā na bhavē sthānam kṛpayā na śame sthitiḥ | (「智慧によって輪廻的生存に依拠することがなく、悲心によって寂静に依拠することがない。」)

Don bdun cu 13a1f.: srid mtha' la mi gnas pa'i gzhi shes kyi mtshan nyid ni | thabs snying rje chen pos zin cing mi rtag sogs bcu drug gang rung mngon sum du rtogs pa'i theg dman gyi rtogs rigs su gnas pa'i theg chen 'phags pa'i mkhyen pa de de'i mtshan nyid | (「輪廻的生存という極端への不依拠をもたらす事智の定義：大悲という方便と連合しており、〔十六行相に含まれる〕無常性などのいずれかを直接知覚に基づいて証得する、小乗の証得の部類に属する大乘聖者の智慧——これがその定義である。」) ; Don bdun cu 13a3f.: yang kun rdzob la ltos pa'i zhi mtha' 'gog byed kyi rigs su gnas pa'i theg chen 'phags pa'i mngon rtogs de | snying rjes zhi la mi gnas pa'i lam shes kyi mtshan nyid | (「また、世俗的存在に依存する寂静という極端を終息させる手段の部類に属する大乘聖者の現観——それが悲心による寂静への不依拠をもたらす道智の定義である。」)

と解釈することも可能。また、ジャバは chags pa という異読を採用し、...chags pa を bdag 「私」と同格の形容詞句とみなして「福德という宝物の只中に出現した私」と解釈する (*Mun sel* 2.10ff.)。

bdag nyid la ni snying nye ba 「他ならぬ私に御心を寄せて下さる」 作者自身が守護者によって保護されるに値するような充分な内的要因を完備していること (skyabs kyis skyob par rung ba'i nang gi rgyu tshogs tshang ba) を表している (*'Bab stegs* 15.1f.)。

sangs rgyas 「仏陀」 トンドゥプギャが示す別解釈によれば、sangs rgyas は「仏陀」を意味するのではなく、「一切の過失が清められ (sangs) 一切の功德が広がって行く (rgyas) 如意宝珠のようなあなた」すなわちツォンカパ・ロサンタクパを意味する (*Rol mtsho* 307.7ff.)。

dbang gi rgyal po 「自在王宝」 サンスクリットで「ヴァシラージャ」(vaśīrāja) という。『華嚴経』「入法界品」などに現れる宝石の名前⁶¹。一切衆生にとっての一次的または究極的な全ての希求対象を望み通りに授けてくれるもの ('gro ba mtha' dag gi gnas skabs dang mthar thug gi dgos 'dod ma lus pa yid bzhin du stsol ba) である。敬礼対象である仏陀を表す隠喩である (*'Bab stegs* 15.3f.)。一方、トンドゥプギャが示す別解釈によると、ここでの敬礼対象はツォンカパであり、「自在王宝」はツォンカパを表す隠喩である。トンドゥプギャはシェルシュルワの解釈を批判し、ツォンカパと作者が師弟関係にあるという事実や、詩の冒頭にある「ロサン」という表現の存在を根拠に、この詩の敬礼対象はツォンカパ・ロサンタクパであると主張する (*Rol mtsho* 307.11ff.)。本作品の内容が仏教と無関係であることもまた、彼がシェルシュルワの解釈を退ける理由の一つである (*Rol mtsho* 309.1ff.)。ジャバもトンドゥプギャに従い、「自在王宝」はツォンカパを指していると考えられる。言い伝えによると、本作品が書かれた目的は「ゲルク派に真の詩人はいない」(dge lugs pa la snyan ngag pa med) という当時の風評を払拭するためであったという。もしこの口伝が正しければ、作者が作品冒頭でゲルク派の祖ツォンカパを称え、その薫陶を受けた作者自身にも優れた詩を書くだけの十分な能力が備わっていることを主張しているのだという理解にも十分な根拠はある (*Mun sel* 3.12ff.)。

ལྷོས་གར་སྣམ་ཚོག་རོ་འཛིན་དང་། །
 བུལ་བའི་སྐྱེ་བོ་སྐྱགས་པ་སྟེ། །
 དེ་ལྟ་བུས་ན་སྐྱེ་སྣམ་དག །
 འདོད་པས་དབྱེད་ཅན་མགྲིན་པར་བསྟེན། །

2a: རོ་འཛིན་] Σ; རོ་ལྷན་ Thimphu.

2b: སྐྱེ་བོ་] Σ; སྐྱེ་བ་ Thimphu. སྐྱགས་པ་སྟེ་] Σ; སྐྱགས་པ་ཡིན་ Bkra.

2c: དེ་ལྟ་བུས་ན་] Σ; དེ་ལྟ་བུས་ན་ Bkra. སྣམ་དག་] Σ; སྣམ་དག་ Thimphu.

2d: བསྟེན་] Σ; བརྟེན་ Zhal.

戯曲と美文詩という舌（味を捉えるもの）を

持たない人は啞者に他ならない。

それゆえ歌と美文詩を求める者は

サラスヴァティーを喉元に迎えて仕えるべきである。(2)

⁶¹GV 500.5ff. (cf. 梶山 1994: 369): tadyathāsti vaśīrājāṃ nāma maṇiratnaṃ yaj jambudvīpagatam eva catvāriṃśadyojanasahasrasthitānāṃ candrasūryamaṇḍalānāṃ bhavanavimānapratibhāsavyūhān saṃdarśayati | evam eva sarvaṅuṇapariśodhitāṃ sarvajñatācittotpādavaśīrājamaṇiratnaṃ saṃsāragatam eva dharmadhātugaganagocarāṇāṃ tathāgatamahājñānasūryacandramasāṃ sarvabuddhaviṣayamaṇḍalapatibhāsavyūhān saṃdarśayati | (「例えば、自在王宝という名前の宝石がある。それはまさしく閻浮提にありながらも、四万ヨージャナも離れた所にある月輪と日輪の大邸宅の宮殿の影像の見事な配置を映し出す。まさにそれと同じように、一切の美質によって清められたものである、一切智者性を目指す発心という自在王宝は、まさしく輪廻の中にありながらも、法界という天空を対象領域とする如来の偉大な智慧という日月の、あらゆる仏陀の対象領域の集合の影像の見事な配置を映し出すのである。)」)

ro 'dzin 「舌（味を捉えるもの）」 サンスクリットの *rasana* (< ras + Lyuṭ, 「味覚器官」「舌」) に由来するチベット語 *ro 'dzin* は *Ice* 「舌」を意味する詩的語彙である。*ro 'dzin* は文字通りには「味を捉えるもの」「味覚器官」であるが、ここでは発声器官としての「舌」を意味する。その「舌」は戯曲と美文詩を表す隠喩であり、「舌を持たない人」とは戯曲や美文詩の素養を持たない人のことである。

lkugs pa ste 「啞者に他ならない」 クシェーメンドラの『アヴァダーナ・カルパラター』に「詩がないと教養は鸚鵡の鳴き声に等しい」という類似表現が見られる⁶²。戯曲や詩に習熟していない者達への批判の言葉とも受け取れる (*Mun sel* 7.13ff.)。

glu snyan dag 「歌と美文詩」 「美しい歌」(*glu snyan pa*) という解釈も可能。シェルシュルワは「多くの情緒 (*nyams*, **rasa*) と心的状態 (*'gyur ba*, **bhāva*) を通じて語られた美文詩に関する理論 (*snyan ngag gi rig tshul dag*)」という意味で理解する (*'Bab stegs* 15.17)。

de lta bas na...bsten 「それゆえ... 仕えるべきである」 ダンディンの『詩鏡』に「名声を望む者達は常にサラスヴァティーに仕えるべきである」という類似表現が見られる⁶³。シェルシュルワは *brten* という読みを採用し、*brten par rigs so* 「依拠するべきである」と註釈する (*'Bab stegs* 15.19)。言葉を司る女神サラスヴァティーの加持を得て詩作に励んだ作者の強い自負と、他の詩人達に対する敵対意識が窺える表現である (*Mun sel* 7.17ff.)。

སྐྱོ་བོ་ལ་ཡི་བརྗོད་མཚན།
ངག་རིག་ཚོགས་ཀྱིས་ཕུག་འོས་ཏེ།
གང་གི་ལྷེ་ཡི་གེ་སར་རྩལ།
ངེས་པར་རྒྱད་མངས་མ་དོ།

3a: བརྗོད་] ཏ; བད་མ་ Zhal.

3d: མངས་] ཏ; མང་ Thimphu, Zhal.

そうした作家の口という最上の蓮華こそ
詩人達が敬礼するに値するものである。
その人の舌という雄しべの花粉の一つ一つが
まさしくヴィーナーを奏でる女神に等しいのだから。(3)

smra bo 「作家」 作家一般ではなく、サラスヴァティーを崇拜し、そのご加護を受けて見事な詩

⁶²Av-klp 53.14: *pāṇḍityena vinā vināśitadhyām vyartham nṛṇām jīvitam pāṇḍityam śukapāṭhaṣaṇḍham asamollāsam kavītaṃ vinā | kāvyam cārutaram vinā sahrdayais tattvāntarālocanām sūnyam nirjalakūpa-dīpakalanām antaḥ samālabate ||* (「教養がないと、知性が損なわれた人々の生活は無意味である。無比の輝きを有する詩がないと、人々の教養は鸚鵡の鳴き声のように無能である。その心が分かる風流人達による真実への内的明察がないと、いくら美しくても詩は無意味であり、内において枯れた井戸の中の灯火のように振舞う*。」 *Straube 2009: 273, n. 2によると、-*kalanām samālabate* は *verhält sich wie* 「~のように振舞う」、*erscheint wie* 「~のように現れる」を意味する言い回しである。) ; *mkhas pa nyid ni med na blo gros rnam nyams mi rnam 'tsho ba don yod min || mtshungs med rgyas pa'i snyan dngags med na mkhas pa nyid ni ne tso'i klog dang mtshungs || snying ldan rnam kyis nang gi de nyid dpyod pa med na rab mdzes snyan dngags ni || stong pa nyid de dben sa'i khron pa'i mar me bzhi du nang du bsten par 'gyur ||* (「教養がないと、知性が損なわれた人々の生活は無意味である。無比の輝きを有する詩がないと、教養は鸚鵡の鳴き声も同然である。その心が分かる風流人達による内なる真実への明察がないと、いくら美しくても詩は無意味であり、人里離れた土地にある*井戸の中の灯火のように内に仕えるものとなるであろう。」 *チベット語の *dben sa* はおそらく *nirjana*-という異読に基づく翻訳である。)

⁶³KĀ I 105ab: *tad astatandrait anīsam sarasvatī kramād upāsya khalu kīrtim īpsubhiḥ |* (「それゆえ、疲労がなくなり、名声を求める者達は必ず休みなしに、正しい順序に従ってサラスヴァティーに仕えるべきである。); *de phyr grags 'dod rnam kyis rtag tu ni || snyoms las med par rim pas dbyangs can bsten ||* (「それゆえ、名声を望む者達は常に怠ることなく、正しい順序に従ってサラスヴァティーに仕えるべきである。)

を書く作家のことである（'Bab stegs 16.16f.）。作者チューワンタクパ自身を指しているとも考えられる（Mun sel 10.2ff.）。

ngag rig tshogs 「詩人達」 詩作にたずさわる他の作家達のことである（'Bab stegs 16.17f.; Mun sel 8.13）。サラスヴァティーのご加護を受ける一流の作家は「最上の蓮華」であるが、その他の作家達は「凡庸な蓮華」に過ぎない。

rgyud mangs ma 「ヴィーナーを奏でる女神」 サラスヴァティーのことである。詩人の発声器官は、サラスヴァティーと同じように、識者の心を魅了する言葉の源（mkhas pa'i yid 'phrog pa'i ngag gi 'byung gnas）となる（'Bab stegs 17.1f.）。詩人の舌を女神に等しいものであると語るこの表現技法は、表現されるべき対象の本質を否認して敢えて別の様態で表したものであり、否認（apahnuti, bsnyon dor）という技法に相当する（'Bab stegs 17.8ff.; KĀ II 304, 307, 308）。

ཤེས་བྱ་མ་ལུས་རྒྱུད་མངས་ཀྱི།
ལོག་པའི་ནང་དུ་ལྷགས་པ་གང་།
སྒྲོ་གྲོས་སོང་སོས་བསྐྱེན་པ་ལས།
ཀུན་རྒྱུ་བྱེད་མཁས་མ་དེ་རྒྱལ།

4a: མངས་ཀྱི།] ཟ; མང་གི་ Thimphu, Zhal.

4b: གང་།] ཟ; དང་ Thimphu.

ありとあらゆる知識をヴィーナーの
胴体の中に収めていらっしやり
知性という指で奏でることによって
その一切を理解させる達人である彼女に勝利あれ。(4)

shes bya ma lus... 「ありとあらゆる知識を…」 あらゆる知識をヴィーナーの胴体の中に収めることは実際には不可能である。詩人の想像力による一種の誇張表現である。シェルシュルワによれば、これは非実在に関する直喩（'byung min gyi dpe, *abhūtopamā）という技法に相当するものである（'Bab stegs 17.20f.; KĀ II 38）。

rgyud mangs 「ヴィーナー」 サラスヴァティーが持っているヴィーナーは瑠璃（vaiḍūrya）で出来ていると言われている（'Bab stegs 17.16）。

rgyal 「勝利あれ」 サラスヴァティーに対する祈願の言葉（Dgongs rgyan 9.14）。ダンディンの『詩鏡』によると、大詩文の冒頭に置かれるのは祈願（āsis, shis brjod）と敬礼（namaskriyā, phyag bya）と主題提示（vastunirdeśa, dngos po nger par bstan pa）の三つのいずれかである⁶⁴。

[1] ラーヴァナ、シヴァ神に不死の境地を懇願する

འཇམ་གླིང་ངང་མའི་ཇེས་སོང་བ།
ངང་བའི་སྒྲོ་དཔོན་རྒྱལ་བ།
འཆར་ལའི་དམར་བ་ལ་ཆགས་པས།
ཇེས་སོང་ཨ་དི་གཞོན་ལུ་འོ།

⁶⁴KĀ I 14: sargabandho mahākavyam ucyate tv asya lakṣaṇam | āśir namaskriyā vastunirdeśo vāpi tanmukham ||; sargas bcings pa nyan dngags che || de yi mtshan nyid brjod par bya || shis brjod phyag bya dngos po ni || nges par bstan pa'ang de yi sgo ||（「章によって連結されたものが大詩文である。〔大詩文の構成要素であるサンガータ等の特徴は述べられない〕が、その特徴は以下に述べられる。祈願または敬礼または主題提示がその冒頭部である。」）

5b: རྩེ་ལབ་སྟེ།] ཟ; རྩེ་ལབ་སྟེ། Bkra.

5d: ཨ་དི་དི་] Zhal, Mkha', Bkra; ཨ་དི་དི་ Thimphu; ཨ་དི་ Gser.

ジャンプ洲という雌ハンサ鳥の後ろについて行く
ハンサ鳥達を率いる長はチャーマラ島である。
日の出の直前の赤光に魅了されて
後について行くのが太陽（アディティの若人）であるように。(5)⁶⁵

rjes song ba 「後ろについて行く」 チャーマラ島はジャンプ洲の支配下に置かれたもの (dbang du gyur pa) であり、ジャンプ洲の領域に属するもの (khong su gtogs pa) であることから、このように表現される (Track 2, 9:16)。

rnga yab 「チャーマラ島」 『阿毘達磨俱舍論』世間品によると、四大洲の間に浮かぶ八つの中洲 (antaradvīpa) の中の一つにチャーマラ島 (cāmara) がある。ジャンプ洲 (南瞻部洲) に従属する島である⁶⁶。ここではチャーマラ島が悪魔ダシヤグリーヴァの居住地として紹介されるが、後の描写では同じ島がランカー島とも呼ばれる。おそらく作者はチャーマラ島とランカー島を同一視しているのであろう。トンドゥブギヤによると、コントゥル・コンテン・ギャンツォ (Kong sprul yon tan rgya mtsho: 1813–1899) の『所知大全』(Shes bya kun khyab) に「チャーマラ島には羅刹のみが居住している」(rnga yab gling du srin po kho na gnas shing) という記述があり、タクルン・ガワン・ナムギェル (Stag lung ngag dbang rnam rgyal: 1571–1626) の『仏教史甚希海』(Chos 'byung ngo mtshar rgya mtsho) にも「チャーマラ島には羅刹がいる」(rnga yab gling na srin po) という記述が複数回現れるという (Track 1, 25:55)。

'char kha'i dmar ba 「日の出の直前の赤光」 太陽は、日の出の直前に出現する赤色を帯びた雲に魅了されて、その後について行くようにして昇って来る ('Bab stegs 19.18ff.; Dgongs rgyan 10.13f.)。ダンディンの『詩鏡』に「上昇時の赤色をまとった月」という類似表現がある⁶⁷。ツァン地方の伝本 (gtsang gi dpar ma) には 'char kha'i smra ba 「日の出の直前の話者」という読みもあるとのことであるが、おそらく誤記であろう ('Bab stegs 20.9ff.)。

a di'i gzhon nu 「太陽（アディティの若人）」 サンスクリットの āditya に由来する表現。nyi ma 「太陽」を意味する詩的語彙である。

དྲི་མེད་ལྷ་བ་ཚུ་ཤེལ་ལྷུ་མ་ལོང་རབ་ཡངས་པ་དཔག་ཚད་བྱེ་བའི་ལོར་ཡུག་གི།
ཤེལ་གྱི་རྩེག་འཇམ་འཇམ་འོད་ཀྱི་སྒྲིབ་བས་སྦྱེད་སྒྱུར་ཕྱི་ཕྱིར་སྒོས་ཤིང་བྱེད་བ་སྟེ།
ལ་དོག་ལྷ་ཡི་རིན་ཆེན་ཀ་བ་གཡོ་མེད་བཙུགས་པའི་འཇམ་འཇམ་ཚུན་པོས་བརྒྱུ་བྱིན་ལག་པ་སྟོང་པར་བྱེད།
པོ་བྱང་ལོར་ཡུག་ཀེང་ཤུའི་འབྲས་བུས་མེ་ཡི་གོགས་བཅས་པ་གཤེད་རྩེག་པ་ལྷ་བ་ལྷོས་བྱེད་གྲོང་ཁྱེར་དོ།

6a: ལོང་རབ་ཡངས་པ་] ཟ; ལོང་རབ་ཡངས་ Thimphu. དཔག་ཚད་] ཟ; ལྷུ་ཚད་ནི་དཔག་ཚད་ Thimphu.

⁶⁵第5詩節とそれに対するシェルシュルワの註釈は van der Kuijp 1996: 398f. に英訳されている。

⁶⁶AK III 56: dehā videhāḥ kuravaḥ kauravās cāmarāvārah | aṣṭau tadantaradvīpā sāthā* uttaramantriṇaḥ || (「それに属する八つの中洲とは、デーハ、ヴィデーハ、クル、カウラヴァ、チャーマラ、アヴァラ、シャータ、ウッタラマントリンとである。」 *Pradhan ed. は gāthā であるが、sāthā に訂正する。) ; AKBh 162.12f.: tatra dehavidehau pūrvavidehparivārau | kurukauravau uttarakuroḥ | sāthottaramantirṇāv* aparagodāniyasya | cāmarāvārau jambūdviṇṇasya | (「それらの内、デーハとヴィデーハは東勝身洲の従属者であり、クルとカウラヴァは北俱盧洲の従属者であり、シャータとウッタラマントリンは西牛貨洲の従属者であり、チャーマラとアヴァラは南瞻部洲の従属者である。」 *Pradhan ed. は gātho- であるが、sātho- に訂正する。)

⁶⁷KĀ II 89: ayam ālohitacchāyo madena mukhacandramāḥ | samnaddhodayarāgasya candrasya pratigarjati || (「酔いのせいで赤い輝きを持つこの顔という月は、上昇時の赤色をまとった月のようである。); KĀ_D325a2f.: myos pas kun du dmar pa yis || bkab pa bzhin gyi zla ba 'di || 'char ka'i dmar ba phun tshogs pa'i || zla ba la ni rab tu 'gran || (「酔いのせいで赤みを帯びたこの顔という月は、上昇時に完全に赤くなった月のようである。)

6b: ལྷང་བས་] ཟ; ལྷང་བ་རྒྱས་བས་ Thimphu. ལྷངས་ལྷུང་] ཟ; ལྷངས་པར་ལྷུང་ནས་ Thimphu. བློས་ཤིང་] ཟ; བློས་བས་ Thimphu.

6c: བལྟལས་པའི་] ཟ; བལྟལས་པའི་ Thimphu.

都城は無垢の月の水晶で出来たメール山（須弥山）に似て、内部は一千万ヨー ज्याナの広さを誇り、周りを取り囲む
石英の壁面がまるで自分自身と共にある光の輝きのせいで次第に羞恥心を高めるにつれて逃げ出したかのようにあり
しっかりと建てられた五色の宝物の柱という一束の虹がシャクラ（帝釈天）を手ぶらの状態にし
宮殿の周囲にあるキンシュカ樹の果実を火の力を用いて焼き固めた煉瓦の壁が見る者をうっとりとした気分させるのであった。(6)

shel gyi rtsig ngos... 「石英の壁面が...」 都城の壁面が自ら光を発して輝くさまと、都城の外壁の非常に壮大な規模を擬人法により表現している（'Bab stegs 21.6ff.; Rol mtsho 325.14ff.）。壁面が光の輝きに圧倒されて恥ずかしくなり、外に逃げ出してきたかのようなものであるというのは詩的空想（rab rtog, utprekṣā）である（'Bab stegs 22.4ff.; Dgongs rgyan 13.3ff.）。

kha dog lnga yi rin chen 「五色の宝物」 金、銀、赤いルビー（padmarāga）、青いサファイア（indranīla）、緑のエメラルド（marakata）の五つである（'Bab stegs 21.9f.; Rol mtsho 325.19f.）。

brgya byin lag pa stong par byed 「シャクラ（帝釈天）を手ぶらの状態にし」 シャクラはインドラの別名。「インドラの弓」（dbang po'i gzhu, indracāpa）といえば、「虹」を意味する詩的語彙である。都城を支える五色の柱は「一束の虹」に等しく、虹は「インドラの弓」に等しい。都城の中で、インドラの弓（＝虹）は建物を支える柱として使用されている。インドラの弓は彼の手元になく、結果としてインドラは手ぶらの状態になっている（'Bab stegs 21.13ff.; Rol mtsho 325.24ff.）。

pho brang khor yug... 「宮殿の周囲にある...」 第四詩脚の描写は、城内にキンシュカ樹がたわわな実をつけて生育している様子を想像させるものであり、キンシュカ樹が実をつけるのは秋であることから、物語の開始が秋の季節であることを示している。さらに、この描写は火を燃やすための材料となる樹が城内に生育していることを暗示することで、後にシーターを救出に来るハヌマンタが都城を焼き討ちにする場面の伏線をなしている（Rol mtsho 327.6ff.）。

lta ba myos byed 「見る者をうっとりとした気分させる」 タシルンポ版に lta ba myong byed 「見る者に（味わいを）経験させる」という異読がある（'Bab stegs 21.19ff.）。

འཛིན་མ་རུས་པའི་གོས་དཀར་ཅན།
བར་བར་ཁག་གི་ལྷེང་ཀ་འབྱེལ།
ལ་ལར་ཁག་རྒྱན་དྲོན་མོ་འབབ།
རྒྱ་མའི་དོ་གལ་ཅན་དེ་དག།
མཆེ་བ་རིང་བོས་རྒྱ་མ་གཉིས།
འདྲལ་དོགས་མགྲིན་པ་འདེགས་ཤིང་ཚོད།
དྲག་ཤུལ་སྤོད་པའི་ས་དེལིས།
གཤིན་ཇེའི་གྲོང་ལ་བག་ཡོད་སྤྱིན།

8d: ལྷིན་] ཟ; ལྷིན་ Thimphu.

地表は人骨という白い衣をまとい
そこかしこで血のたまりが渦を巻き

所々で生温かい血液がしたたり落ち
はらわたを頸飾りにするその連中（羅刹女）が(7)
自分の長い牙で両方の乳房を
切り裂きはしないだろうかと喉を上に向けて哄笑し
残虐な行為を行なっているその国は
死神の街にも脅威を与えていた。(8)

'dzin ma「地表」 サンスクリットの女性名詞 *dharā* または *dharanī* に由来する表現。'dzin ma は文字通りには「(諸物を) 支える女性」を意味するが、sa gzhi「大地」「地表」の意味で用いられる慣用表現である。

'dral dogs「切り裂きはしないだろうかと」 dogs「～ではないだろうか」「～と疑われる」の語を伴った詩的空想 (rab rtog dogs sgra can) の技法である ('Bab stegs 23.10f.)。羅刹女が自分の長い牙で乳房を切り裂いてしまうのではないだろうかという疑い ('dral dogs) を抱くというのは事実の描写ではなく、詩人の空想である。

མཚན་མོ་རྒྱ་བ་རྣམས་ཀྱི་རྗེ།
འབོད་སྒྲིགས་མགོན་པ་ལ་བྱུང་གིས།
ལྷ་བའི་དུས་ཀྱི་འཇིགས་སྤང་ཕྱིར།
བདེ་བྱེད་མཚན་པའི་ཚོ་ག་བྱས།
དབུལ་བ་འདོད་འདོད་དོན་མཐུན་དག།
རྒྱ་མཚོའི་གྲ་ཚེན་ནང་འཇུག་བཞིན།

9c: འཇིགས་] ས; འཇིག་ Thimphu. སྤང་ཕྱིར་] Zhal, Mkha'; སྤངས་ཕྱིར་ Thimphu, Bkra.

羅刹（夜に蠢く者）の者達の首領
十（五の倍）の喉を持つラーヴァナは
死の時（五の時）の恐怖を払拭するために
最高神シヴァを供養する儀軌を行なった。
貧窮から脱したいと願う隊商（財に資する者達）が
海を進む大きな船の中に乗り込むように。(9)

mtshan mo rgyu ba「羅刹（夜に蠢く者）」 サンスクリットの *rātrimcara*「夜に蠢く者（＝羅刹）」に由来する表現。srin mo「羅刹」を意味する詩的語彙である。

lnga ba'i dus「死の時（五の時）」 サンスクリットで *pañcatva*「五の状態」は、生物が五大元素に帰滅する「死」を意味する。チベット語でも lnga ba「五の状態」「五者」と言えば、'chi ba「死」を意味する。チベットには lnga ba'i dus を「第五の時」とする解釈もある。[1] 梵行期、[2] 家住期、[3] 林住期、[4] 遊行期に続く第五番目が死の時である (*Mun sel* 22.19ff.)。また、トンドゥップギャの解釈によれば、[1] 誕生 (skye ba) の時、[2] 老化 (rga ba) の時、[3] 病氣 (na ba) の時、[4] 衰弱 (rgud pa) の時に続く第五番目が死の時である (Track 3, 18:35)。いずれにせよ、作者は直前の詩脚で「十の喉」を敢えて「五の倍 (lnga zung) の喉」と表現していた。「五」という共通の数字の使用により、ここで描写されるラーヴァナの身体的特徴と、儀軌の目的を際立たせている (*Mun sel* 24.14ff.)。

dbul ba 'dor 'dod...「貧窮から脱したいと願う...」 比喩基準と比喩対象の対応関係を示すと、「貧窮」は死に対応し、「商人」はラーヴァナに対応し、「船の中に乗り込む」行為は不死をもたらす儀軌の執行に対応する ('Bab stegs 24.10f.)。

don mthun dag 「隊商（財に資する者達）」 サンスクリットの *sārtha* 「財を具える者（＝隊商）」に由来する表現。tshong ba 「隊商」を意味する詩的語彙である。

འདོད་ཆེན་རེ་བའི་མེ་མཚོ་དྲི། །
 ཚ་བས་འཇིགས་པའི་ལྷ་ཆེན་མི། །
 འཇའ་ཚོན་འཇིན་ཕྱིར་བསྐྱེན་པ་བཞིན། །
 དེ་ལ་ཆེ་ཆེར་རིང་བ་ཉིད། །
 རོ་ལེབ་སྐྱེང་གི་ས་བོན་ལ། །
 ལྷ་དུ་ལྷོན་པོ་རེ་བ་དེས། །
 རང་གི་མགོ་ནི་འབྲས་ཡོས་བཞིན། །
 དེ་ཡི་སྐྱིན་སྲེག་རྩམ་སྲུ་བྱིན། །

10a: འདོད་ཆེན་རེ་བའི་མེ་མཚོ་དྲི།] Σ; om. Thimphu.

10b: ཚ་བས་] Σ; ཚ་བའི་ Gser, Zhal.

10c: འཇའ་ཚོན་པ་] Σ; འཇའ་ཚོན་པ་ Thimphu.

11d: དེ་ཡི་] Σ; དེ་ཡིས་ Thimphu.

強欲ゆえの願望を叶えるための火の供犠の
 熱を恐れる大自在天（シヴァ）は
 まるで虹を捕まえようと近づいて行く者のように
 彼（ラーヴァナ）からさらに遠のいてしまったが (10)
 石板の上に蒔かれた種に
 新緑の芽を望む彼（ラーヴァナ）は
 自分の頭をあたかも炒った穀物のように
 かの御方（シヴァ）に護摩の供物として差し出した。(11)

'dod chen re ba'i me mchod 「強欲ゆえの願望を叶えるための火の供犠」 不死の境地の獲得を願ってラーヴァナが実行している護摩供養のこと（'Bab stegs 25.5f.）。

tsha bas 'jigs pa'i lha chen 「熱を恐れる大自在天」 大自在天＝シヴァ神が火の熱を恐れたというのは事実の描写ではなく詩的空想である（'Bab stegs 26.1ff.）。シヴァ神が本当に恐れたのはラーヴァナの邪悪な動機（*kun slong ngan pa*）である（*Dgongs rgyan* 17.8）。あるいは、シヴァ神は自身に不死の境地を授けるだけの能力がないこと⁶⁸を恥じ、自分の弱点を隠すために、あたかも熱を恐れるかのような行動を取ったのだと解釈することもできる（*Mun sel* 27.19ff., 28.14ff.）。

'ja' tshon 'dzin phyir bsnyen pa bzhin 「まるで虹を捕まえようと近づいて行く者のように」 子供が空にかかった虹を捕まえようとして、虹の方をめぐらして駆けて行けば行く程、虹から（あるいは自分が戻るべき家から）遠ざかって行ってしまふ（'Bab stegs 25.7f.; *Mun sel* 26.19ff.; Track 4, 1:10）。ラーヴァナがシヴァ神に近づこうとすればする程、シヴァ神が恐れて遠のいて行くという滑稽な様子を描写している。

rdo leb steng gi sa bon la... 「石板の上に蒔かれた種に...」 あたかも愚者が石板の上に蒔かれた種から新芽が成長するのを望むように、ラーヴァナは無能力なシヴァ神から不死の境地を授けても

⁶⁸カダム派の師ギェルセー・トクメ・サンポ（*Rgyad sras thogs med bzang po*: 1295–1369）の作として伝えられる言葉に次のようなものがある（'Bab stegs 26.10ff.）。rang yang 'khor ba'i btson rar bcings pa yi || 'jig rten lha yis su zhig skyob par nus || de phyir gang la bskyab na mi bslu ba'i || dkon mchog skyabs 'gro rgyal sras lag len yin || （「自らも輪廻という牢獄に囚われの身となっている世間の神を避難所とすることなど決して誰にもできない。それゆえ、避難所としても決して裏切られることのない三宝にこそ帰依する [=避難所として逃げ込む] べきである。これが仏子の実践である。」）

らおうと望んで、無駄な努力をしている（'Bab stegs 25.9f.）。したがって、ここではラーヴァナの愚かさも表現されている（Track 4, 5:05）。

rang gi mgo ni 'bras yos bzhin 「自分の頭をあたかも炒った穀物のように」 護摩焚きを実行する者達が炒った穀物（'bras yos, *lāja）を護摩壇に投げ入れることを少しもためらわないのと同じように、ラーヴァナも自分の頭をためらいなく切り捨て、護摩壇の火の中にくべたという意味である（'Bab stegs 25.11f.）。

རིག་སྤྲུག་ལྷ་གས་ཀྱི་སྤྱོད་མཁའ་གྱིས། །
སྤྱོད་ལ་ཟིན་ཏེ་སྤྲུང་ཚེན་དེ། །
གཤོང་བྱའི་འདམ་སྤྲུག་ལ་འབྲེད་ནས། །
ཇ་བྱའི་བུ་མོའི་རྒྱ་མཚོར་ལྷུང་། །

12c: གཤོང་བྱའི་] Σ; ཤོང་བྱའི་ Thimphu. འདམ་སྤྲུག་] Σ; འབབ་བྲེགས་ Thimphu. འབྲེད་ནས་] Σ; འབྲེད་པས་ Thimphu.

12d: བུ་མོའི་] Σ; བུ་མོ་ Thimphu.

明呪という鉄の鉤を扱う巧みな術は
御心に届いたが、かの象は
窪んだ湿地帯の渡し場で脚を滑らせ
ガンジス（ジャフヌの娘）の海へ落下したようだ。(12)

glang chen 「象」 シヴァ神を暗示する表現である（'Bab stegs 25.15f., 26.7）。

dza hu'i bu mo 「ガンジス（ジャフヌの娘）」 サンスクリットの jahnukanyā あるいは jahnusutā に由来する表現。ジャフヌ仙人が天界を流れるガンジス河を飲み込んでしまったが、やがて自身の耳から流れ出すことを許したことから、現在のガンジス河が生まれたという神話による。

rgya mtshor lhung 「海へ落下したようだ」 シェルシュルワは「落下して、まるで死んでしまったかのようなようだ」（lhung ste shi ba 'dra）と註釈する（'Bab stegs 25.18）。シヴァ神が脚を滑らせてガンジス河に落下したというのは事実の描写ではなく詩的空想である（'Bab stegs 26.1ff.）。火の熱を恐れて遠のいたシヴァ神を呼び戻すため、ラーヴァナは自身の頭を切り落として護摩焚きの供物として捧げたが、結局シヴァ神を取り逃がしてしまったという情景を滑稽に描写している。

[2] ラーヴァナ、ウマーとハヌマンタからの申し出を拒絶する

བདག་པོའི་བཀའ་ལླང་ཉི་མའི་ཟེར། །
ཕྱི་ལ་པས་ལྷ་མའི་པད་ཚལ་གྱིས། །
མཚོག་སྤྱོད་སྤྲུང་ཅི་ཉེ་བར་བསྐབས། །
རབ་བྱ་ཁེངས་པའི་སྤྲུང་བྱངས་ཅན། །
སྤྲུང་བོ་ལག་མང་ང་རྒྱལ་བྱེད། །
སྤྲུང་ཅིས་ལྷོས་པའི་རྒྱང་བྱག་པ། །
མེ་ཏོག་ལ་ཡང་མཐུང་དག་བསྐྱུན། །

13e: སྤྲུང་བོ་] Σ; སྤྲུང་བོ་ Thimphu, Mkha'.

主人（シヴァ）のご命令という太陽の光が

差し込んだことからウマーという蓮華の花園は
 蜜という贈物を差し出したのだが
 尊大な調子の声を上げる
 多数の手を持つ象は威張り散らすのであった。
 蜂蜜で酩酊した蜂（六本足を持つ者）というのは
 花さえも針で突くものである。(13)

bdag po'i bka' lung 「主人（シヴァ）のご命令」 シヴァは妻ウマーに向かって、ラーヴァナに不死の境地を与えるように命令した（'Bab stegs 27.14）。

mchog sbyin sbrang rtsi nye bar bstabs 「蜜という贈物を差し出した」 贈物とは不死の境地（'chi med dngos grub）のことである。夫シヴァからの命令を受けたウマーはラーヴァナに向かって「不死の境地を私から受けなさい」と告げた（'Bab stegs 27.16f.; Dgongs rgyan 19.12ff.）。尤も、ウマーは不死の境地を授ける能力を持ち合わせていないが、夫の命令とあって断れず、それを与えるようなふりをしたのであろう（Mun sel 30.7ff.）。なお、mchog sbyin は bung ba 「蜂」の詩的語彙でもあるので、「蜂（＝ラーヴァナ）に蜜を差し出した」という別解釈も成り立つ（Dgongs rgyan 19.14ff.）。

rab tu khengs pa'i sgra dbyangs can... 「尊大な調子の声...」 ラーヴァナの尊大な様子を象の姿に託して描写した縮約表現（bsdus brjod, *samāsokti）である（'Bab stegs 28.6ff.）。ラーヴァナが尊大になったのは、他の誰にも成し遂げることでできない難しい難行を達成したからである（'Bab stegs 27.17f.）。

glang bo lag mang 「多数の手を持つ象」 lag mang 「多数の手を持つ」は、glang bo 「象」の詩的語彙としてしばしば用いられる lag ldan （Skt. karin, hastin）という表現を想起させるものである。あるいは「多数の手」はラーヴァナの十の頭を表しているのかもしれない。ツォンカパの『文殊讚』に「煩惱という凶暴な鼻の手で善という樹々をなぎ倒す象」という類似表現が見られる⁶⁹。

rkang drug pa 「蜂（六本足を持つ者）」 サンスクリットの śaṭpāda に由来する表現。bung ba 「蜂」を意味する詩的語彙である。

me tog la yang mdung dag bsnun 「花さえも針で突くものである」 酩酊して尊大になった蜂は、自身に蜜という恩恵を与えてくれる花にさえ粗暴な行動を取る。それと同じように、ラーヴァナも自身に恩恵を与えようとしているウマーに対して粗暴な行動を取っている（'Bab stegs 27.20f.）。

མགོན་བཟུང་བའི་བུ་མོ་ནི།
 རིག་ཕྱེད་གདོང་གི་པད་ཚལ་དུ།
 མངོན་པར་དཀར་བར་འདོད་པ་སྟེ།
 གཡོ་སྐྱུའི་མུན་པར་སུ་ཞིག་འཇུག།

14c: དཀར་བར་] Σ; དཀར་བའི་ Thimphu.

14d: མུན་པར་] Σ; མངོན་པར་ Thimphu; མུན་པ་ Bkra.

(ラーヴァナ：)

「ダシャグリーヴァなるハンサ鳥の娘は
 ブラフマン神（四つの顔を持つ者）の蓮華の園で

⁶⁹ Bstod sprin rgya mtsho 30b6f.: dngos 'dzin chang gis rab tu myos pas blang dor dpyod pa'i blo gros nyams || nyon mongs gdug pa'i sna yi lag pas dge ba'i ljon pa kun tu 'joms || sred pa'i zhags pas yid ni drangs pas rnyed bkur glang mo'i phyr 'brang ba || bag med nags khrod kun tu rgyu ba'i gdul dka'i yid kyi glang po che || (「実在へのとらわれという酒に酔って取捨を考察する知恵が損なわれ、煩惱という凶暴な鼻の手で善という樹々をなぎ倒し、渴愛という縄で意識を引っ張られるようにして利得や名声という雌象の後を追い、無用心に森の中を動き回る、調教しがたい意識という象。」)

けがれのない白色になろうと望んでいるというのに
欺瞞に満ちた闇の中にわざわざ入ることがあろうか。」(14)

mgrin bcu 「ダシャグリーヴァ」 ラーヴァナの別名。daśagrīva は「十の首を持つ者」を意味する。

rig byed gdong gi pad tshal 「ブラフマン神（四つの顔を持つ者）の蓮華の園」 rig byed は「ヴェーダ聖典」(veda) を意味する語であり、ヴェーダ・サンヒターは四部門から構成されることから、数字の「四」の詩的語彙となる。rig byed gdong とは gdong bzhi pa (Skt. caturmukha) すなわち四つの顔を持つブラフマン神 (tshangs pa, *brahman) のことである。ダンディンの『詩鏡』冒頭に「ブラフマン神（四つの顔を持つ者）の口という蓮華の園」⁷⁰という類似表現がある。

mngon par dkar bar 'dod pa 「けがれのない白色になろうと望んでいるというのに」 死魔の危難という汚濁 ('chi bdag gi gnod pa'i dri ma) を離れた状態、すなわちラーヴァナが望む不死の境地を「白色」と表現している ('Bab stegs 28.3f.)。

g-yo sgyu'i mun pa 「欺瞞に満ちた闇」 ラーヴァナはウマーの言葉を嘘偽りとみなし、それを「欺瞞に満ちた闇」と表現している ('Bab stegs 28.4f.)。

ཅེས་སྐྱུ་དུག་པོའི་དགའ་མ་ཡིས། །
དམོད་པོའི་དུག་མདའ་མི་བཟད་འཕངས། །
དུས་མཐར་ཕྱིན་ཀྱི་རྒྱལ་སྲིད་ནི། །
འུ་ལྷན་དག་གིས་ཉམས་བྱེད་ཤོག །
ཅེས་ཏེ་ལྷ་ཚེན་གསུ་སོང་། །
བྲང་འགྲོའི་ཁ་རྩ་བསྐྱོགས་པ་བཞིན། །

15a: སྐྱུ་] ཏ; སྐྱུ་ Thimphu.

15d: ཉམས་] ཏ; འུ་ལྷན་ Thimphu.

こう言われるとルドラの愛妻は
呪詛という耐え難い毒矢を放った。

(ウマー：)

「最終的にお前の王権は
女達（乳房を有する者達）のせいで没落するがよい」
こう告げると大自在天（シヴァ）の元に戻って行った。
まるで蛇（胸を使って進む者）が唾液を引っ込めるように。(15)

nu ldan 「女（乳房を有する者）」 bud med 「女」を意味する詩的語彙である。

brang 'gro 「蛇（胸を使って進む者）」 サンスクリットの uraga 「胸を使って進む者」に由来する表現。sbrul 「蛇」を意味する詩的語彙である。

kha chu bsdogs pa bzhin 「唾液を引っ込めるように」 蛇は睡眠から覚めると、睡眠中に口から垂らした唾液の糸を急いで引っ込めるという習性を有する ('Bab stegs 29.9ff.)。この比喩はウマーがとても素早くシヴァの元に戻って行く様子を表現しており、ラーヴァナからの侮辱を受けた彼女の怒りの激しさを示唆する (Grel pa 36.1ff.)。

སྐྱིན་དབང་བ་ཀྱལ་ཡི་ཤིང་། །

⁷⁰KĀ I 1: caturmukhamukhāmbhojavanahamśavadhūr mama | manase ramatām nityam sarvaśuklā sarasvatī ||; gdong bzhi gdong gi pad tshal gyi || ngang pa'i bu mo thams cad dkar || dbyangs can ma ni kho bo yi || yid la ring du rol bar mdzod || (「ブラフマン神〔四つの顔を持つ者〕の口という蓮華の園のハンサ鳥の娘、純白のサラスヴァティーが私の湖という心で永えに戯れて下さいますように。）」

འདོད་ཆེན་ལ་ཡི་བྱུང་ཆང་གིས། །
 ལྷོས་པའི་སྤྱིང་ནི་ལ་ལོ་ཡི། །
 ལུ་སྤྱིས་ལོང་བར་འཛིན་མ་ཡིན། །
 ཏིན་ཏུའི་འབྲས་བུ་ནེ་ཙོ་ཡི། །
 གཤམ་པའི་གོས་ལྗང་སྤོད་གཡོགས་ཅན། །
 གོ་སར་རུ་འབྱར་མགོན་དག་གི། །
 སེན་རྗེས་ཀང་སྤྱོད་སྤྱར་ལེན་ནོ། །

16c: ལོ་ལོ་ཡི་] ཏ; ལོ་ལོ་ཡིས་ Thimphu.

16d: ལུ་སྤྱིས་] ཏ; མཚོ་སྤྱིས་ Thimphu.

17a: ཏིན་ཏུའི་] ཏ; ཏུན་ཏུའི་ Zhal; ཏིན་ཏུའི་ Gser.

17b: ལྗང་] ཏ; འཆང་ Thimphu.

17c: མགོན་] ཏ; མགོན་ Thimphu.

羅刹の支配者（ラーヴァナ）という強欲の
 バクラ樹の口移しのシードゥ酒に
 酔いしれた心は、けだるい女である
 睡蓮を心から受け入れようとせずに (16)
 鸚鵡の翼と同じ緑色をした上衣を身に付けて
 花糸であるシヴァ（喉を清められた者）の
 爪跡が残るティンティディー樹の果実という
 乳房を懸命になって踏みつけようとした。(17)

ba ku la yi shing 「バクラ樹」 バクラ樹 (Skt. bakula) は艶かしい女性の口から美酒を浴びることによって花を咲かせると言われている ('*Bab stegs* 30.3f.)。ここでバクラ樹はラーヴァナを指している。

kha yi bur chang 「口移しのシードゥ酒」 女性がバクラ樹に口移しで与えてくれた酒である。バクラ樹は女性の口から受け取ったシードゥ酒の香りを持つ (sīdhugandha) と言われている。ここでシードゥ酒は、不死の境地を望むラーヴァナの強欲 ('*dod chen*) を表す隠喩であるか (Track 5, 6:30)、もしくはラーヴァナが望む不死の境地を表す隠喩である (*Mun sel* 38.1f.)。

le lo yi chu skyes 「けだるい女である睡蓮」 le lo は「けだるさ」 (Skt. kausīdya, 懈怠) を意味するが、ここでは le lo can 「けだるい人」の意味で理解される ('*Bab stegs* 30.6)。「けだるい女」はウマーであり、ここでは「睡蓮」という隠喩で表現されている。バクラ樹は艶かしい女の口から酒を受け取るが、けだるい女の口からは受け取らない。それと同じようにラーヴァナも、自身が「けだるい女」とみなすウマーから不死の境地を授かろうとはしない (*Mun sel* 38.4ff.)。

khong bar 'dzin ma yin 「心から受け入れようとはせず」 ラーヴァナがウマーを信用していないこと (snying mi gtod pa) を表している ('*Bab stegs* 30.7)。

tin tu'i 'bras bu 「ティンティディー樹の果実」 tin tu はサンスクリットの tintiḍī の音写。チベット語で bse yab ともいう ('*Bab stegs* 30.20f.)。「ティンティディー樹の果実」はウマーの乳房を表す隠喩である。果実を包み込む緑の葉はウマーが身につけている上衣に相当する。なお、トンドゥプギャは「果実」という隠喩がウマーの若さみなぎる身体 (u ma'i lang tsho rab tu rgyas pa'i lus) を表していると理解している (Track 5, 10:50)。

ge sar 「花糸」 原文には ge sar nu 'bur とあるので、ge sar 「花糸」という隠喩は直後にある単語 nu 'bur 「乳房」を表しているようにも読めるが、それでは詩節全体を整合的に解釈することができない。チベット語の構文解釈として異例ではあるが、ge sar 「花糸」は nu 'bur 「乳房」の次に置かれる mgrin

dag gi sen rjes 「シヴァの爪跡」を指す隠喩であると考えより他ない（'Bab stegs 30.16ff.）。カンブムによれば、この技法は「分散の謎語り」（rim pa dang bral ba'i gab tshig, *vyutkrāntā prahelikā）に相当するものである（Dgongs rgyan 24.6; KĀ III 99）。

mgrin dag 「シヴァ（喉を清められた者）」 大自在天シヴァを意味する詩的語彙である。「青黒い喉を持つ者」 mgrin sngon や mgrin nag (Skt. nīlakaṇṭha) と同義である（'Bab stegs 30.10）。

rkang stegs lhur len no 「懸命になって踏みつけようとした」 直訳は「足場のために懸命になった」。ラーヴァナがウマーを侮辱したということの意味する。

རྩ་མགོ་ཅན་དེའི་རེ་བ་ཡི།
 ལྗེ་སྐར་དོ་གལ་འགོད་པ་ལ།
 མཚན་མེདི་བུ་མོ་དམར་མེར་ཅན།
 ཡབ་ཀྱི་བཀའ་ལས་འགོང་མ་རུས།

かのラーヴァナ（馬の頭を持つ者）の願いという
 星々の頸飾りを首にあてがわれてしまうと
 夜空の少女という猿（橙色をした者）は
 父上のご命令には逆らえなかった。(18)

rta mgo can 「ラーヴァナ（馬の頭を持つ者）」 ラーヴァナには十の頭があり、その中央にあるのが馬の頭である。rta mgo can 「馬の頭を持つ者」はラーヴァナを意味する詩的語彙である（'Bab stegs 32.4f.）。

rgyu skar do shal 「星々の頸飾り」 「星々」はラーヴァナの願いを表す隠喩である。さらに、その「星々」が「頸飾り」という隠喩で表現される。二重隠喩（gzugs can gyi gzugs can, *rūpakarūpaka）の技法である（'Bab stegs 33.7ff.; KĀ II 93）。供犠を実行するラーヴァナの懸命な願いが火花（me stag）となって夜空全体を覆う様子を想像させる（Mun sel 40.17ff.）。

mtshan mo'i bu mo dmar ser can 「夜空の少女という猿（橙色をした者）」 ここでは mtshan mo は「夜」ではなく、mtshan mo'i nam mkha' 「夜空」を意味する。dmar ser can (Skt. piṅgala) 「橙色をした者」は spre'u 「猿」を意味する詩的語彙。猿の王者ハヌマンタ（Ha nu man tha）のことである。この物語でハヌマンタはシヴァ神の息子という設定になっている。猿が「夜空」に喩えられ、さらに「夜空」が「少女」に喩えられている。これも二重隠喩という技法である（'Bab stegs 33.9ff.）。ジャバは mtshan mo'i bu mo 「夜空の少女」を zla ba 「月」の意味で理解する（Mun sel 40.4）。

yab kyi bka' las 'gong ma nus 「父上のご命令には逆らえなかった」 ウマーが退却したので、代わりにシヴァは息子ハヌマンタに、不死の境地をラーヴァナに授けることを命じた。ハヌマンタは父の命令に逆えず、不死の境地を授けるような恰好を取ることにした（'Bab stegs 32.6ff.）。

བདེ་འབྱུང་རལ་བའི་སྤྱེད་ཚལ་དུ།
 མཐོ་རིས་ཀྱི་ལུས་ཚུལ་ལ།
 དེ་ཚོ་སྤྱེད་མིག་གསུམ་ཅན།
 འདི་ནི་གྲུབ་པའི་གོགས་ཡིན་ཞེས།
 ཡུངས་དཀར་རྩི་རྩི་རྩི་ཚོགས་དང་།
 རྩུ་མཐོ་འབྱུག་སྐྱེས་རི་གྲུང་བཀང་།

19e: ཡུངས་དཀར་] Σ; རྩུ་དཀར་ Thimphu.

シャンブ（シヴァ）の束ねた長髪という庭園で

天界の河（ガンジス河）の水で沐浴しようとした
 その時、三つの眼を持つ猿が目に留まると
 「こいつは行の成就を邪魔する者である」と思い
 芥子粒という雹（金剛石の集まり）と
 フーン・パットという雷鳴で山と平地を一杯にした。(19)

bde 'byung 「シャンプ（シヴァ）」 シャンプ（Śambhu）はシヴァの別名で、文字通りには「幸福が生じる源」（śambhu = śaṁ bhavaty asmāt）を意味する。これに対応するチベット語 **bde 'byung** も同様である（**bde 'byung = bde ba'i 'byung gnas**）。ここでラーヴァナは自らに不死の境地を授けてくれるシヴァを幸福の源とみなしているため、作者はこのような表現を用いたのであろう。

mtho ris chu yi khros rtsom pa 「天界の河（ガンジス河）の水で沐浴しようとした」 ガンジス河はシヴァの束ねた長髪の中に閉じ込められている。ラーヴァナはその清水で沐浴して、死の苦しみというけがれを清めようと考えていた（'Bab stegs 32.9ff.）。

rdo rje rdo tshogs 「雹（金剛石の集まり）」 **rdo rje rdo tshogs** 「金剛石の集まり」は **ser ba** 「雹」を意味する詩的語彙である（'Bab stegs 32.13f.）。**yungs dkar rdo rje rdo tshogs** は隠喩ではなく直喩で「雹のような芥子粒」（「芥子粒」＝比喩対象、「雹」＝比喩）を意味するとも考えられる（*Mun sel* 42.5）。そのように解釈するならば、ラーヴァナが実際に降らせたのは芥子粒であったことになる。

hūm phaṭ 「フーン・パット」 調伏の真言（*drag sngags*）⁷¹である（'Bab stegs 32.14）。**hūm phaṭ 'brug sgra** を直喩とみなして「雷鳴のようなフーン・パット」と解釈することも可能である（*Mun sel* 42.6）。

གཉིད་ལྷོས་བྱིས་པའི་ཁ་ནང་དུ།
 མ་ཡི་རུ་སོར་ལུགས་པ་གང་།
 སོ་རྗེན་སྟ་ལེའི་འདུག་པ་ནི།
 རང་གཞན་གཉིས་ཀ་ཕུང་བྱེད་དོ།

20c: སྟ་ལེའི་] སྟ་ལེ་ Mkha'.

眠りこけた幼子の口に
 母の乳首を含ませた時
 鋭い歯という斧を行使するのは
 自他の両方の破滅のもとである。(20)

rang gzhan gnyis ka phung byed do 「自他の両方の破滅のもとである」 幼子が母乳を飲もうとしながら母の乳首を嘔む行為は、自身が母乳を飲むことを妨げると共に、母の身体を傷つけることにつながる（'Bab stegs 32.17ff.）。カンブムはこの箇所を **rang gzhan gnyis ka phung byed kyi rgyu ru zad de** 「自他の両方の破滅の原因に過ぎない」と註釈する（*Dgongs rgyan* 26.18f.）。ラーヴァナがウマーとハヌマンタに対して行なった侮辱行為が、自他の両方を苦しめる結果となるということを表した縮約表現（*bsdus brjod*, **samāsokti*）である。ラーヴァナの破滅という物語の結末を暗示している（*Mun sel* 44.4ff.）。

རྟ་དམར་ཅན་ལྷོས་སྟག་གི་གཉིན།
 ལུས་སྦྱེས་བསྐྱེད་པའི་དྲི་བཞེན་ཡང་།

⁷¹*Mahāvīyutpatti*, no. 4243: (Skt.) ābhicārikam; (Tib.) *drag shul spyod pa*. 調伏 (ābhicāra) の護摩においては「パット」(phaṭ) で終わる真言が用いられる (奥山 1999; 森 2011: 107ff.)。

གནམ་ས་འབྲུགས་ཕྱེད་འཕྲོར་རྒྱུ་སྟེ། །
 དུས་མཐའི་ཉི་མ་གསུམ་གྱི་མིག །
 སློན་དུས་དུ་བའི་རལ་བ་ཅན། །
 མགོ་སྐྱེས་གསེར་གྱི་ཁུ་བ་ཡིས། །
 སྐར་མའི་འབྲས་ཡོས་བྲ་བ་བཞིན། །

21a: ལྷའི་] Σ; གྱི་ Thimphu.

21b: ལུས་སྐྱེས་བསྐྱེད་པའི་དྲི་བཞེན་ཡང་] Σ; om. Thimphu.

21c: འབྲུགས་] Σ; ལྷུར་ Thimphu.

21f: མགོ་] Σ; མགོན་ Thimphu.

風神（赤い馬に乗る神）を母方の親類とする者の
 うぶ毛（体に生えるもの）を震わす風（香りの乗り物）も
 天地を揺るがす暴風となった。
 眼という劫末の三つの太陽は
 眉毛という長く伸びた煙を逆立て
 髪の毛（頭に生えるもの）という火焰（金の液体）は
 星々という炒った穀物を食らうかのようにであった。(21)

rta dmar can lha'i snag gi gnyen 「風神（に乗る神）を母方の親類とする者」 rta dmar can 「赤い馬に乗るもの」はサンスクリットの lohitaśva に相当する表現であり、rlung 「風」を意味する詩的語彙である。「風神を母方の親戚とする者」とはハヌマンタのことである。ハヌマンタの母親は風神の種族の出身とされる（'Bab stegs 34.7ff.）。

lus skyes 「うぶ毛（体に生えるもの）」 サンスクリットの tanuruh もしくは tanūruha 「体に生えるもの」に相当する表現。spu 「毛」を意味する詩的語彙である。

dri bzhon 「風（香りの乗り物）」 サンスクリットの gandhavaha もしくは gandhavāha 「香りを運ぶもの」に相当する表現。rlung 「風」を意味する詩的語彙である。

dus mtha'i nyi ma gsum gyi mig 「眼という劫末の三つの太陽」 劫末に三つの太陽が同時に出現すると言われている。それらの太陽と同じように赤く燃える丸い形をしたハヌマンタの三つの眼のことを表現している（'Bab stegs 35.1f.）。

mgo skyes 「髪の毛（頭に生えるもの）」 サンスクリットの mūrdhaja 「頭に生えるもの」に相当する表現。skra 「髪の毛」を意味する詩的語彙である。

gser gyi khu ba 「火焰（金の液体）」 サンスクリットの dravatkāñcana 「走る／したたり落ちる／流動性の金」に相当する表現。me 「火焰」を意味する詩的語彙である。橙色に輝き、怒りで逆立つ毛髪を表している。

skar ma'i 'bras yos za ba bzhin 「星々という炒った穀物を食らうかのようにであった」 ハヌマンタの怒りで逆立った髪の毛から火花が飛び出している様子を表している。詩的空想 (rab rtog, *utprekṣā) の技法が用いられている（'Bab stegs 35.14; Dgongs rgyan 28.15）。以上の詩節では恐怖（'jigs rung, *bhayānaka）というラサ (nyams, *rasa) が表現されている（'Bab stegs 35.12; Dgongs rgyan 28.14）。

དེ་ཡི་མཇུག་མ་ཟད་མཐའ་ཡི། །
 ཞགས་པ་ནམ་མཁར་འཕྱར་བ་དེས། །
 ཕྱི་མ་ལེབ་གྱི་རྩ་ཡབ་བཟུང་། །
 བས་ཞིག་གྲུབ་པའི་བཟུང་ལེན་ཕྱེད། །

22b: འཕུར་] ཟ; མཚོང་ Thimphu.

22c: བཟུང་] ཟ; ཟུང་ Thimphu.

自分の尾という劫末の火の
縄を空に向けて持ち上げた彼（ハヌマンタ）は
蝶というチャーマラ島をつかまえた。
いつになったら成就の精髓を貰えるのやら。(22)

zad mtha' 「劫末の火」 世界の終末に現れる火 (dus mtha'i me) のことである ('Bab stegs 35.8)。直後に現れる zhags pa 「縄」を表す隠喩である (Dgongs rgyan 28.16f.)。

phye ma leb kyi rnga yab bzung 「蝶というチャーマラ島をつかまえた」 ランプの火がそこに飛んで入る蝶をつかまえるように、ハヌマンタの尾の先端はラーヴァナが支配するチャーマラ島をつかまえた ('Bab stegs 35.8ff.)。

nam zhig grub pa'i bcud len byed 「いつになったら成就の精髓を貰えるのやら」 ラーヴァナはいつまでたってもハヌマンタから不死の境地を授けてもらうことはできなかったという意味である ('Bab stegs 35.10f.)。以上の詩節では忿怒 (drag shul, *raudra) というラサが表現されている ('Bab stegs 35.15; Dgongs rgyan 28.16)。

[3] シヴァ、ラーヴァナに不死の境地を授けたふりをする

ཐུང་མེད་པའི་རྒྱུ་ལྷུང་ནི།
མེ་ཏོག་འཇུག་དཀར་དགོད་བྱེད་པ།
ཚོགས་ཅན་མ་ཡི་རྒྱུ་གདུབ་ཀྱི།
སིལ་སྐྱེལ་མེ་ཏོག་གཡོང་བྱེད།
མགོན་བཟུའི་ལྷ་བས་ལྷ་ཚེན་གྱི།
རི་བོང་གཟུགས་བརྟན་འཛིན་པ་ནི།
མགོ་བོའི་ཚེར་འཛིན་མེ་མཚོད་གྱི།
ཐུན་མཚམས་གོས་དམར་ཅན་ལ་ལྷོས།

23b: དགོད་] ཟ; ཚོད་ Thimphu.

23d: ལས་] ཟ; ལ་ Thimphu.

24a: ལྷ་བས་] ཟ; ལྷ་བའི་ Mkha', Bkra. ལྷ་ཚེན་གྱི་] ཟ; ལྷ་ཚེན་ནི་ Bkra.

無憂樹（アシヨーカ樹）が
花をほころばせて微笑むのは
娼婦の足頸飾りのチリンと鳴る音を聞いて
情欲を起すからなのだ。(23)

ダシヤグリーヴァ（ラーヴァナ）という月が大自在天という
兎の模様を自分のものにすることができるかどうかは
頭という山（財を保持する者）を捧げる火の供犠という
赤い上衣をまとった薄明に懸かっている。(24)

mya ngan med pa'i rkang 'thung 「無憂樹（アシヨーカ樹）」 rkang 'thung 「足で飲む者」はサンスクリットの pādapa に相当し、shing 「樹」を意味する詩的語彙である。女性の足が触れることで、アシヨーカ樹の花が咲くという言い伝えがある。

nor 'dzin 「山（財を保持する者）」 一般的に nor 'dzin 「財を保持する者」(Skt. *vasum̐dharā*) は sa gzhi 「大地」を意味する詩的語彙であるが、ここでは ri bo 「山」を意味する。山も宝石などを産出するので、それを nor 'dzin という名称で呼ぶことには十分な根拠がある。文脈によっては rgya mtsho 「海」も同じく nor 'dzin と表現されることがある（'Bab *stegs* 36.20ff.）。

thun mtshams gos dmar can la ltos 「赤い上衣をまとった薄明に懸かっている」 十五日の晩に山の頂が薄明の赤光と交わりを持つと、はっきりとした兎の模様を有する満月が昇るといふ言い伝えに基づく表現である（'Bab *stegs* 36.18ff.）。ラーヴァナ（＝月）がシヴァ（＝兎の模様）の力を授かるために、自分の頭（＝山）さえも切り落として供物として捧げ、一層の力を込めて火の供犠（＝薄明の赤光）を実行している様子が描写されている。

ཀ་ལིང་ཀ་ཡི་བདག་པོ་དེའི།
ལ་ཡི་རྒྱ་མཚོར་མཚོག་སྤྱོད་གྱི།
ག་བུར་གང་གྲུའི་ཇི་སྤྲེད་རྒྱུ་།
ང་ལས་ལོངས་ཞེས་དྲག་པོས་སྤྲུས།།

25a: དེའི།] Σ; དེ་ Thimphu.

25c: གང་གྲུའི།] Σ; གང་གི་ Thimphu.

25d: ལོངས་] Σ; ལོང་ Thimphu.

「カリंगाの支配者であるそなたの
口という海に、最高の恩恵である
月（樟腦の自在者）というガンジス河のありったけの水流を
私から受け取るが良い」とルドラは言った。(25)

ka—kha—ga—nga この詩節では ka phreng の技法が用いられ、各詩脚の冒頭の音節をつなげると ka—kha—ga—nga と読めるようになっている。ka ling ka と ga bur gang gā'i の二箇所では押韻 (rjes khrid, *anuprāsa) の技法も用いられている（*Dgongs rgyan* 31.8ff.）。

ka ling ka 「カリंगा」 ベンガル湾に面したインド南東部を古くはカリंगाと呼んでいた。その地方に住む人々をカリंगाと呼ぶこともある (V. S. Apte, *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, s.v., *kaliṅga*)。しかし、シェルシュルワによると、カリंगाは柔らかい羽毛を持つ鳥の一種であり、ラーヴァナはチャーマラ島に生息するカリंगा鳥の支配者でもあるという（'Bab *stegs* 37.10ff.）。カンブムはこの解釈に疑問を呈し、ここにいう「カリंगा」とはカリंगा鳥が生息する土地の名称であろうと述べている（*Dgongs rgyan* 31.3ff.）。

mchog sbyin 「最高の恩恵」 ラーヴァナが求めている不死の境地を意味する（'Bab *stegs* 37.14）。この最高の恩恵が「月」（樟腦の自在者）という隠喩によって表現され、さらにその月が「ガンジス河」という第二の隠喩によって表現される（*Dgongs rgyan* 30.16f.）。

ga bur 「月（樟腦の自在者）」 チベット語の ga bur はサンスクリットの karpūra 「樟腦」「カンフル」の音写である。ここでは ga bur dbang 「樟腦の自在者」すなわち zla ba 「月」を意味する（*Dgongs rgyan* 30.16）。シェルシュルワによると、zla 'od kyi bdud rtsi'i thig pa 「月光の甘露の雫」を意味する（'Bab *stegs* 37.14）。ここで「月光」という隠喩はシヴァが授けようとしている不死の境地（実際には授けたふりをするだけである）に、「海」という隠喩はラーヴァナの口に対応している。ラーヴァナが不死の境地を授かる様子が、月の光を受けて豊穰の海が広がるという幻想的光景に重ねて描写されている（'Bab *stegs* 37.16ff.）。詩的言語において月は rgya mtsho dga' 「海にとっての喜び」と表現され、海は zla bas 'phel 「月によって豊かになる者」と表現される（*Mun sel* 54.14ff.）。

gang gā'i ji snyed rgyun 「ガンジス河のありったけの水流」 シェルシュルワは gang gā'i rdul ji

snyed pa de snyed kyi rgyun 「ガンジス河の砂塵の数と同じだけの水流」と解釈する（'Bab stegs 37.14f.）。

ཅ་ཙེ་གླུ་ཡིས་ཙོ་ནས་འདྲེན་ཁྱོད་ཅི་ཡང་མཚོན་ཚིག་ཅེ་སྤྱང་སྐད་མཚུངས་ལུས་གཟུ་ཞིང་། །
 ཆ་ལུགས་ཙོག་སྲུས་ཚོག་ལ་འབད་ཚུ་གཙང་མཚོན་ཡོན་རིན་ཐང་ཆེ་བའི་སྒྲིགས་ནང་དུ། །
 ཇ་ཡི་བདུང་བའི་ལྷུ་མའི་ཇོ་བོ་ཇི་ཙམ་དགུམ་པའི་ཇི་མང་འདྲོད་ཡོན་ཇུ་ཅེ་འི་གོས་སྒྲིགས་ཐོང་འདི་དག །
 ཉ་གང་ལྷ་བར་འཛི་བའི་ཉི་འོད་ཉེ་བའི་སྐབས་མེད་ཉོ་ཚོང་རེ་བ་ཉུང་ཇུ་མིན་འདི་སྤྱང་དུ་འོ། །

26a: ཅི་ཡང་མཚོན་ཚིག་] Σ; ཅི་ཡང་དང་བས་རབ་དུ་མཚོན་ཚིག་ Thimphu. གཟུ་] Σ; བཟུ་ Thimphu.

26b: ཙོག་སྲུས་] Σ; ཙོག་སྲུས་ Thimphu. ཚུ་གཙང་མཚོན་ཡོན་] Σ; ཚུ་གཙང་རབ་དང་ས་མཚོན་ཡོན་ཇི་སྤྲེད་ Thimphu.

26c: བདུང་བའི་] Σ; བདུང་བས་ Thimphu. ཇུ་ཅེ་འི་] Σ; ཇུ་ཅེ་འི་ Bkra.

26d: ཉེ་བའི་] Σ; ཉེ་བ་ Zhal.

(ラーヴァナ:)

「けたたましい歌声で、頭を鷲掴みにして導いて下さるあなたに捧げる言葉を何遍もジャッカルの鳴き声のように轟かせながら体を曲げ
 ひざまずく恰好をして儀軌に専念しながらご用意致しました清らかな閻伽水や、上等な水差しの中に入れた
 茶の飲み物という、ウマーのご主人（シヴァ）を幾度も喜ばせようと増大する妙欲や、
 チュツェ地方の織物などのこの品々は
 満月の夜の月に死という太陽の光が近づいて来るのを妨げ、少なからず商売の成果を
 挙げるためのものです。」 (26)

ca—cha—ja—nya kha phreng の技法が用いられている。これに加えて、第一詩脚では ca 音、第二詩脚では cha 音、第三詩脚では ja 音、第四詩脚では nya 音による押韻の技法が用いられる。これは単語単位で繰り返される押韻 (tshig la bskor ba'i rjes khrid) であり、ヴィダルバ様式とガウダ様式で共通に認められる技法である ('Bab stegs 39.12ff.)。

ca co'i glu 「けたたましい歌声」 内容を伴わず (brjod bya don gyis stong pa)、思慮を欠いた出まかせ (rang dgar lab rdol) の言葉を ca co という。ラーヴァナは謙遜して、自らが発しているのはこのような無意味な言葉に過ぎないと述べている (Track 7, 18:05)。

co nas 'dren khyod 「頭を鷲掴みにして導いて下さるあなた」 『大乘莊嚴經論』に「髪を掴まえて引き上げるようにして過失という深坑から力づくで引き上げる」という類似表現がある⁷²。サンスクリットの keśa 「髪」をチベット語では co 「頭」と表現する。

lus gu 「体を曲げ」 ラーヴァナが身体を曲げる行動を取った理由は、シェルシュルワによると、異教徒の慣習では南、北、西の三方向を向いて神を念想することが定められているため、もしくは不死の境地を求めて長期にわたって供犠を行なったものの、すぐに果報が得られなかったことで機嫌を損ねたためである ('Bab stegs 38.10ff.)。あるいはまた、トンドゥップギヤ、カンブム、ジャバの解釈によると、ラーヴァナがそのような姿勢を取ったのは、どこにいるのか分からないシヴァの所在を探そうとしたためである (Track 7, 19:40; Dgongs rgyan 32.6f.; Mun sel 56.5)。

⁷²MSA XIV 48 (cf. 小谷 1984: 189f.; 岩本 2002: 246): pracodyamāṇaḥ satataṁ ca saṁmukhaṁ tathāgatāir dharmamukhe vyavasthitaḥ | nigṛhya keśeṣv iva doṣagahvarāt nikṛṣya bodhau sa balān niveśyate ||; MSA_D 20b4: chos kyi sgo la rnam par gnas pa la || de bzhin gshegs rtag mngon sum 'doms mdzad cing || co nas 'dren bzhin nyes pa'i tshang tshing nas || mtshan gyis drangs te byang chub la dgod do || (「諸々の如来は、法の入り口に立脚している者を、常に目の前で勇気付けながら、あたかも髪を掴まえて引き上げるようにして彼を過失という深坑から力づくで引き上げ、菩提に入らしめるのである。」)

'dod yon 「妙欲」 色、香、声、味、触の五つを妙欲 (Skt. *kāmaguṇa*) という。とめどなく倍増 (*guṇa*) を繰り返してやまない欲望対象 (*kāma*) を意味する (cf. AKV ad AK III 28)。ラーヴァナが用意した茶の中には魅力的な色彩や芳香や美味が含まれる (*'Bab stegs* 38.16)。

ju rtse 「チュツエ地方」 漢土 (*rgya nag*) の地方名。絹織物 (*dar gos*) の産地である (Track 7, 22:15; *Dgongs rgyan* 32.13)。

nya gang zla bar 'chi ba'i nyi 'od 「満月の夜の月に死という太陽の光が」 陰暦十五日の満月の日になると、太陽と月の間の距離が大きくなるため、太陽の光が月面に到達できなくなるという考えがある。満月の夜に力を失った太陽の光は、ラーヴァナが最も恐れる死の苦しみ (*'chi ba'i sdu g bsngal*) を表す隠喩である (*'Bab stegs* 39.1ff.)。

དེ་ལོ་ཡུན་རིང་བྱ་དཀའ་དག །
 ཐོ་ཚོམ་མེད་པར་སྤྱད་པའི་ཚོག །
 དེ་ལྟར་གཅད་སྤྲོ་བ་ནི། །
 རྗེ་ཚོའི་སྒོ་ལྷལ་ཅན་གྱིས་ཐོས། །

27a: དེ་ལོ་] ཏ; དེ་ལོ་ Thimphu.

相当に長い時間に及ぶ困難な行を
 疑いを抱くこともなく行なった者 (ラーヴァナ) の言葉が
 こうして疲労困憊の末に語られるのを
 鸚鵡の柔らかな羽毛を持つ者は聞いた。(27)

te—the—de—ne この詩節でも *kha phreng* の技法が用いられている。

ne tso'i sgro thul can 「鸚鵡の柔らかな羽毛を持つ者」 シヴァ神のことである。

རྟག་ཏུ་འཚོ་བྱེད་ཏེ་དམར་ཅན། །
 ཡིད་འགྲོའི་སྒོག་གི་བཞེན་པ་སྟེ། །
 འདི་དང་འགྲོགས་པའི་འབོད་སྒྲོགས་སྒོག །
 ཉལ་འགྲོ་གཡོ་མེད་རེ་བ་དེས། །
 ལྷགས་ཀྱི་བདག་པོའི་ས་འཛིན་གདོང་། །
 བ་སྤྱི་རྩ་ལྗང་གཟིམ་མལ་དུ། །
 རབ་ཏུ་གཉིད་ཚུལ་ཟིལ་བ་ནི། །
 ངོ་ཚའི་བསེར་བྱས་བཅིངས་པ་ཉིད། །

28b: སྒོགས་] ཏ; སྒོགས་ Thimphu.

29b: རྩ་] ཏ; རྩ་ Zhal. གཟིམ་] ཏ; གཟིམས་ Thimphu.

常に猛威を振るう風 (赤い馬に乗る者) は
 有情 (心で進む者) の生命の乗り物である。
 これと連れ立って行くラーヴァナが、生命の
 河 (寝そべって進む者) の不滅を望む彼が (28)
 パシュパティ (シヴァ) の山 (大地の保持者) という顔の
 緑の草といううぶ毛の寝台の中で
 睡魔に襲われて眠りこけていた雫を
 羞恥心というそよ風を用いて絞り出したのだ。(29)

rtaṅ tu 'tshé byed rta dmar can 「常に猛威を振るう風（赤い馬に乗る者）」 風（ルン）は生命の乗り物である。その風の運動（g-yo ba）と溶解（thim pa）によって生と死がもたらされる。風は抵抗しがたい生と死をもたらすことから、有情にとって猛威を振るう存在である。『密意解釈タントラ』（*Samdhivvyākaraṇatantra*）に「有想であれ無想であれ、有情と名付けられるこの者の持続は風によって起こり、また風によって停止する」⁷³と説かれる。この風は秘密閻魔天（*gsang ba'i gshin rje*）に等しい存在とみなされる。閻魔天と羅刹の王ラーヴァナは共に連れ立って行く仲間である（'Bab steps 41.1ff.）。**rta dmar can** 「赤い馬に乗る者」はサンスクリットの *rohitāsva* に相当し、一般的には火神（*agni*）を意味するが、ここでは *rlung* 「風」を意味する詩的語彙として用いられている。

yiḍ 'gro 「有情（心で進む者）」 **sems can** 「有情」を意味する詩的語彙である。

nyal 'gro 「河（寝そべて進む者）」 **chu bo** 「河」を意味する詩的語彙である。

rab tu gnyid myos zil ba 「睡魔に襲われて眠りこけていた雫」 緑の草の先端に付着する雫は、不死の境地を授けることができずに羞恥心に襲われたシヴァの冷や汗（*rngul chu*）を表す隠喩である（'Bab steps 41.14ff.）。本来は生物にそなわる「睡眠」（*gnyid log pa*）という属性が非生物である雫に帰せられている。転移（*ting nge 'dzin, *samādhi*）と呼ばれる技法である（'Bab steps 41.20ff.; KĀ I 93）。シヴァの顔（＝山）のうぶ毛（＝緑の草）で眠っていた汗（＝雫）が、羞恥心（＝そよ風）に刺激されて思わず外に溢れ出てしまうという擬人化された情景が描かれている。

གཤོ་སྐྱུ་འཇིག་མེ་ལྷུ་འཇིག་རྟེན་འདི། །
 ལྷག་མ་མེད་པར་བ་བྱེད་པ། །
 རྩོད་པ་ཅན་གྱི་རོ་འཇིག་གྱི། །
 བད་མཚོར་དབྱེད་མ་ཅན་ངང་མོ་དཀར། །
 ལ་ཡི་གེ་སར་ལོ་ཉ་པ། །

欺瞞という炎でこの世界を
 残さず食べ物にしようとする
 シヴァ（骸骨を手にする者）の舌という蓮池に
 呼びつけられたサラスヴァティーという雌の白ハンサ鳥は
 彼の口という花糸の使者であった。(30)

g-yo sgyu'i me lces 「欺瞞という炎」 シヴァが行なおうとしている欺瞞。すなわち、ラーヴァナに不死の境地を授ける能力がないことを隠し、あたかも彼の望みを叶えたかのように振る舞うことである（'Bab steps 42.16ff.）。「炎」は世界の終末をもたらす火のことである（'Bab steps 42.19）。

za byed pa 「食べ物にしようとする」 だますこと（*bslu bar byed pa*）ことを意味する（'Bab steps 41.20）。タシルンボ版には *zad byed pa* 「(世界を) 消滅させる」という異読が与えられている（'Bab steps 42.8）。シヴァが破壊の神であることを考慮すれば、この読みにも合理性があると思われる。

thod pa can 「シヴァ（骸骨を手にする者）」 サンスクリットの *kapālin* に相当する表現。大自在天シヴァを意味する詩的語彙である。

དབྱེད་མ་ཅན་གྲོག་གི་ཕྱིང་བ་ནི། །
 ལྷུང་མངས་སྤྱིན་གྱི་སྤྱོད་དབྱེད་མ་ཅན། །
 ཡིད་ལྷར་མཚོགས་དེ་མགྱིན་བརྩུ་ཡི། །
 ལ་ཡི་ལྷ་འཇིག་མངལ་བཟང་དུ། །

⁷³SVT_D168a5f.: 'du shes can dang 'du shes med || sems can du brtags 'di gnas pa || de nams lung las byung ba ste || lung las slar yang 'gag pa yin ||

ལྷགས་པས་རང་གི་མངའ་བ་བཟང་ཉམས། །

31b: མངའ་] Gser, Mkha', Bkra; མང་ Zhal. ལྷག་མངའ་སྤྱི་སྤྱོད་བཟང་ཅན་ om. Thimphu.

また、サラスヴァティーという一群の閃光は
ヴィーナーという雷鳴（雲の音）の音色を持つものであった。
意識のごとく迅速に動く彼女がダシャグリーヴァの
口という雲（水を保持する者）の心地よい胎内に
入ると自身の素晴らしい輝きを失ってしまった。(31)

sprin gyi sgra「雷鳴（雲の音）」 サンスクリットの meghanirghoṣa に相当する表現。'brug sgra「雷鳴」を意味する詩的語彙である。ここではサラスヴァティーが奏でるヴィーナーの音色が「雷鳴」という隠喩によって表現されている。

gid ltar mgyogs「意識のごとく迅速に動く」 サラスヴァティーの神通力 (rdzu 'phrul) の速さを表現している ('Bab stegs 43.5)。シヴァからの伝言が理に叶っているか否かについて、ゆっくり検討する時間をラーヴァナに与えなかったことを暗示している (*Mun sel* 66.16ff.)。

chu 'dzin「雲（水を保持する者）」 サンスクリットの jaladhara に相当する表現。sprin「雲」を意味する詩的語彙である。ここではラーヴァナ（ダシャグリーヴァ）の口が「雲」という隠喩によって表現されている。

rang gi mdangs bzang nyams「自身の素晴らしい輝きを失ってしまった」 サラスヴァティーはシヴァの言葉を伝える使者としてラーヴァナのもとに赴いたが、その言葉は無条件に不死の境地を約束するものではなく、「ラーヴァナの馬の首が切断されない限りは死なない」という限定付きの不死の境地を約束するものでしかなかった ('Bab stegs 43.7f.)。まるで雨雲の中に入った稲妻が自身の輝きを失うように、サラスヴァティーはシヴァの欺瞞に加担することによって彼女自身の本来の輝きを失ったのである (*Mun sel* 66.2ff.)。

གེ་སར་རྩལ་ཚོགས་ལ་སྤོང་བའི། །
པད་མ་གཞོན་ལྷ་བྱུང་བ་ལ། །
ངོ་འཇུག་གནག་པར་འདོད་པ་ནི། །
རང་དབང་གསོད་བྱེད་གདུང་བས་ཕྱོགས། །

32d: གསོད་] ས; བསོད་ Thimphu. གདུང་] ས; གའོད་ Thimphu. ཕྱོགས་] ས; ཕྱོག་ Zhal.

花糸の中の粒々を愛する
若い蓮華は蜜蜂に向かって
怒った表情を見せようとしたが
命取りとなる苦しみによって支配力を奪われた。(32)

pad ma gzhon nu「若い蓮華」 生じて間もない蓮華 (gsar skyes pad ma) を意味する (Track 9, 27:30)。gzhon nu「若者」が pad ma「蓮華」の隠喩となっているという解釈も不可能ではないが、おそらく「若い蓮華」がシヴァを暗示していると理解するのが最も自然であろう。

ngo 'dzum gnag par 'dod pa ni「怒った表情を見せようとしたが」 秋の終わり (nam mjug 'chad kha) の季節になると、蓮華は花糸の中の粒々が誰かに取り去られてしまうのを恐れ、花卉を使って花糸を包み、近づいてくる蜜蜂には警戒して怒った表情を見せる ('Bab stegs 44.4ff.)。

gsod byed gdung bas「命取りとなる苦しみによって」 冬がもたらす寒さのことである。gdong bas「顔によって」という異読もあるが、これでは意味をなさない ('Bab stegs 44.7ff.)。

rang dbang...phrogs 「支配力を奪われた」 蓮華は近づいて来る蜜蜂を警戒して花卉を閉ざし、怒った表情を見せようとしていたが、冬の寒さに負けて萎れてしまった。ちょうどそれと同じように、シヴァはラーヴァナの請願に応じ、不死の境地を彼に授けようと試みたが、死神の主 (las kyi gshin rje) の力を凌ぐことはできず、結局その試みに失敗してしまった (*'Bab stegs* 44.2ff.)。「支配力」とは自らの意志で開花しようとする力 (me tog gi kha 'byed pa'i rang dbang) のことを意味する (Track 10, 1:10)。この詩節において「若い蓮華」はシヴァを表し、「蜜蜂」はラーヴァナを表す。縮約表現 (bsdus brjod, *samāsakti) の技法が用いられている (*Dgongs rgyan* 37.17ff.)。

མྱེད་མེད་བུ་ཡི་སོ་ལྷན་གྱི།
 འགྲམ་པ་དབྱངས་ཅན་རྒྱ་བ་ཡི།
 རུལ་གྱི་ཐིགས་པས་མཛེས་པ་ནི།
 མཁའ་ལ་སྐར་ཚོགས་མྱེད་བ་བཞིན།

33b: རྒྱ་བ་ཡི།] Σ; རྒྱ་བ་ཡིས་ Thimphu.

33c: ཐིགས་པས་] Mkha'; ཐིགས་པ་ Σ.

ナーラーヤナという象（牙を持つ者）の
 頬をサラスヴァティーという月のような
 水しぶきがきれいにした。
 空を一群の星々がきれいにするように。(33)

sred med bu 「ナーラーヤナ」 ナーラーヤナの力を具える羅刹の支配者 (sred med bu yi stobs dang ldan pa'i srin po'i dbang po)、すなわちラーヴァナのことである (*'Bab stegs* 44.10f.)。

so ldan 「象（牙を持つ者）」 サンスクリットの dantin に相当する表現。glang chen 「象」を意味する詩的語彙である。

zla ba yi rdul gyi thigs pas mdzes pa 「月のような水しぶきがきれいにした」 月のように白い水しぶきで頬をきれいに化粧したという意味である。ここでは色白の美女サラスヴァティーによってシヴァの言葉がラーヴァナに届けられる様子が、梅檀の樹から抽出された白い樹液 (thang chu) のしぶきによって象の頬に化粧が施される様子になぞらえて表現されている。「象」はラーヴァナを表す隠喩であり、「水しぶき」はサラスヴァティーを表す隠喩である (*'Bab stegs* 44.10ff.)。

གང་གི་ཁ་ཡི་ཁུ་གཏེར་ནི།
 གཡོ་སྐྱུའི་ལྗོས་ཁུ་གང་བ་སྟེ།
 དེ་ལས་འོངས་པའི་བབ་ཅོལ་གྱི།
 རྒྱངས་པ་ནམ་མཁའ་འོལ་བ་ཉིད།

自身の口という海（水の蔵）を
 欺瞞という塩水で満杯にしている
 その者（シヴァ）から発した杜撰な約束という
 蒸気は天空を覆うカーテンとなった。(34)

chu gter 「海（水の蔵）」 サンスクリットの ambhodhi、ambudhi、jalanidhi などに相当する表現。rgya mtsho 「海」を意味する詩的語彙である。

g-yo sgyu'i myos chu 「欺瞞という塩水」 諸註釈に従い、myos chu を「塩水」(ba tshwa'i chu) の意味で理解する (*'Bab stegs* 45.14; *Dgongs rgyan* 39.12; *Mun sel* 70.22)。「塩水」というのはシヴァ

の欺瞞を表す隠喩である。myos chu には「マダ液」（madajala, 発情期の象の頭から分泌される液体）の意味もある。

bab col 「杜撰な約束」 シヴァはラーヴァナに「杜撰な約束」をした。すなわち、ラーヴァナに無条件の不死の境地を授ける素振りをして、実は「馬の首を切り落とされない限りは死なない」という限定付きの不死の境地を彼に授けた（'Bab stegs 45.11f.）。

nam mkha'i yol ba nyid 「天空を覆うカーテン」 「天空」はラーヴァナの心を表す隠喩であり、「カーテン」は雲の集まり（sprin gyi tshogs）を表す隠喩である（'Bab stegs 45.15f.）。

མཚན་མོར་རྒྱ་བའི་མགོན་པོ་ཆེ། །
 ཀང་རྒྱལ་པ་དེ་འཆི་མེད་ཀྱི། །
 མཁའ་ལ་བགྲོད་པར་འདོད་ན་ཡང་། །
 རེ་བའི་མེ་དྲོད་ཉམས་བྱེད་པ། །
 ལྷ་ཆེན་གྱིས་སོ་བུ་ཡུག་གི། །
 འཇུབ་མ་གངས་རིའི་བློ་མ་སྟོ། །

35c: བགྲོད་] ཟ; འགོ་ Thimphu.

35f: བློ་མ་སྟོ།] ཟ; བློ་མ་སྟོ་ Thimphu. སྟོ་] ཟ; སྟོ་ Gser.

羅刹（夜に蠢く者）達の大首領である
 かの蜂（ラーヴァナ）は不死の境地という
 天空を駆け巡りたい気持ちであったが
 願い事という暖かい火を弱める
 ——これは大自在天（シヴァ）の仕業だ——猛吹雪の
 嵐が雪山に雪片を撒いて広げた。(35)

lha chen gyis so 「これは大自在天（シヴァ）の仕業だ」 シヴァの欺瞞の言葉が分厚い雲の塊（sprin tshogs stug po）となり、その雲が猛吹雪を招いた（'Bab stegs 46.1f.）。この言葉は前後の両方の表現に掛かり、「願い事という暖かい火を弱めるのは大自在天の仕業だ」（re ba'i me drod nyams par byed pa ni lha chen gyis so）、「大自在天の仕業で猛吹雪の嵐が雪山に雪片を撒いて広げた」（lha chen gyis bu yug gi 'tshub ma gangs ri'i zegs ma spro）という二文をここから構成することができる。灯明（gsal byed, *dīpaka; KĀ II 97）と呼ばれる技法である。

'tshub ma gangs ri'i zegs ma spro 「嵐が雪山に雪片を撒いて広げた」 この結果、ラーヴァナという蜂は不死の境地という天空を駆け巡ることができなくなった（'Bab stegs 45.20f.）。

རང་མགོ་ལྷ་བ་རྒྱུད་གིས་ནི། །
 མཁའ་མར་ལྷ་བ་ཉིད་འོས་ཞེས། །
 དར་དྲིར་ཚོལ་ཆུང་སྟོགས་བཞིན་དེས། །
 བྲང་ནི་འཇིན་མའི་ཐོ་བ་བྱས། །
 ཏུགས་ཀྱི་ལ་བུ་འདོད་པ་དེས། །
 ཕྱི་བའི་རྒྱན་དག་ཐོབ་པས་ཆོམ། །

36b: མཁའ་མར་] ཟ; ཐ་མར་ Thimphu.

35c: སྟོགས་] ཟ; སྟོག་ Thimphu, Bkra.

35d: ཐོ་བ་] ཟ; ཐོ་བར་ Thimphu.

35e: ལ་བུ་] ཟ; ལག་བུ་ Thimphu.

35f: འཇིག་ལྔ་ཁྲི་ལྔ་། སྟེ། འཇིག་ལྔ་ཁྲི་ལྔ་། Thimphu.

「自分には二組の五頭（＝十の頭）があるのだから
最期は五の時（＝死）こそが似つかわしい」とでも言うように
ぼそぼそと無意味な言葉を発しながら
彼（ラーヴァナ）は胸を大地を打つ槌となした。
砂糖菓子を探していた彼は
鼠のふんを得て満足した。(36)

rang mgo lnga ba zung gis ni 「自分には二組の五頭（＝十の頭）があるのだから...」 二組ある「五つ」の頭が「五の時」すなわち死という運命を象徴している。諸註釈によれば、ここで用いられているのは「(類似した結果の) 指摘」(nges bstan, *nidarśana; KĀ II 348) という技法である ('*Bab stegs* 47.9ff.; *Dgongs rgyan* 41.4ff.)。

brang ni 'dzin ma'i tho ba byas 「胸を大地を打つ槌となした」 あたかも胸を地面に押し付けるようにして、シヴァに幾度も礼拝した (phyag mang du btsal) という意味である ('*Bab stegs* 46.13f.)。詩的空想の技法が用いられている ('*Bab stegs* 47.11f.)。

hwags kyi la du 「砂糖菓子」 hwags はサンスクリットの phāṇita に相当する単語。サトウキビの成分を濃縮した液体である。la du (Skt. laḍḍu) はインドの甘い砂糖菓子であり、トンドゥップギヤによれば中国の点心、チベットのカラコリ (ka ra go re) に相当する甘みのある軽食である。インドではガナプージャ (tshogs mchod) の際に食されるという (Track 10, 21:10)。ラーヴァナが求める不死の境地を表した縮約表現 (bsdus brjod, *samāsokti) である (*Dgongs rgyan* 41.7)。

byi ba'i brun dag 「鼠のふん」 ラーヴァナのそう遠くない死という運命を表した縮約表現である ('*Bab stegs* 46.16f.; *Dgongs rgyan* 41.7)。

[4] シーター、ラーマナの妃として迎えられる

དེ་ནི་རྒྱལ་སྲིད་འཛིན་མ་ལ། །
འཕྲིན་ཡིག་ཀང་རྗེས་འགོད་པ་ན། །
རྒྱ་མཚོའི་མངལ་ནས་ལྷ་དཀར་བཞེན། །
འཆི་མེད་བྱ་མེད་ལང་ཚོ་ནི། །
སློ་བུར་ཉིད་བྱ་རྟོངས་བྱེད་པ། །
མངལ་བཀྲ་བྱ་མོ་མཛེས་མ་བཅས། །

37c: མངལ་ནས་། Zhal, Mkha', Bkra; མངལ་ལས་ Gser; མངལ་ལ་ Thimphu.

37e: རྟོངས་། སྟེ། རྟོང་ Thimphu.

彼（ラーヴァナ）が王政という地に
勅書という足跡を残していた頃
海という子宮から白い月が誕生するように
神々の娘達の若さ溢れる魅力を
たちまち色褪せたものにしてしまう
色鮮やかに輝く美しい娘が誕生した。(37)

rgya mtsho'i mngal nas zla dkar bzhin 「海という子宮から白い月が誕生するように」 有名な乳海攪拌の神話に基づく表現である。「月」は美しい娘シーターを表す直喩であり、両者の間に成立する共通属性は「色鮮やかに輝くこと」(mdangs bkra) である ('*Bab stegs* 50.1ff.)。

glo bur nyid du rnyings byed pa 「たちまち色褪せたものにしてしまう」 シェルシュルワによると、rnyings「色褪せた」の代わりに nyams「衰えた」という読みを与える伝本がある。いずれの読みでも意味に大きな違いはない（'Bab stegs 50.11f.）。天女達の魅力を減じる程に美しい娘が誕生したというのは、世間の常識を逸脱して語られた詩的表現であり、インド東部ガウダ人が認める「愛らしさ」（mdzes pa, *kānti; KĀ I 85）という美質（shar phyogs gau dā bas bzhed pa'i mdzes pa'i yon tan）を具えたものである（'Bab stegs 50.10f.）。

ཀླུ་གསལ་མངལ་ལས་བདེ་སོགས་གྱི།
 བདག་པོའི་གཞུ་ནི་རྟེན་འོངས་པ།
 མིག་སྤོང་རང་གི་ལག་པ་ཡི།
 མཚོན་ཆ་གཞན་ལ་དགའ་བ་མེད།

38a: མངལ་ལས་] Σ; མ་ལ་ Thimphu.

38b: འོངས་པ་] Σ; འོང་བ་ Bkra.

天空（一切を照らす者）の胎内から
 虹（シャチーの夫の弓）が到来すると
 インドラ（千の眼を持つ者）は自分の手元にある
 他の武器には何の興味も覚えなかった。(38)

kun gsal 「天空（一切を照らす者）」 サンスクリットの ākāśa (< ā-kāś) に相当する表現。nam mkha' 「天空」を意味する詩的語彙である。

bde sogs kyi bdag po'i gzhu 「虹（シャチーの夫の弓）」 「シャチーの夫」（bde sogs kyi bdag po, *śacīpati）とはインドラであり、「インドラの弓」と言えば虹のことである。虹は天空という美女（sgeg mo）の「胎内」から誕生する。ここでは美しいシーターを虹になぞらえて表現している（'Bab stegs 51.2ff.）。

mtshon cha gzhan la dga' ba med 「他の武器には何の興味も覚えなかった」 インドラが手にしていた弓（すなわち虹）という美しい武器は失われ、羅刹の国に渡ってしまった。弓を失ったインドラの手元には金剛（ヴァジュラ）などの他の武器が残っていたが、それらは彼の心を魅了するものではなかった。詩的空想に基づく表現である（'Bab stegs 51.4ff.）。

ཉི་མ་རང་གི་གྲོགས་མོ་ནི།
 སྲིན་པོའི་གྲོང་ན་འདུག་པ་དེ།
 མ་བཟོད་ཀྱི་སྤྱེགས་འཛིན་མ་ལ།
 ཚ་བེར་འགྲེད་ཕྱིར་རིངས་པར་འོངས།

39a: གྲོགས་མོ་] Σ; གྲོག་མོ་ Gser.

39d: འགྲེད་ཕྱིར་] Σ; འགྲེད་ཅིང་ Thimphu.

太陽も自分の恋人が
 羅刹の街に住むことに
 我慢できず樹脂で塗られた地面に
 太陽熱を浴びせようと急いでやって来た。(39)

rgya skyegs 'dzin ma 「樹脂で塗られた地面」 羅刹の国の地面は樹脂（rgya skyegs = la cha）で出来ている（'Bab stegs 51.9）。

tsha zer 'gyed phyir rings par 'ongs 「太陽熱を浴びせようと急いでやって来た」 太陽は空に浮かぶ虹を自分の恋人と思っていたが、虹が恐ろしい羅刹の国に行ってしまったことに我慢できず、松脂で塗られた羅刹の街を自分の熱で燃やしてしまおうと考えて、ぎらぎらと照りつけた。詩的空想に基づく表現である（'Bab stegs 51.6ff.）。あるいは、太陽の恋人は「蓮華」（太陽が昇ると開花する種類の蓮華）であると解釈しても良い。この解釈によれば、美しいシーターを蓮華になぞらえていることになる（Dgongs rgyan 43.23; Mun sel 80.7ff.）。

དགེ་ལམ་གཞན་གྱི་མཚན་མ་ཡི།
 གཟུགས་ལ་བཟླ་ཕྱིར་ལག་པ་ནི།
 དངུལ་དཀར་མེ་ལོང་གཉིས་སྐྱེས་ཀྱི།
 གདོང་ལ་ཚོ་འདྲི་བཞིན་དུ་བཟླ།
 ཀུ་ཀོ་ལ་ཡི་མིན་སུ་འདྲི།
 ལྷ་ཡི་གོ་གས་སུ་འོས་ཞེས་སྐྱེས།

40b: གཟུགས་ལ་] Σ; གཟུགས་བཟླ་ན་ Thimphu.

40e: ཀུ་ཀོ་ལ་] Σ; ཀུ་ཀོ་ལ་ Thimphu. མིན་སུ་འདྲི་] Gser, Thimphu; མིན་སུ་ནི་ Zhal, Mkha', Bkra.

吉相であるか否かを示す予兆の
 現れを見るために〔シーターの〕手という
 純銀の鏡をバラモン（再生族）の
 顔に向かって嘲るかのようにして見せたところ
 「カーコーラの毒に等しいこの羅刹女は
 河の友にふさわしい」とのお告げであった。(40)

lag pa ni dngul dkar 「手という純銀の鏡」 シーターの透き通るような美しい手を「純銀の鏡」という隠喩で表現している。ni 助詞は韻律を合わせるために置かれた虚辞である（'Bab stegs 52.5ff.）。

gnis skyes 「バラモン（再生族）」 再生族（Skt. dvija）とは上位三ヴァルナの男性のことであるが、ここではバラモンを意味する。このバラモンは手相を見て吉凶を判断する手相占い師（mtshan mkhan）である（'Bab stegs 52.7）。

gdong la co 'dri bzhin du bstan 「顔に向かって嘲るかのようにして見せた」 バラモンの醜い顔がシーターの手という「鏡」に映ったので、その手はまるでバラモンの顔を嘲るかのようであった。隠喩と詩的空想が組み合わさった表現である（'Bab stegs 52.8ff.）。

kā ko la 「カーコーラの毒」 カーコーラ（Skt. kākola）は毒の一種。羅刹の国を滅ぼす元となる（'Bab stegs 52.11f.）

srin bu 'di 「この羅刹女は」 srin bu ni 「羅刹女は」という読みもある。さらに、シェルシュルワによると bu mo ni 「娘は」という異読もある（'Bab stegs 52.13ff.）。

chu yi grogs su 'os 「河の友にふさわしい」 娘は羅刹の国を破滅させる毒も同然なので、河に流して捨ててしまえという意味である（'Bab stegs 52.11ff.）。あるいは、河の神に生贄として捧げよという意味である（Mun sel 82.16, 83.10ff.）。

དེ་ནས་དེ་ནི་དུ་ཕྱེད་བཞིན།
 འབབ་པ་དགའ་བ་བཟླ་དུ་ཕྱིར་བཏང་།
 རང་ཉིད་གར་འགྲོའི་གཏོལ་མེད་པ་ལྟེ།
 ལྷ་ཀླུང་དགའ་མ་ཕྱིར་ཏེ་གྲོས།

- 41b: འབབ་པ་] ཟ; འབབ་ལྗན་ Thimphu. བསྐྱེད་] ཟ; སྐྱེད་ Thimphu.
 41c: འགྲོ་འདི་] ཟ; འགྲོ་ Bkra. གཏོལ་] ཟ; བརྟོལ་ Thimphu.
 41d: དགའ་མ་] ཟ; མཁའ་ལ་ Thimphu.

それから彼女は泡沫の連なりを顔に
 浴びている者（河）を喜ばせるために手放された。
 自分がどこに向かって行くのかも分かっていない
 河は愛する女を背負って逃避行をした。(41)

dbu phreng bzhin 'bab pa 「泡沫の連なりを顔に浴びている者（河）」 シェルシュルワによると、「泡沫の連なり」は真珠の首飾りを連想させ、「泡沫を顔に浴びている」という表現は汗が顔面 (bzhin gyi dkyil 'khor) にかかっている様子を連想させる ('Bab stegs 53.10f.)。ジャバは bzhin を「～のように」、'bab pa を名詞「水流」の意味で理解し、第一・第二詩脚を「彼女はまるで泡沫の連なりのように (dbu phreng bzhin) [=まるで泡沫の水の一部となるかのように] 水流 ('bab pa) を喜ばせるために手放された」と解釈する (Mun sel 84.13f.)。この一節は、ジャバの解釈によれば、シーターの親（ラーヴァナ）が彼女を大切に宝箱に入れて、決して乱雑に投げ捨てるのではなく、中に沈まないように、ゆっくりと丁寧に水に浮かべた様子を表現している (Mun sel 85.12ff.)。

dga' ba bskyed phyir btang 「喜ばせるために手放された」 占い師の言葉を受けて、シーターは宝箱 (rin po che'i sgrom) の中に閉じ込められ、河に流された。ここでは転移 (ting nge 'dzin, *samādhi) の技法が用いられ、その河が擬人化されている。「河を喜ばせるために遣わされた」とは、河に嫁入りさせられたという意味である ('Bab stegs 53.9ff.)。

chu klung dga' ma khyer te bros 「河は愛する女を背負って逃避行をした」 シェルシュルワによれば、新妻のシーターが他の男に奪われるのを恐れ、河は彼女を背負って急いで逃げて行ったことを意味する ('Bab stegs 53.14f.)。また、ジャバによれば、もたもたしていたらシーターの親（ラーヴァナ）が考えを変えて、溺愛する娘を嫁に出すのを止めてしまうのではないかと考えて、河は急いで逃げて行ったという意味である (Mun sel 85.3f.)。

ལྷུང་གི་མལ་ཆེན་ཅི་ཐོག་ཟ་འོས་སྟེ་མ་མཐོ་ལྗན་བཤམས་པར་ལྷགས། །
 དེར་ནི་ངལ་བས་དྲན་པ་སྟོར་ཏེ་མིག་ཟུམ་གཉིད་ཀྱིས་འོན་པར་གྱུར། །
 ལུ་ཏིག་སྐྱེད་འབྲི་བ་སྐྱང་ལ་ཁུ་དྲ་བས་འབྲེལ་བར་སྤང་བ་བཞིན། །

- 42a: ཞིང་བ་ཡིས་] ཟ; ཞིང་བ་ཡི་ Bkra.
 42b: ཟ་འོས་] ཟ; ཟ་འོས་ Thimphu.
 42d: འབྲི་] ཟ; འབྲི་ Gser, Thimphu. འབྲེལ་བར་] ཟ; འབྲེལ་བས་ Thimphu.

積荷の重さのせいで疲弊した水流は、ジャンプ洲のある都城の農夫によって
 食べ頃の実を实らせ成長した穂で整えられた池という大寝台に入ると
 そこで疲労のために意識がなくなり、眼を閉じ、眠気に負けてしまった。
 真珠の首輪を描くかのような雄牛の唾液の網に包まれた時の蜜蜂のように。(42)

rtsi thog za 'os snye ma mtho ldan 「食べ頃の実を实らせ成長した穂」 秋の季節であることを表している (Track 11, 24: 30)。

mu tig phreng 'bri 「真珠の首輪を描くかのような」 詩的空想に基づく表現である ('Bab stegs 55.6f.)。mu tig phreng 'dra'i という読みに従えば「真珠の首輪のような」という意味の直喩表現となる。

ba glang kha chu dra bas 'brel bar sbrang bu bzhin 「雄牛の唾液の網に包まれた時の蜜蜂のように」 シーターを閉じ込めた箱 (sgrom) が渦巻く池の中にとどまっている様子を表した表現である ('*Bab stegs* 54.19ff.)。

ལོ་ཏྲིག་འདོད་པ་དེ་དག་ནི།
གཉིད་ཀྱི་བདེ་བ་མི་སེམས་ཏེ།
ཡུར་བ་རྣམ་པར་སྐྱལ་བྱེད་ཀྱི།
སློ་སྐྱེགས་བསལ་ཕྱིར་བཙོན་པ་བསྐྱེད།
དག་བྱེད་འདོད་དེ་བསྐྱེམས་པ་ལ།
རིན་ཆེན་སློམ་ཞིག་རྟེན་པར་གྱུར།

43a: ལོ་ཏྲིག་] Σ; ལོ་ཐོག་ Thimphu.

43d: བསལ་] Σ; གསལ་ Thimphu.

43e: ལ་] Σ; ལས་ Thimphu.

収穫を願う彼らは
眠りの快樂も求めず
水路というヴァイジャヤンタ宮殿の
扉のかんぬきを外すために尽力し
水（清めるもの）を求めて励むと
宝の箱を手に入れたのであった。(43)

lo tog 'dod pa de dag 「収穫を願う彼ら」 収穫を得るために努める農夫 (so nam pa) のことである (*Mun sel* 90.10)。

gnyid kyi bde ba mi sems te 「眠りの快樂も求めず」 農夫達が日の出よりも前に起床し、睡眠時間を削って灌漑の作業に励んでいた様子を表現している (*Mun sel* 90.18ff.)。農夫達は日の出前の暗い時間帯に作業をしていた時に、燦然と光り輝く宝の箱を見つけたのである。

rnam par rgyal byed 「ヴァイジャヤンタ宮殿」 ヴァイジャヤンタ (Skt. Vaijayanta) はインドラ神が住む宮殿の名前である。

dag byed 「水（清めるもの）」 サンスクリットの pāvana 「清めるもの」に由来する表現。chu 「水」を意味する詩的語彙である。灌漑用の水路を通じて入ってくる水は文字通り「池を清めるもの」(rdzing bu'i dag byed) であるともいえる (*Mun sel* 90.22f.)。

rin chen sgrom 「宝の箱」 宝で出来た箱 (rin po che las grub pa'i sgrom) を意味する ('*Bab stegs* 55.19)。「宝という箱」や「宝のような箱」ではない。

ལག་སྟོང་གི་འོད་ཚྭ་གས་ཀྱིས་ནི།
པད་མའི་ཚལ་འདི་མངོན་པར་བྱ།
མིག་ཡངས་དེ་ཡིས་ལྷ་བྱེད་གཞན།
རི་མོར་བྱིས་པའི་མིག་ཏུ་བྱས།

44b: འདི་] Σ; དེ་ Thimphu.

43c: གཞན་] Σ; དེ་ Thimphu.

44d: རི་མོར་] Σ; རི་མོ་ Mkha'.

手の指という日の光の束で

この蓮華の庭園を開花させると
切れ長の眼を持つその娘は他の眼を
絵に描いた眼のような状態にした。(44)

lag sor nyi 'od tshogs kyis 「手の指という日の光の束で」 宝で作られた箱の中には、おそらく箱以上に価値のある宝が詰まっているに違いないと考えた農夫達が一齐にその手を箱に伸ばしている様子を「光の束」という隠喩が効果的に表現している (*Mun sel* 93.14ff.)。

pad ma'i tshal 'di mngon par phye 「この蓮華の庭園を開花させると」 農夫達が宝の箱を手で開け、中に閉じ込められたシーターを救出したことを表している (*'Bab stegs* 56.12ff.)。「蓮華の庭園」という隠喩が表している比喩対象はシーターが閉じ込められた箱 (sgrom) である。「箱」という比喩対象 (dpe can) が明示されず、「蓮華の庭園」という比喩 (dpe) のみが示されるこの技法を、トンドゥブギヤは「隠された隠喩」 (sbas pa'i gzugs can) と名付けている (Track 12, 11:12)。

lta byed gzhan 「他の眼」 切れ長の眼をしたシーターの姿に見とれる農夫達の眼のことである (*'Bab stegs* 56.15ff.)。

ri mor bris pa'i mig tu byas 「絵に描いた眼のような状態にした」 農夫達はシーターのあまりの美しさに驚愕し、眼を動かすこともせず、固まった状態になった。動きを止めた彼らの眼を「絵に描いた眼」と表現している (*'Bab stegs* 56.15ff.)。この誇張表現にはガウダ様式に特有の「愛らしさ」という美質 (mdzes pa'i yon tan) が認められる (Track 12, 12:15)。

དེ་མཐོང་རྗེ་མའི་སྲིད་ལྡན་གྱིས། །
རང་གི་དགའ་མ་འཕྱུང་བ་བརྗོད། །
ལྷ་འོད་འཕྱང་ཆེ་ཀླུ་དཔེ། །
འདབ་མས་གྲོགས་ལ་འདུད་པ་དོ། །
ཆེད་དུ་གདགས་པ་མེད་པར་ནི། །
དེ་མིང་རོལ་རྟོད་མ་ཞེས་གྲགས། །

45b: དགའ་མ་] Σ; དགའ་མས་ Thimphu. འཕྱུང་] Σ; མཐོང་ Thimphu.

45c: འཕྱུང་] Σ; འཕྱངས་ Thimphu. ཀླུ་དཔེ་] Σ; ཀླུ་པེ་ Thimphu.

45d: འདབ་མས་] Σ; འདབ་མའི་ Thimphu. འདུད་པ་] Σ; འདུད་པར་ Gser.

彼女を見た睫毛という好色家は
自分の恋人を抱くことも忘れた。
月の光を口に含むとクムダ蓮華の花弁は
友に身を傾けることをやめてしまうのだ。
誰が名づけたわけでもないのだが
彼女の名はシーターとして知られるようになった。(45)

de mthong rdzi ma'i sred ldan gyis 「彼女を見た睫毛という好色家は…」 睫毛の恋人は眼である。睫毛が自分の恋人を抱くというのは、まぶたを閉じることを表している。この二詩脚が意味するのは、シーターの美しさに魅了された農夫達が眼を見開いた状態のまま固まってしまったということである (*'Bab stegs* 56.17ff.)。

zla 'od 'thung tshe ku mu da'i 「月の光を口に含むとクムダ蓮華の…」 月の光を飲んだクムダ蓮華の花弁は、官能的な感情に溺れ、自分の恋人 (grogs mo) である雌しべを抱くこと (*'dud pa = 'khyud pa*) をやめ、大きく開花するという意味である。あるいは別解釈によれば、花弁の友 (grogs) は月であり、花弁は月の光を飲むと月に向かって敬礼すること (*'dud pa*) をやめ、直立した恰好になるという意味である (*'Bab stegs* 57.3ff.)。

ched du gdags pa med par ni 「誰が名づけたわけでもないのだが…」 一般的に認められている原因（誰かによる名付け行為）を否定して、結果の状態（シーターという名称の普及）のみを描写する顕在化（srid pa can, *vibhāvanā）の技法である（'Bab steps 57.8ff.; Dgongs rgyan 50.2ff.; KĀ II 199, 203）。

rol rnyed ma 「シーター」 シーター（Sītā）はチベット語で Rol rnyed ma 「溝から発見された女」と訳される。

ལེགས་དཀར་གིང་རྟམ་ལེགས་དྲངས་པའི།
 ལྷ་མ་ཚ་ནི་གཟེ་འོད་འབར།
 ལུ་ལྷན་གྲོགས་མེས་དྲོ་བ་དག།
 མེ་དྲོག་དུས་དེར་ལྷན་ཅིག་བྱུང།
 ལུག་པའི་ཀན་གྱི་སྤྱོད་དང་ནི།
 ལྷན་ཅིག་གཏོར་ལེན་མིག་ལྷུང་བཞིན།

46a: ལེགས་དཀར་] Σ; ལས་དཀར་ Thimphu. ལེག་རྟམ་] Σ; གིང་རྟེ་ Bkra.

46c: གྲོགས་མེས་] Σ; གྲོག་མེས་ Gser.

立派な形の白い馬車に導かれて
 ラーマナが威光を放って出現したのと
 河が恋人に見捨てられたのは
 その花咲く季節の同じ時のことであった。
 ちょうどフクロウが喉を鳴らすのと同時に
 供物をくすねる者が眼を下に落とすように。(46)⁷⁴

chu klung grogs mos dor ba 「河が恋人に見捨てられた」 河に流されて来たシーターが農夫達によって保護され、河から離れたことを意味する。

me tog dus der 「その花咲く季節」 春が盛りに達した頃合いのことである（'Bab steps 58.7）。ラーマナとシーターの青春期（lang tsho'i dus）を暗に示しているとも取れる（Track 12, 19:00; Mun sel 96.16ff.）。

lhan cig byung 「同じ時のことであった」 若さ溢れるラーマナの出現と、同じく若さ溢れるシーターの河との別離という二者の性質（yon tan）および行為（bya ba）の同時性が表現されている。ここで用いられているのは同時性の描写（lhan cig brjod pa, *sahokti）という技法である（'Bab steps 58.12f.; KĀ II 351）。

lhan cig gtor len mig lhung bzhin 「供物をくすねる者が眼を下に落とすように」 供物をくすねる者（gtor len, *balipratigrāhaka）とは烏（bya rog）のことである。夜中、供物をくすねようとする烏達はフクロウが口を鳴らす音を聞くと、怖がって上を見上げることができず、地面の方をじっと見つめたまま固まってしまう（'Bab steps 58.10f.）。そのようにラーマナもまた、シーターの美しい姿の方をじっと見つめたまま固まってしまった（'Bab steps 58.8）。ラーマナのシーターに対する凝視の様子が描写されず、それを表す比喻のみが描写されるこの一節は、縮約表現として理解可能である（Track 12, 22:37）。あるいは、ちょうどフクロウと烏が出会うようにして、馬車に乗って登場したラーマナと、農夫達によって大切に保護されたシーターが初めて出会う様子を描写していると理解しても良い（Mun sel 97.7ff.）。

⁷⁴Kapstein (2003: 784f.) は第 46 詩節から第 50 詩節までを英訳し、そこに見られるサンスクリット文学からの影響について論じている。

འདི་ནི་རྒྱལ་པོ་དགའ་བའི་བཞིན། །
 འཛོལ་པའི་མེ་ལོང་ཉིད་འོས་ཞེས། །
 བསམ་པ་གཅིག་ཅིག་ཞིང་བཡི། །
 སྤྱོད་པའི་ཚོགས་ལ་བྱུང་བར་གྱུར། །

47b: 鏡] Σ; 忒斯 Thimphu.

「この娘は王様のお喜びになる顔を
 映す鏡として似つかわしいものである。」
 このように一つにまとまった考えが
 農夫達に浮かんだのであった。(47)

me long nyid 'os 「鏡として似つかわしいものである」 「鏡」はシーターの顔 (bzhin ras) もしくはシーターの若々しさ (lang tsho) を表す隠喩である ('*Bab stegs* 58.20; *Dgongs rgyan* 52.1f.; *Mun sel* 99.8)。「王の喜ぶ顔を映す鏡になる」とは、ラーマナ王の妃になるという意味である。

bsam pa gcig cig... 「このように一つにまとまった考えが…」 詩節には直接描写されていないが、このような考えを起こした農夫達はシーターをラーマナ王の妃として献上することとなる ('*Bab stegs* 59.3)。

དེ་ལུས་གསེར་གྱི་རྒྱལ་མཚན་གྱིས། །
 རྒྱལ་པོའི་པོ་བྱང་མཛེས་པ་སྤྱོད། །
 སྤྲོལ་གསལ་རིན་ཚེན་རྩ་ཚོ། །
 ཕྱོགས་ཀྱི་བུ་མེད་ན་རྒྱལ་ནོ། །

彼女の姿という黄金の旗印は
 王の宮殿に美しさをもたらし
 名声という宝の耳輪は
 諸地方という娘の耳飾りとなった。(48)

de lus gser gyi rgyal mtshan gyis... 「彼女の姿という黄金の旗印は…」 光り輝く黄金の旗印は宮殿に特別な美しさをもたらす。まさしくそのように、妃として迎えられたシーターはラーマナ王の宮殿に特別な美しさをもたらした ('*Bab stegs* 59.12ff.)。あるいは「宮殿」は「王」の隠喩で、「王という宮殿」と解釈することもできる。その解釈によれば、シーターの姿を表す「黄金の旗印」という隠喩と、ラーマナ王を表す「宮殿」という隠喩の間に関連性があるので、関連的隠喩 (ldan pa'i gzugs rgyan, *yuktarūpaka) の構造が生まれることになる ('*Bab stegs* 59.18; *KĀ* II 77)。ただし、カンブムはその点を指摘しつつも、「非常に不健全な解釈である」 ('*grel ha cang mi bde'o*) としてそれを退けている (*Dgongs rgyan* 52.16ff.)。

snyan grags rin chen rna cha 「名声という宝の耳輪」 最高の妃 (btsun mo dam pa) であるシーターの名声を表すか ('*Bab stegs* 59.16; *Mun sel* 101.5, 101.22f.)、もしくはそのような最高の妃を迎えたラーマナ王の名声を表している (*Dgongs rgyan* 52.18ff.)。

phyogs kyi bu mo'i rna rgyan no 「諸地方という娘の耳飾りとなった」 東西南北の四方の土地が「娘」という詩的語彙によって表現されている。シーターの名声が諸方に広がっていったことを表している。名声の隠喩である「宝の耳輪」と諸地方の隠喩である「娘」の間に関連性があるので、関連的隠喩の構造で理解できる ('*Bab stegs* 59.17ff.; *Dgongs rgyan* 53.3ff.)。あるいは「諸方」を文字通りの意味でとらえ、「名声が諸地方にいる娘達の耳飾りとなった」と解釈しても良い。すな

わち、名声が諸方の娘達によって耳にされるようになったという意味である (*Mun sel* 102.1ff.)。ただし、後者のように解釈する場合には、関連的隠喩の構造が崩れてしまうことになる (*Dgongs rgyan* 53.2f.)。

ས་སྤྱང་འདི་ན་སྤྱང་ལྷན་རྒྱལ་ས། །
 དེ་ཡི་གཏམ་ལ་ཆགས་གྱུར་ཏེ། །
 མིག་ཡངས་མཛེས་མ་གཞན་དག་ལ། །
 མི་ལམ་དུ་ཡང་ཆགས་མ་གྱུར། །
 དབྱངས་ཅན་མིང་ནི་བཟུང་འོས་ཏེ། །
 ལྷ་མོའི་ལག་པ་སུ་ཞིག་འདོད། །

49c: མིག་ཡངས་] ཏ; མིག་ཡང་ Zhal.

49e: བཟུང་] ཏ; གཟུང་ Gser, Thimphu.

この地上で情欲を抱く男達は
 彼女にまつわる話に熱中し
 切れ長の眼を持つ他の美女達には
 夢の中ですら欲望を感じなくなった。
 サラスヴァティーの名は繰り返し唱えるに値するが
 雌猿の手を握りしめたいと一体誰が願うであろうか。(49)

spra mo'i lag pa 「雌猿の手」 非常に醜い姿をした森の雌猿 (*gzugs shin tu mi sdug pa'i nags kyi spramo*) の手のことである (*'Bab stegs* 60.16)。なお、*spra* とは猿 (*spre'u*) によく似た尾を持たない動物であるとも言われる (ゴリラ、チンパンジー、オランウータン、テナガザルなどのことか)。*spra mo* はその雌である (*Mun sel* 100.14ff.)。シーターと他の美女達との間には、サラスヴァティーと雌猿ほどの違いがあるということを表している (*'Bab stegs* 60.17f.)。

སྤྱི་རྒྱུད་རིག་སྤྱི་རྒྱུད་མཁའ་དེ་རྒྱལ་ས། །
 སྤྱི་རྒྱུད་མིང་གི་བཟུངས་བཟོད་ཀྱིས། །
 འགྲམ་པ་རུས་པའི་འཕྲུལ་འཁོར་ནི། །
 དལ་བ་རྒྱ་མའི་ངོས་སུ་འཕྱང་། །

50a: སྤྱི་རྒྱུད་] ཏ; སྤྱི་རྒྱུད་ Gser; སྤྱི་རྒྱུ་ Thimphu.

50b: ཀྱིས་] ཏ; ཀྱི་ Thimphu.

50c: འགྲམ་པ་] ཏ; འགྲམ་པའི་ Thimphu.

50d: དལ་བ་] ཏ; དལ་བ་ Thimphu. འཕྱང་] ཏ; འཕྱང་ Thimphu.

かの男達という呪術師達は
 シーターの名を唱えてばかりいたので
 頬骨という絡繰り装置は
 壊れて両胸にぶら下がっていた。(50)

skye rgu'i rig sngags mkhan de rnams 「かの男達という呪術師達」 「呪術師達」は世の中の男達を表す隠喩である (*'Bab stegs* 61.13)。

'gram pa rus pa'i 'phrul 'khor ni... 「頬骨という絡繰り装置は…」 世の中の男達は頬が削げ落ちるまで、シーターの名を呪文のように唱え続けていた。これはガウダ様式に特有の誇張表現であ

る。ガウダ人は世間の常識を逸脱するこの種の誇張表現に「愛らしさ」(mdzes pa, *kānti; KĀ I 85) という美質を認める ('Bab steps 61.5ff.)。あるいは、ジャバが示すように、呪術に精通する大聖仙達 (drang srong chen po rnams) を指していると理解することもできる。すなわち、輪廻の本質を理解している聖仙達ですらシーターの魅力に取り憑かれて自制心を失い、本来唱えるべき真言を忘れて、代わりにシーターの名を唱えるようになったという意味である (Mun sel 102.14ff.)。

[5] ラーマナ、森に移り住む

ལང་ཚོ་དེ་ནི་འཛིན་བྱེད་པའི།
 ལྷུལ་པོས་རང་སྲིད་སྤུ་རུ་ལ།
 བྱི་ཡི་ཟས་བཞིན་བྱིན་གུར་ཏེ།
 འདི་ཡི་མཛེས་པ་གཞན་དག་གི།
 མིག་གིས་མཐོང་ནའང་མི་རུང་ཞེས།
 མེས་པོ་ལྷོ་མེས་པོ་ལྷོ་མེས་པོ་སྤྱོད་པ།

51b: ལྷུལ་པོས།] Σ; ལྷུལ་པོའི་ Thimphu.

51e: མཐོང་ནའང་།] Σ; མཐོང་ན་ Thimphu, Bkra.

51f: མེས་པོ་ལྷོ་མེས་པོ་ལྷོ་མེས་པོ་སྤྱོད་པ།] Σ; མེས་པོ་ནི་ Thimphu.

その若々しい娘を手に入れた
 王はまるで犬に餌を与えるようにして
 自身の王権を弟に譲ってしまった。
 この娘の美貌が他の男達の
 眼に留まることがあってもいけないと
 考えに考えた末、森に移り住んだ。(51)

lang tsho de 「その若々しい娘」 直訳は「その若々しさ」「その青春期」など。シーターの若々しさが放つ見事な美しさ (rol rnyed ma'i lang tsho'i dpal ngo mtshar ba) を意味する ('Bab steps 62.4)。

phu nu 「弟」 直後に言及される弟ラグマナのことを指している ('Bab steps 62.6)。

mig gis mthong na'ang mi rung zhes 「眼に留まることがあってもいけないと…」 ヴァールミーキ版『ラーマヤナ』では、王妃カイケーイーと侍女の策略によって、バラタ王子が父ダシャラタ王の後継者として立位することとなり、それに伴い、ラーマ王子と妃シーターは十四年間森に追放されるのであるが、この詩節によれば、ラーマナ王は妃シーターを溺愛するあまり、他の男達にシーターを見られることすらあってはならないと考えて、自主的に王権を放棄し、森に移り住むことを決意している。ここに物語の改変がある (Track 13, 8:40)。あるいはまた、もしヴァールミーキ版に描かれるような出来事を本来の物語の筋として作者チューワン・タクパが理解しているならば、ここでの描写は一種の詩的空想（「あたかも『この娘の美貌が他の男達の眼に留まることがあってもいけない』と考えるかのようにして森に移り住んだ」）であることになる (Dgongs rgyan 56.15ff.)。つまり、詩人が本来の物語を改変してそのように表現したくなる程に、シーターは魅力的な女性であったということである (Mun sel 105.17ff.)。

ལྷུལ་པོས་རང་སྲིད་སྤུ་རུ་ལ།
 བྱི་ཡི་ཟས་བཞིན་བྱིན་གུར་ཏེ།
 འདི་ཡི་མཛེས་པ་གཞན་དག་གི།
 མིག་གིས་མཐོང་ནའང་མི་རུང་ཞེས།

རིགས་ཀྱི་རྒྱལ་ས་དེ་བྱིན་ནས། །
དེས་ཀྱང་ནགས་ཚལ་མཛོལ་པར་བྱས། །

52c: ཅེས་] ཟ; ཞེས་ Thimphu. བསམ་] ཟ; བསམས་ Gser, Mkha'. ལ་ལྷུ་] ཟ; ལ་ལྷུ་ Mkha', Bkra.

(ラグマナ：)

「草を喰む家畜ですら草地を何とも思わないというのに
肉食動物がそれを捨て去ることに何の不思議があるのか。」
こう考えると、弟のラグは
王家の末弟ビーマセーナに
一族の王の座を委譲して
彼も森に美しさを添えた。(52)

gcan gzan spong la mtshar ci yod 「肉食動物がそれを捨て去ることに何の不思議があるのか」
王位継承者として最も相応しい兄ラーマナが少しも執着することなく王の座を放棄したのである
からには、自分のような者が王の座に執着するのは訳もないことだという意味である（'Bab stegs
62.20ff.）。この二詩脚には縮約表現（bsdus brjod, *samāsokti）の技法に加えて、別事例の提示（don
gzhan bkod pa, *arthāntaranyāsa）の要素も認められる（Dgongs rgyan 58.9ff.; KĀ II 169）。

la ghu 「ラグ」 ヴァールミーキ版『ラーマヤナ』に登場するラーマ王子の弟の名はラクシュマ
ナ（Lakṣmaṇa）である。本作品ではラグ（La ghu）、ラグナ（La ghu na）、ラグマナ（La ghū ma na）
等の名で呼ばれ、「ラグマナ」に相当すると思われるチベット語の名称 Yid bsdus（*Laghumanas?）
が用いられることもある。

'jigs sde 「ビーマセーナ」 ヴァールミーキ版『ラーマヤナ』では、ダシャラタ王（Daśaratha）
の後継者として王権を継ぐのはカイケーイー妃（Kaikēyī）の子バラタ（Bharata）であるが、本作
品ではラーマナから王権を委譲されたラグマナが末弟ビーマセーナ（'Jigs sde, *Bhīmasena）に王
権を任せるといふ筋書きになっている。

des kyang nags tshal mdzes par byas 「彼も森に美しさを添えた」 ラグマナもラーマナの後を追っ
て森に移り住んだという意味である。先に森に移り住んだラーマナの後を追って、ラグマナもま
た光彩（gzi byin）を放って森を美しくする要員の一人となった（'Bab stegs 63.7f.）。あるいはま
た「美しさを添えた」（mdzes par byas）は字義通りの意味ではなく、彼が移り住むことによって森
の名声がより一層高まったこと（mtshan snyan che cher rgyas song ba）を意味するとも考えられる
（Mun sel 107.13ff.）。

དེ་དག་ནགས་ཀྱི་ལྷ་ཡིན་ཏེ། །
ནགས་ཚལ་བདག་པོ་དེ་ཡི་བྲན། །
གཉིས་ནི་འདོད་པའི་བདེ་བ་དང་། །
གཅིག་ནི་བསམ་གཏན་བདེ་བས་ཚོམ། །

53d: བདེ་བས་] ཟ; དགའ་བས་ Thimphu.

今や彼らが森の王者であり
森の主は彼らの従僕となった。
二人は愛の快樂で満ち足り
一人は禪定の幸福感で満ち足りた。(53)

nags tshal bdag po 「森の主」 ラーマナ達がやって来るまで森を支配していた悪霊（mi ma yin,
*amanuṣya）のことを指している（'Bab stegs 63.13）。前半の二詩脚では、ラーマナ達が森の主と

なったこと、悪霊が彼らの従僕となったことを交互に織り交ぜるような形で描写している。この技法を交換 (yongs brjed, *parivr̥tti) という (Dgongs rgyan 59.11ff.; KĀ II 356)。

gnyis ni 'dod pa'i bde ba dang... 「二人は愛の快樂で…」 「二人」とはラーマナとシーターの夫妻のことであり、その次にある「一人」とはラグマナのことであり (‘Bab stegs 63.16f.)。後半の二詩脚の中に bde ba という同じ単語が繰り返されるが、その内の前者は性的な「快樂」を、後者は精神的な「幸福感」を意味しており、両者は別々の意味で理解される。この技法を単語反復 (tshig la bskor ba, *padāvṛtti) という (Dgongs rgyan 59.14ff.; KĀ II 118)。

[6] ラーヴァナ、鹿の姿に化ける

དེ་ཚེ་ལང་ཀའི་བདག་པོའི་སྤིང་ནི་རང་གི་དགའ་མར་ཆགས་པའི་བདུད་ཅེས་མངོན་པར་ཁེངས་པ་ཅི་ཡང་
འཛིན། །
ཀྱ་ཡེ་ཡིད་ཀྱི་རེ་བའི་བིར་གྱིས་རི་མོ་ཚོགས་པའི་ལང་ཚོ་འབྲི་བྱེད་ཁོ་བོའི་ལག་པ་གཅིག་ཉིད། །
འདི་ཡི་འགུན་རླ་གཉིས་པ་ཡོད་ཅེས་མང་ཐོས་འདོད་པས་ཁྱེད་ཅག་ནི་ཚོའི་གཏམ་རྗེས་འཇུག་པ་འགའ་ཡོད་
དམ། །
ཞེས་སྤྲིས་ལན་དུ་འཁོར་གྱི་སྤྱོ་བོ་སྤྱི་དུའི་མིང་གི་མདུང་ཐུང་ཚོན་པོས་སྤྱོ་འཛིན་ཕུག་ནམས་འདི་སྐད་ལོ། །

54b: ཀྱ་ཡེ་] ཏ; ཀྱ་ཡེ་ Thimphu, Mkha'. བིར་གྱིས་] ཏ; བིར་གྱི་ Thimphu. འབྲི་བྱེད་] Gser, Bkra; འདི་བྱེད་ Zhal; འདི་བྱེད་ Thimphu, Mkha'.

その頃ランカーの王（ラーヴァナ）の心は自分の妻への愛情という甘露のせいで、ありとあらゆる慢心を抱いていた。

(ラーヴァナ：)

「おい、心の理想という筆を使って若さの魅力という完璧な絵を描き出せるのは我輩の手ただ一つのみであるぞ。

お前達の中に『この女に匹敵する者がもう一人いる』などと言聞に鼻にかけて鸚鵡のような話に従う者が誰かいるとでもいうのか？」

するとシーターという名の鋭く短い槍で耳（音を捉えるもの）を刺された家臣の者が次のように返答したという。(54)

de tshe 「その頃」 ラーマナが妻シーターと弟ラグマナを伴って森に隠棲し、幸せに暮らしていた頃のことである (‘Bab stegs 65.14f.)。

chags pa'i bdud rtsis 「愛情という甘露のせいで」 ラーヴァナが慢心を抱いていたのは、愛情という甘露によって意識が酩酊したためである (‘Bab stegs 65.16)。

yid kyi re ba'i pir gyis... 「心の理想という筆を使って…」 ラーヴァナは、自身が美貌と若々しさを具える理想の妻を得られたのは、彼自身の徳 (bsod nams) のおかげであると言いたいのである。ラーヴァナの理想は「筆」に喩えられ、シーターの美貌は「絵」に喩えられ、ラーヴァナの徳は「手」に喩えられる (‘Bab stegs 65.18ff.)。あるいはカンブムによれば、ri mo rdzogs pa'i lang tsho は詩的空想の表現であり、「あたかも完璧な絵のような若さの魅力」とも解釈できる (Dgongs rgyan 62.15)。

ne tso'i gnam 「鸚鵡のような話」 鸚鵡の話のように、無意味で根拠のないおしゃべり (don med pa'i mu cor gyi tshig) のことである (‘Bab stegs 66.4)。「～のように」を意味する bzhin や ltar などの語は用いられないが、カンブムはこれを直喩の表現とみなしている (Dgongs rgyan 62.16f.)。

sgra 'dzin phug 「耳（音を捉えるもの）を刺された」 sgra 'dzin はサンスクリットの śabdagraha に相当する表現であり、rma ba 「耳」を意味する詩的語彙である。「槍で耳を刺された」という表

現は、シーターという女性の名声を幾度も聞いたということの意味する（'Bab stegs 66.15ff.）。

མི་གང་མང་དུ་མ་ཐོས་པ། །
 དེ་དག་ཁོ་མོ་ལ་ཉེ་ཡིན་ཏེ། །
 གནག་རྩི་རང་གི་གཡས་ཞུ་མར། །
 དབང་པོས་འཕྱུད་པར་དོགས་པས་གདུངས། །

55a: མི་] ཏ; མིག་ Thimphu.

55c: ཞུ་མར་] ཏ; ཞུ་མ་ Thimphu.

(ラーヴァナの家臣：)

「あまり見聞のない人々は
 井戸の中の魚であります。
 愚かな羊飼いは右目を盲いたる自分の愛妻が
 インドラに寝取られるのを心配して苦悶します。」 (55)

mi gang mang du ma thos pa 「あまり見聞のない人々は」 /m/音を繰り返す押韻 (rjes khrid, *anuprāsa) の技法が用いられている (*Dgongs rgyan* 64.3f.)。

khron pa'i nya 「井戸の中の魚」 日本語の「井の中の蛙」と同じ意味である。自分の周りの狭い世界のことしか知らず、外の広い世界について見聞を持たないことを例えたものである（'Bab stegs 66.18ff.）。

gnag rdzi rang gi g-yas zhar mar 「愚かな羊飼いは右目を盲いたる自分の愛妻が…」 よその世界を知らないがために無用の心配をして苦しむという意味である（'Bab stegs 67.3）。

དེ་ཐོས་མགོན་བཅུ་ཉི་ལྔ་ལ་ནི། །
 ཚགས་པའི་དུག་མདའ་དམ་པོས་བྲིན། །
 དང་སྲོང་གིས་ནི་དམོད་པ་བཞིན། །
 རང་ཉིད་དུད་འགྲོའི་གཟུགས་སུ་བྱས། །
 དགའ་བ་བྱེད་ཀྱི་སྦྱེད་ཚལ་བཅོམ། །
 འདམ་བུའི་ཚལ་རྣམས་གྲང་བོས་བཞིན། །

56b-f: om. Thimphu.

56e: བཅོམ་] ཏ; བཅོམས་ Mkha'.

それを聞くとダシャグリーヴァの心には
 愛欲という毒矢が強く刺さった。
 仙人に呪いをかけられたように
 自らを動物の姿に変えて
 ラーマナの花園を破壊した。
 葦の茂る湿原を象が破壊するように。(56)

drang srong gis ni dmod pa bzhin 「仙人に呪いをかけられたように」 ラーヴァナは、まるで仙人の呪いの力で姿を変えられるかのようにして、瞬時の内に鹿の姿に変装した（'Bab stegs 67.16ff.）。あるいはまた、トンドゥブギヤやジャバの解釈によれば、ラーヴァナは「シーターを略奪するにはどうすれば良いか」と仙人に尋ねた所、仙人は「動物の姿になって侵入するのが良い」と答えたので、彼の教示に従って鹿の姿に変装した (Track 14, 1:10; *Mun sel* 115.16ff.)。この解釈に従う

と、drang srong gis ni dmod pa bzhin は「仙人が教示したことに従って」（dmod pa bzhin = bshad pa ltar）という意味になる。

dga' ba byed kyi skyed tshal bcom 「ラーマナの花園を破壊した」 鹿の角やひづめなどで花園を破壊したという意味である（'Bab stegs 67.19f.）。

སྤྱི་ལྷོ་ལྷོ་ལོ་གདོན་ཚོགས་ཀྱི།
 ལུ་འཛིན་སྐྱ་དབྱངས་གཡོ་བ་ཅན།
 རོ་འཛིན་སྐྱ་གཞི་གཞུ་ལས་ནི།
 ས་སྐྱོང་རི་དྲགས་འདི་རྩུངས་ཞེས།
 ཏོག་སྐྱ་དང་བཅས་གནས་ལྷགས་ཀྱིས།
 བདག་པོའི་སྐྱ་འཛིན་ཅི་ཡང་དཀྱགས།

57a-c: om. Thimphu.

57d: དྲགས་] Σ; དགས་ Thimphu. རྩུངས་] Σ; གཞུང་ Thimphu.

57e: ཀྱིས་] Σ; ཀྱི Thimphu.

シーターの心——それはうなり声を鳴らして震える
 雲（水を保持するもの）という悪霊の大群に満ちていた。
 彼女の心は電光の弓である舌（味を捉えるもの）から
 「王様！この鹿を掴まえて下さい！」という
 すさまじい轟音をともなった稲妻によって
 主人の耳（音を捉えるもの）を幾重にも掻き乱した。(57)

sī ta'i snying ngo 「シーターの心」 灯明 (gsal byed, *dīpaka; KĀ II 97) の技法が用いられている（'Bab stegs 69.2）。この詩節から「シーターの心は…悪霊の大群に満ちていた」、「シーターの心は…主人の耳を幾重にも掻き乱した」という二文を構成することができる。なお、ここでシーターの心は、雷雲を伴った空に見立てられている（'Bab stegs 69.17）。

gdon tshogs kyi chu 'dzin sgra dbyangs g-yo ba can 「うなり声を鳴らして震える雲（水を保持するもの）という悪霊の大群に満ちていた」 シーターの心が悪霊に取り憑かれたという意味である。「うなり声」(sgra dbyangs) は雷鳴を意味する。シーターの口から発せられる、ありとあらゆる粗暴な言葉 (tshig rtsub) を表す隠喩である（'Bab stegs 69.3ff.）。

ro 'dzin glog gi gzhu 「電光の弓である舌（味を捉えるもの）」 シーターの舌が「電光」に喩えられ、さらにそれが「弓」に喩えられる。二重隠喩の構造になっている（'Bab stegs 69.19f.; Dgongs rgyan 66.11; KĀ II 93）。雷雲の中うごめく弓のような電光から矢のように鋭い稲妻が発せられるように、シーターの口の舌から矢のように鋭く耳障りな言葉が発せられたのである（'Bab stegs 69.5ff.）。

ri dwags 'di zungs 「この鹿を掴まえて下さい」 シーターが鹿を欲したのは、その肉を食用にするためか、もしくは皮を装飾品として使用するためである (Track 14, 5:30)。

bdag po'i sgra 'dzin ci yang dkrugs 「主人の耳（音を捉えるもの）を幾重にも掻き乱した」 ラーマナは「これは何かの罫ではないか」と疑ってシーターを諫めたが、彼女がラーマナの不手際を責め立てるようにして何度も請願してくるので、激しく苦悶した。シェルシュルワはラーマナが即座にその場を離れなかった理由について三つの解釈を提示している。第一は罪のない動物を傷つけることを懸念したため、第二は鹿を掴まえる力がないと思われはしないかと懸念したため、第三はシーターへの愛があまりにも強かったため、その場を離れて別の場所に行くことができなかったためである（'Bab stegs 69.10ff.; Mun sel 119.9ff.）。

ཀླ་ཡེ་ཉོན་ཅིག་ས་འདི་ལ།
 གདུགས་དཀར་གཅིག་གིས་ཁྱབ་པ་ཡང་། །
 དོར་ན་དབང་ལྷུག་སྒྲེང་ནི།
 བསྐྱེད་ན་ཆམ་མཁའ་ལྷོད་པའོ། །

58c: སྒྲེང་ནི་] ཟ; བསྐྱེད་ཅན་ Thimphu.

58d: བསྐྱེད་ན་] ཟ; བསྐྱེད་བ་ Thimphu. ལྷོད་པའོ་] ཟ; བཤད་པའོ་ Thimphu.

(ラーマナ：)

「まあ、聞いておくれ。この大地を
 一つの白い傘で覆い尽くす地位さえも私は
 捨て去ったのであるからには、もしその自在者が一房の髪に
 固守するならば、まるで天空がぐらつくも同然ではないか。」(58)

kwa ye nyon cig 「まあ、聞いておくれ」 ラーマナは思慮を欠いたシーターをなだめようとして、以下の言葉を語る。

sa 'di la... 「この大地を…」 大地を覆い尽くす白い傘とは全世界を支配する王権のことである。だが、ラーマナにとって、その王権を放棄するのはいとも簡単なことであった。このような別事例の提示 (*don gzhan bkod pa*) を通じて、次に自在者ラーマナが「一房の髪」に固守することなどあり得ないという事実が対比的に語られる (Track 14, 14:15)。

dbang phyug skra phreng ni... 「自在者が一房の髪に…」 自在者とはラーマナのこと。王権をいとも簡単に放棄してしまうラーマナのような強い意志を持つ人間が、シーターを愛するあまり、他のいかなる場所にも行けなくなってしまうことなどあり得ず、望みさえすれば、どこにでも行くことができる。ラーマナの強靱な精神は、いつも変わらぬ性質を持つ天空に似ている。もしラーマナの強靱な精神が失われることがあるとするならば、それは天空がぐらついて自らの不変の本質を失うことに等しいが、それは実際にはあり得ないことである (*'Bab stegs 70.17ff.*)。カンブムが提案する別解釈によれば、「もし(ガンジス河が)大自在天(シヴァ神)の一房の髪を固守(して他の場所に行けないように)するならば」(*Dgongs rgyan 67.13ff.*)。「天空がぐらつくも同然」というのは誇張表現であり、ここにはガウダ様式に特有の「愛らしさ」(*mdzes pa*) という美質が認められる (Track 14, 14:32)。

གང་ཡང་མཚན་ཡི་བཀའ་མཚིན་ལྷུན་ལ་སྟོན་པོའི་སྤྱིང་འདི་མིག་རྩུར་དང་འགྲོགས་ན་བའི་རྒྱན་དུ་འོས་པ་
 ལྷོ། །
 རྣམ་བཀྲ་དབང་པོའི་གཞུ་མཚོག་ལ་སྤྱིང་རུ་ཞེའི་ལྷོ་ཅན་གོམ་པའི་འགྲོས་འཕྱོར་ཕྱོགས་བསྐྱེད་མགོན་པོར་
 ལྷུར་ཅེས་ཐོས། །
 རྗེ་མའི་རྩལ་བཅེགས་ཕྱག་པ་ལ་ཞོན་ཉི་མའི་རྒྱ་རྒྱན་མེ་དྲོག་དུས་འདིར་རི་དྲགས་ལུས་ལ་ངལ་བ་སྟེར། །
 དྲི་མེད་ཤེལ་གྱི་རྩེག་འོས་ལ་ཆགས་རབ་བཀའི་པད་ཚལ་པིར་གྱི་རི་མོ་བྱང་བའི་འགྲམ་པ་ཉམས་སོ་ལོ། །

59b: སྤྱིང་] ཟ; སྤྱིང་ Thimphu.

59c: རི་དྲགས་] ཟ; རི་དྲགས་ Thimphu.

59d: རི་མོ་] ཟ; རི་མོས་ Thimphu.

誓いの宣言というこの青いウトパラ蓮華の輪は、君の両眼と共にある両耳の装飾として相応しいものである。というのも
 色とりどりの虹(インドラの最高の弓)を欲しがると乳呑み子は、歩むべき方向を見失って迷子の客人になったと聞くし、

砂漠の山の肩の上に乗った太陽の水流は、この花咲く季節、獣達の体に無駄な労力を使わせ、よごれない水晶の壁面に施された色とりどりの蓮華の庭園を描いた筆の絵は、蜜蜂の頬を傷つけてしまったと伝えられているのだから。(59)

gang yang 関係代名詞 gang は同じ詩脚にある'di と関連し、mna' yi bka' mchid utpal sngon po'i phreng 「誓いの書状という青いウトパラ蓮華の輪」という名詞句の内容を指している（'Bab stegs 71.9ff.）。

mna' yi bka' mchid 「誓いの宣言」 ラーマナがシーターに向かって語った直前の言葉を指している。その言葉が「青いウトパラ蓮華の輪」という隠喩によって表現される。

rna ba'i rgyan 「両耳の装飾」 シーターの耳につける装飾である。直前の詩節で語られたように、ラーマナは自らが不動で強靱な精神の持ち主であることをシーターに理解して欲しいと思っている。シーターが彼の言葉に耳を傾けるべきであることを、作者は「誓いの宣言は耳の装飾として相応しい」と表現している。

rnam bkra dbang po'i gzhu mchog la sred... 「色とりどりの虹（インドラの最高の弓）を欲しが…」 作者は以下の別事例の提示（don gzhan bkod pa）による譬え話を通じて、女の言葉に従って行動することが困窮（phongs pa）や苦難（ngal ba）の原因になることを暗示している（'Bab stegs 71.12f.; Dgongs rgyan 68.11）。複数の比喩（mang ba'i dpe）を重ねて構成された縮約表現（bsdus brjod, *samāsokti）である（Dgongs rgyan 69.7ff.）。

nyi ma'i chu rgyun 「太陽の水流」 太陽の光によって作り出された陽炎（smig rgyu）のことである。陽炎によって生み出された実在しない川の姿は、喉の渇きを癒そうとして水を求める動物達に無益な努力をさせる（'Bab stegs 71.20ff.）。

ཞེ་སྤང་ཅུ་ཡིས་ཁྱེར་བ་དེ།
ཚིག་གི་ཅུ་ཚར་མི་འདོད་དེ།
སོས་ཀའི་ཚ་བས་གདུང་བ་ནི།
མི་ཡི་འོད་དང་འགྲོགས་པ་མིན།

60c: གདུང་བ་] Σ; གདུངས་པ་ Thimphu.

怒りという河に流される彼女は
忠告という雨を求めはしない。
春の熱気に憂う者であれば
火の光に近づこうとはしない。(60)

zhe sdang chu yis khyer ba de 「怒りという河に流される彼女」 シーターは、ラーマナに鹿を捕まえるように求め続けているにもかかわらず、彼が引き受けようとしないので、激しい怒りを覚えている（Mun sel 125.15f.）。

tshig gi chu char mi 'dod de 「忠告という雨を求めはしない」 ラーマナは優しい言葉で忠告を与えようとするが、シーターの思いに反するため、彼女は彼の言葉に耳を傾けようとしない。それはちょうど河に転落した人が雨を欲しないのと同じである（Mun sel 125.16ff.）。

ཇེ་སོས་རི་བོ་ལ་འདྲོགས་པས།
ལྷན་བ་བཟུང་བར་རུས་མ་ཡིན།
ལྷོ་ཅུ་འབྲུགས་པའི་གཟུགས་བརྟན་འདྲིན།

མོ་མོ་རི་རྩེ་མོ་བསྐྱེད་ལ་དག།
 མཐུ་མཆིས་ན་ནི་ནམ་མཁའ་ཡི།
 མོ་མོ་འཛིན་ལ་བསྐྱེད་ཀྱང་འཚལ།

61a: རྩེ་མོ་། ཟ; རྩེ་མོ་ Thimphu.

61b: བསྐྱེད་། ཟ; བསྐྱེད་ Thimphu.

61d: རྩེ་མོ་། ཟ; རྩེ་མོ་ Thimphu; རྩེ་མོ་ Bkra.

61f: བསྐྱེད་ཀྱང་འཚལ། ཟ; སྐྱེད་ཅི་འཚལ་ Gser; རྩེ་མོ་འཚལ་.

主人（ラーマナ）が山の上に登っても
 月を掴まえることなどではしないのに
 青銅の液を固めて作った鏡（影像を捉えるもの）を
 指先の上に載せて持つ女というものは
 「もし力があるなら空の鏡を
 取って来い」と命じることもあるようだ。(61)

rje bos ri bo la 'dzegs pas... 「主人（ラーマナ）が山の上に登っても…」 ラーマナが鹿を追って
 も、それは実在の鹿ではないので掴まえることはできないということを言い表した縮約表現であ
 る (*Dgongs rgyan* 71.6ff.).

khro chu 'khyags pa'i gzugs brnyan 'dzin... 「青銅の液を固めて作った鏡（影像を捉えるもの）を…」
 青銅の液を冷却し、固めて作った鏡はとても重たい。わざわざそのような鏡を使って自分の顔
 を眺めてばかりいる女が、夫に向かって空に浮かぶ鏡（月）を取って来るように要求するならば、
 彼女は恥知らずな女 (*bud med spyi brtol can*, *'Bab stegs* 73.8ff.) であるか、もしくは思慮の乏しい
 女 (*ci bsam 'di bsam med pa*, *Mun sel* 127.1f.) であろう。シーターの頑迷な性格を表現した詩的空
 想である (*Dgongs rgyan* 71.8ff.). *gzugs brnyan 'dzin* はサンスクリットの *chāyāgraha* 「影像を捉え
 るもの」に由来する表現。 *me long* 「鏡」を意味する詩的語彙である。

nam mkha' yi me long 「空の鏡」 月 (*zla ba*) を意味する。「空の鏡（月）を取って来い」とい
 う言葉はラーマナに対する無理な要求を表している (*'Bab stegs* 73.11f.).

bskul kyang 'tshal 「命じることもあるようだ」 ジャバの註釈では *bskul kyang srid* 「命じること
 もあり得る」、*bskul pa'i skabs kyang yod nges yin* 「命じる場合もあるはずである」と言い換えられる
 (*Mun sel* 127.4, 14)。この箇所には複数の異読がある。シェルシュルワによると、*bskul cing 'tshal*
 「命じているようだ」という読みを与える伝本もあるという (*'Bab stegs* 73.14)。

མོ་མོ་རི་རྩེ་མོ་བསྐྱེད་ལ་དག།
 རྩེ་མོ་འཛིན་ལ་བསྐྱེད་ཀྱང་འཚལ།
 མཐུ་མཆིས་ན་ནི་ནམ་མཁའ་ཡི།
 མོ་མོ་འཛིན་ལ་བསྐྱེད་ཀྱང་འཚལ།

62b: རྩེ་མོ་། ཟ; རྩེ་མོ་ Thimphu.

62d: འཛིན་ལ་བསྐྱེད་། ཟ; འཛིན་ལ་བསྐྱེད་ Gser, Thimphu.

シーターは何かとわめき散らす女であった。
 まるで甲高い声で吠える犬が自分の過失を
 敵側の過ちに転嫁するように、森の中
 空をつんざくような大きな声を出した。(62)

rol rnyed ma ni nga ro can 「シーターは何かとわめき散らす女であった」 所有接辞 can で表現されるシーターのこの行動は一回限りのものではなく、習慣的に行われていたのであろう。彼女は荒々しい言葉のわめき声を大袈裟に撒き散らすという性質の持ち主（*rsub mo'i tshig gi nga ro ches cher sgrog pa'i bdag nyid can*）であった（Track 15, 1:30）。

dgra bo'i skyon bzhin 「敵側の過ちに転嫁するように」 近づいて来る敵に向かって甲高い声で吠える弱い犬は、自分の側にある過失、すなわち自らの恐怖心から声を発しているのだが、まるで敵の側にその責任を転嫁しているように見える。『サキヤ・レクシェ』第73（74）詩節に「気が小さく、心に悪意を抱く人は害を加えるより先に表情を変える。悪い犬は敵を見つけると噛み付く前にまず吠える」⁷⁵ という格言がある（'Bab stegs 74.9ff.）。

གཞུ་འཛིན་རྗེ་བོ་རྒྱ་མ་ཚམ། །
 རི་དྭགས་བརྩུང་བར་མ་རུས་ཏེ། །
 མཐེབ་ལོང་སྦྱོར་བ་མེད་པ་འགའི། །
 ཚིག་མདའི་ཤུགས་ཀྱིས་འབེན་དག་སུག །

63b: རི་དྭགས་] ཏ; རི་དྭགས་ Thimphu.

63c: མཐེབ་] ཏ; འཐེབ་ Zhal, Gser. སྦྱོར་] ཏ; འབྱོར་ Thimphu.

弓の名手であるラーマナ王が
 鹿を掴まえることもできぬ内に
 弓懸を付けたこともない誰かの
 言葉という矢の力での的は射抜かれた。(63)

ri dwags bzung bar ma nus te 「鹿を掴まえることもできぬ内に」 シェルシュルワは *ma nus te* 「できなかった」を、*ma nus pa'i sngon la* 「できぬ内に…」という表現で言い換えて註釈している（'Bab stegs 74.19f.）。ジャバは *bzung* 「掴まえる」を *sems kysis 'dzin pa* 「把握する（=心で捉える）」という意味で理解している（*Mun sel* 129.6f.）。

tshig mda'i shugs kysis 'ben dag phug 「言葉という矢の力での的は射抜かれた」 シーターによって発せられた荒々しい言葉が、まるで矢のように、ラーマナの心に突き刺さったという意味である（'Bab stegs 74.20ff.）。

ཡན་ལག་རུང་ཟད་ཉམས་གྱུར་ན། །
 སྦྱོར་དཔུང་དགའ་བ་མ་ཡིན་ཡང་། །
 སྦྱིང་ལ་ཚོར་མ་རྣམས་ན་ནི། །
 ཚོར་འཛིན་དག་གིས་འདོན་པར་དགའ། །

64d: འདོན་པར་] ཏ; འདོན་པ་ Mkha', Bkra.

手足を少し負傷した程度であれば
 治療を施すのは困難ではないが
 心に棘が刺さってしまうと
 棘抜きを使って抜き取るのは困難である。(64)

⁷⁵*Sa skya legs bshad* 74 (cf. Davenport 2000: 77): *blo chung sems la khon 'dzin can || gnod pa bas kyang rnam 'gyur snga || khyi ngan dgra bo mthong ba na || rmugs pa'i thogs mar ku co 'don ||*

snying la tsher ma zug na ni... 「心に棘が刺さってしまうと…」 一時的に屈折した心を元に戻すのは容易であるが、魔物 (gdon) に取り憑かれて屈折してした心を元に戻すのは容易でない (*Dgongs rgyan* 73.12ff.)。シーターの悪魔的な言葉によってラーマナの心が修復困難な程に深い傷を負った様子を描いている。

ལེགས་བཤད་སྣ་བ་རྣམ་དཔྱད་ཅན། །
 མཁས་པ་ཉིད་དོ་ཙོ་འདྲིའི་ཚིག། །
 མཇེའ་བོའི་གནད་དུ་བསྐྱེན་པ་ལ། །
 ལྷན་པོ་ལས་ནི་མཁས་པ་སྲ། །

65a: སྣ་བ་] Gser, Thimphu; སྣ་ལ་ Zhal; སྣ་ལ་ Mkha', Bkra.

正しく語られた言葉を吟味する者が
 まさしく賢者である。侮辱の言葉を
 友の急所に突き刺すことにかけては
 愚者よりも上手な人は誰もいない。(65)

blun po las ni mkhas pa su 「愚者よりも上手な人は誰もいない」 ラーマナの正しい言葉に耳を貸さないシーターは愚者に他ならない (*'Bab stegs* 75.15; *Dgongs rgyan* 74.4)。

[7] ラーマナ、鹿を追って行く

རྒྱུ་མའི་ཚིག་གི་རྟ་དམར་ཅན། །
 དུས་མཐའི་རྒྱུ་འདྲུས་གཡོས་པ་དེ། །
 ལྷོས་ཀྱང་གཞུང་བཟང་མ་བཏང་བས། །
 རྟ་གདོང་མེ་དང་མཚུངས་པ་ཡི། །
 འོབས་ཀྱི་ར་བའི་འོད་ཚེན་ནི། །
 ལ་སྐྱེན་དང་མནའ་མ་བཅས། །
 དག་བོའི་སྐྱེན་པ་སེལ་ཕྱིར་བྱས། །

66b: དེ་] Σ; རྟ་ Thimphu; དེས་ Bkra.

66e: འོབས་ཀྱི་] Σ; འོད་ཀྱི་ Thimphu. འོད་ཚེན་] Σ; འོབས་ཚེན་ Thimphu.

66e: ལ་སྐྱེན་དང་] Σ; ལ་སྐྱེན་ Thimphu. མནའ་མ་] Σ; སྐྱེན་མར་ Thimphu.

妻の言葉という劫末の風のような
 風（赤い馬に乗るもの）に掻き乱された彼（ラーマナ）は
 憤りを覚えたが、上品な振る舞い方を失うことなく
 ラグナと嫁（シーター）の二人を
 敵の暗黒から防いで守るため
 ヴァーダカ・アグニのような
 窪地を取り囲む強い光の壁を作った。(66)

rta gdong me 「ヴァーダカ・アグニ」 サンスクリットの *vāḍakāgni* に相当する単語。南方の海底火山の炎の名称である (*Mun sel* 133.6f.)。普通の火の七倍の強さを持つと言われている (Track 15, 12:55)。

la ghu na 「ラグナ」 弟ラグマナのこと。ラーマナは自分が鹿を追っている間、シーターと共にとどまることをラグマナに命じたのである（'Bab stegs 76.9f.）。

dgra bo'i mun pa 「敵の暗黒」 外敵からの危害（gnod 'tshe）を表す隠喩である（Dgongs rgyan 76.12）。

རང་ཉིད་རྩོན་པའི་བརྟུལ་ལྷགས་སྒྲངས། །
 རང་བ་ལྷག་གིས་དྲོར་བ་དང་། །
 གཉིས་འཕྱང་སྒྲང་མོས་དྲོར་འདྲ་དེ། །
 ཉི་མ་གཞོན་ལུང་ཕྱོགས་འགྲོ་བའི། །
 རི་དྲགས་གྲིབ་མ་བཞིན་དུ་མོང་། །

67a: རང་ཉིད་] Σ; རང་གིས་ Thimphu.

67b: ལྷག་གིས་] Σ; ལྷགས་ཀྱིས་ Thimphu.

67d: འགྲོ་བའི་] Σ; འགྲོ་བ་ Bkra.

67e: རི་དྲགས་] Σ; རི་དྲགས་ Thimphu.

自らを狩人の恰好に身を包み
 妻に見捨てられたハンサ鳥や
 雌の象に見捨てられた象（二箇所飲む者）のような彼は
 若者の太陽がいる方角へと進む
 鹿の後を影のように付けて行った。(67)

rang nyid rngon pa'i brtul zhugs blangs 「自らを狩人の恰好に身を包み」 ラーマナは普段の王族の服装をせずに、狩人の恰好をして出掛けて行った（'Bab stegs 76.20f.）。

gnysis 'thung 「象（二箇所飲む者）」 サンスクリットの dvipa 「二箇所飲む者（=口と鼻という二つの器官を使って飲む者）」に由来する表現。 glang bo 「象」を意味する詩的語彙である。

nyi ma gzhon nu'i phyogs 「若者の太陽がいる方角」 昇った直後の太陽が存在する東の方角のことである（Mun sel 135.19）。あるいは、nyi ma gzhon nu 'gro ba'i phyogs 「若者の太陽が向かって行く方角」、すなわち太陽が沈む西の方角を意味するとも考えられる（'Bab stegs 77.4f.; Dgongs rgyan 77.4f.; Mun sel 135.20）。

ri dwags grib ma bzhin du song 「鹿の後を影のように付けて行った」 ラーマナはまるで鹿の影のようになって、鹿の後をついて行ったという意味である。諸註釈は「鹿は影（が消え去るの）と同じように消え去った」、すなわち幻の鹿が瞬時の内にラーマナの前から姿を消したという意味で理解する（'Bab stegs 77.5f.; Dgongs rgyan 77.5ff.; Mun sel 135.21f.; Track 15, 17:50）。しかし、その解釈を成立させるためには、第三詩脚の末尾に置かれた de 「彼が」が意味をなすように、ri dwags de nyid kyi rjes su bsnyegs pa na 「まさにその鹿の後を追って行った時」といった言葉を補わなければならない。

略号と文献

(1) 一次資料

(1-1) インド撰述文献

AA *Abhisamayālaṅkāra* (“Maitreya”): see AAĀ.

- AAĀ** *Abhisamayālamkāra* (Haribhadra): *Abhisamayālamkāra Prajñāpāramitāvyaḥyā* (Commentary on *Aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā*) by Haribhadra Together with the Text Commented on. Ed. U. Wogihara. Tokyo: The Toyo Bunko. 1932–1935.
- AK** *Abhidharmakośa* (Vasubandhu): see AKBh.
- AKBh** *Abhidharmakośabhāṣya* (Vasubandhu): P. Pradhan ed. *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*, Tibetan Sanskrit Works Series Vol. VIII. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute. 1975.
- Av-klp** *Bodhisattvāvadānakalpalatā* (Kṣemendra): see Straube 2009.
- KĀ** *Kāvyaḍarśa* (Daṇḍin): O. Böhtlingk ed. *Daṇḍin's Poetik (Kāvjādarṣa)*. Leipzig: Verlag von H. Haessel. 1890.
- KĀ I** *Kāvyaḍarśa* Chapter 1 (Daṇḍin): see Dimitrov 2002: 152–207.
- KĀ III** *Kāvyaḍarśa* Chapter 3 (Daṇḍin): see Dimitrov 2011.
- KĀ_D** *Kāvyaḍarśa* (Daṇḍin): Tibetan Sde dge ed. *sgra mdo*, se. Tohoku no. 4301.
- KĀ_S** *Kāvyaḍarśa* (Daṇḍin): *Snyan ngag me long ma zhes bya ba skad gnyis shan sbyar*. In *Ta'i si tu pa kun mkhyen chos kyi 'byung gnas bstan pa'i nyin byed kyi bka' 'bum*, cha. Sansal: Palpung sungrab nyamso khang. 1990.
- GV** *Gaṇḍavyūhasūtra*: Daisetz Teitaro Suzuki and Hokei Idzumi eds. *The Gandavyuha Sutra*. Kyoto: Sanskrit Buddhist Texts Pub. Society. 1934–1936.
- MSA** *Mahāyānasūtrālamkāra* (“Maitreya”). See MSABh.
- MSABh** *Mahāyānasūtrālamkārabhāṣya* (Vasubandhu): S. Lévi ed. *Mahāyānasūtrālamkāra: Exposé de la doctrine du Grand Véhicule, selon le système Yogācāra*. Paris: Librairie Honoré Champion. 1907.
- VS** *Viśeṣastava* (Udbhaṭasiddhasvāmin): see Schneider 1993.
- SV_D** *Sārasvatavyākaraṇasūtra* (Anubhūti): Tibetan Sde dge ed. *sgra mdo*, se. Tohoku no. 4297.
- SVT_D** *Sandhivyaākaraṇanāmatantra*: Tibetan Sde dge ed. *rgyud*, ca. Tohoku no. 444.

(1-2) チベット撰述文献

- Mchod sprin** *Khyad par 'phags bstod kyi 'grel ba thub dbang dgyes pa'i mchod sprin* (Bse tshang blo bzang dpal ldan). In *Bse tshang blo bzang dpal ldan gyi gsung rtsom*, pod 5 (pp. 1–395). Beijing: Mi rigs dpe skrun khang. 2010.
- 'Jug pa bcu'i gtam** *Lha chen po khyab 'jug gi 'jug pa bcu'i gtam rgya bal mkhas pa'i ngag rgyun gangs can rna ba'i bdud rtsi* (Kham sprul bstan 'dzin chos kyi nyi ma). In *Rgyan gyi bstan bcos dbyangs can ngag gi rol mtsho* (pp. 759–776). Lhasa: Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang. 1986.
- Snyan ngag 'jug sgo** *Snyan ngag la 'jug pa'i sgo* (Bse tshang blo bzang dpal ldan). Beijing: Mi rigs dpe skrun khang. 2003.
- Danḍi'i dgongs rgyan** *Snyan ngag gi bstan bcos chen po me long la 'jug pa'i bshad sbyar danḍi'i dgongs rgyan* (Bod mkhas pa mi pham dge legs rnam rgyal). Xining: Mtsho sngon mi rigs dpe skrun khang. 2004.
- Dgongs rgyan** *Rā ma ṇa'i rtogs brjod chos dbang grags pa'i dgongs rgyan* (Mkha' 'bum). Lanzhou: Kan su'u mi rigs dpe skrun khang. 2000.
- Bstod sprin rgya mtsho** *Rje btsun 'jam pa'i dbyang la bstod pa 'jam dbyangs mnyes byed pa'i stod pa sprin rgya mtsho* (Tsong kha pa blo bzang grags pa): Zhol ed. Kha. Tohoku no. 5275 (33).
- Don bdun cu** *Don bdun bcu'i rnam bzhag legs par bshad pa mi pham bla ma'i zhal lung* ('Jam dbyangs bzhad pa ngag dbang brtson 'grus): Bkra shis 'khyil ed. Ba.

Bai dūrya ser po *Dpal mnyam med ri bo dga' ldan pa'i bstan pa zhwa ser cod pan 'chang ba'i ring lugs chos thams cad kyi rtsa ba gsal bar byed pa baidū rya ser po'i me long* [Dga' ldan chos 'byung baidū rya ser po] (Sde srid sangs rgyas rgya mtsho). Beijing: Krung go bod kyi shes rig dpe skrun khang. 1989.

'Bab stegs *Rgyal po rā ma ṅa'i gтам rgyud las brtsams pa'i snyan ngag gi bstan bcos dri za'i bu mo'i rgyud mang gi sgra dbyangs kyi 'grel ba dri med shes gyi 'bab stegs* (Zhal shul ngag dbang bstan pa'i rgya mtsho). In *Rā ma ṅa'i rtogs brjod*. Chengdu: Si khron mi rigs dpe skrun khang. 1995.

Mahāvvyutpatti *Mahāvvyutpatti*: see 榊 1962.

Mun sel *Zhang zhung pa'i rā ma ṅa'i rtogs brjod kyi 'grel pa skal ldan yid kyi mun sel* (Bkra bha). Xining: mtsho sngon mi rigs dpe skun khang. 2018.

Rin chen sgron me *Bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan gyi mtha' dpyod shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i don kun gsal ba'i rin chen sgron me* ('Jam dbyangs bzhad pa ngag dbang brtson 'grus), stod cha: Bkra shis 'khyil ed. Ja.

Rol mtsho *Snyan ngag me long gi 'grel pa dbyangs can ngag gi rol mtsho* (Khams sprul bstan 'dzin chos kyi nyi ma). In *Snyan ngag dang mngon brjod: Bod kyi bcu phrag rig mdzod chen mo bka' brgyud pa'i gsung rab*, pod 2 (pp. 29–719). Xining: Mtsho sngon mi rigs dpe skrun khang. 2004.

Sa skya legs bshad *Legs par bshad pa rin po che'i gter* (Sa skya paṇḍita kun dga' rgyal mtshan). In *Legs bshad rin po che'i gter rtsa 'grel* (pp. 1–91). Lhasa: Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang. 1982.

Sa legs 'grel pa *Legs par bshad pa rin po che'i gter zhes bya ba'i 'grel pa* (Dmar ston chos rgyal). In *Legs bshad rin po che'i gter rtsa 'grel*. Lhasa: Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang (pp.92–209). 1982.

Seng ge'i nga ro *Snyan ngag me long gi rgya cher 'grel pa mi 'jigs pa seng ge'i rgyud kyi nga ro'i dbyangs* (Rin spungs pa ngag dbang 'jig rten dbang phyug grags pa). In *Snyan ngag: Bod kyi bcu phrag rig mdzod chen mo. dpal ldan sa skya pa'i gsung rab*, vol. 5 (pp. 89–486). Beijing: Mi rigs dpe skrun khang. 2004.

Gser gyi sbram bu *Gangs ljongs mkhas dbang rim byon gyi rtsom yig gser gyi sbram bu*. Ed. Blo bzang chos grags and Bsod nams rtse mos bsgrigs. Xining: Mtsho sngon mi rigs dpe skrun khang. 1988–1989.

(2) 二次資料

(2-1) チベット語資料

Rgya ye bkra bho (ed.)

- 2008 *Bod kyi rtsom rig lo rgyus skal bzang mig sgron*. Xining: Mtsho sngon mi rigs dpe skrun khang.
2018 *Rje tsong kha pa'i bstod pa phyogs btus bsnags 'os bsnags pa*. Beijing: Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang.

Grags pa 'byung gnas and Blo bzang mkhas grub (eds.)

- 1992 *Gangs can mkhas grub rim byon ming mdzod* 雪域歷代名人辭典. Lanzhou: Kan su'u mi rigs dpe skrun khang.

(2-2) 欧文資料

Balbir, Jagbans Kishore

- 1963 *L'histoire de Rāma en tibétain d'après des textes de Touenhouang. Édition du texte et traduction annotée*. Paris: Adrien-maisonneuve.

Davenport, John T.

- 2000 *Ordinary Wisdom: Sakya Pandita's Treasury of Good Advice*. Boston: Wisdom Publications.

- de Jong, J. W.
 1972 “An Old Tibetan Version of the Rāmāyaṇa.” *T’oung Pao*, Second Series 58: 190–202.
 1983 “The Story of Rāma in Tibet.” In *Asian Variations in Ramayana: Papers Presented at the International Seminar on ‘Variations in Ramayana in Asia: Their Cultural, Social and Anthropological Significance’*: New Delhi, January 1981. ed. K. R. Srinivasa Iyengar, 163–182. Delhi: Sahitya Akademi.
 1989 *The Story of Rāma in Tibet: Text and Translation of the Tun-huang Manuscripts*. Stuttgart: Franz Steiner.
- Demiéville, Paul
 1952 *Le concile de Lhasa : une controverse sur le quietisme entre bouddhistes de l’Inde et de la Chine au VIIIe siècle de l’ère chrétienne*. Paris: Presses universitaires de France.
- Dimitrov, Dragomir
 2011 *Śabdālamkāraḥaṣavibhāga: Die Unterscheidung der Lautfiguren und der Fehler, kritische Ausgabe des dritten Kapitels von Daṇḍins Poetik Kāvyaḍarśa und der tibetischen Übertragung Sñan ñag me loñ samt dem Sanskrit-Kommentar des Ratnaśrījñāna, dem tibetischen Kommentar des Dpañ Blo gros brtan pa und einer deutschen Übersetzung des Sanskrit-Grundtextes*. Band 2. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Eimer, Helmut
 1979 *Rnam thar rgyas pa: Materialien zu einer Biographie des Atiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna)*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Fujieda, Akira
 1969 *The Tunhuang Manuscripts: A General Description. Part II*. Kyoto: Kyoto University.
- Kapstein, Matthew T.
 2003 “The Indian Literary Identity in Tibet.” In *Literary Cultures in History: Reconstructions from South Asia*, ed. Sheldon Pollock, 747–802. Berkeley: University of California Press.
- Lalou, Marcelle
 1936 “L’histoire de Rāma en Tibétain.” *Journal Asiatique* 560–562.
- Martin, Dan
 2008 “Veil of Kashmir: Poetry of Travel and Travail in Zhangzhungpa’s 15th-Century Kāvya Reworking of the Biography of the Great Translator Rinchen Zangpo (958–1055 CE).” *Revue d’Etudes Tibétaines* 14: 13–56.
- Nemoto, Hiroshi
 2014 “Compositional Styles in Classical Tibetan Literature: The Poetic Verse of ’Jam dbyangs bzhad pa ngag dbang brtson ’grus.” In *Current Issues and Progress in Tibetan Studies: Proceedings of the Third International Seminar of Young Tibetologists, Kobe 2012*, ed. Tsuguhito Takeuchi *et al.*, 303–316. Kobe: Kobe City University of Foreign Studies.
- Schneider, Johannes
 1993 *Der Lobpreis der Vorzüglichkeit des Buddha: Udbhaṭasiddhasvāmins Viśeṣastava mit Prajñāvarmans Kommentar: nach dem tibetischen Tanjur*. Indica et Tibetica: Monographien zu den Sprachen und Literaturen des indo-tibetischen Kulturraumes, Bd. 23. Bonn: Indica et Tibetica Verlag.
- Straube, Martin
 2009 *Studien zur Bodhisattvāvadānakalpalatā: Texte und Quellen der Parallelen zu Haribhaṭtas Jātakamālā*. Veröffentlichungen der Helmut von Glasenapp-Stiftung: Monographien, Bd. 1. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Thomas, Frederick William
 1929 “A Rāmāyaṇa Story in Tibetan from Chinese Turkestan.” In *Indian Studies in Honor of Charles Rockwell Lanman*, 193–212. Cambridge: Harvard University Press.
- van der Kuijp, Leonard W. J.
 1996 “Tibetan Belles-Lettres: The Influence of Daṇḍin and Kṣemendra.” In *Tibetan Literature: Studies in Genre*, ed. José Ignacio Cabezón and Roger R. Jackson, 393–410. Ithaca: Snow Lion.

(2-3) 和文資料

- 今枝由郎（訳）
2002 『サキャ格言集』 岩波文庫
- 岩尾一史
2011 「チベット支配初期の敦煌史に関する新史料——IOL Tib J 915 と IOL Tib J 292(B)」『敦煌寫本研究年報』5: 213–224.
- 岩本明美
2002 「『大乘莊嚴經論』の修行道—第13・14章を中心として—」京都大学提出学位請求論文
- 上山大峻
1990 『敦煌佛教の研究』 法藏館
- 榎一雄
1940 「ベイリイ氏『コータン語のラーマ王物語』」『東洋学報』27-3: 138–140.
- 奥山直司
1999 「インド密教ホーマ儀礼」『シリーズ密教1 インド密教』所収（pp. 175–193）春秋社
- 小谷信千代
1984 『大乘莊嚴經論の研究』 文栄堂書店
- 梶山雄一（監修）
1990 『さとりにへの遍歴（下）華嚴經入法界品』 中央公論社
- 榎亮三郎
1962 『梵藏漢和四譯對校翻譯名義大集』 鈴木学術財団
- 立川武蔵・石濱裕美子・福田洋一
1995 『西藏仏教宗義研究第七巻 トゥカン『一切宗義』ゲルク派の章』 東洋文庫
- 根本裕史
2016a 「チベットのラーマヤナ：迷いの世界に咲いた毒の花」『チベット文学と映画制作の現在：SERNYA』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）3: 98–103.
2016b 『ツォンカパの思想と文学—縁起讃を読む—』 平楽寺書店
- 根本裕史・扎布
2020 「『サダープラルディタ・アヴァダーナ』研究」『比較論理学研究』17: 15–64.
- 原實
1978 「ラーマ物語と桃太郎童話」『オリエント学インド学論集：足利惇氏博士喜寿記念』所収（pp. 523–539）国書刊行会
- 森雅秀
2011 『インド密教の儀礼世界』 世界思想社

（ねもと ひろし、広島大学 [インド哲学]・ジャブ、青海師範大学）

A Study of the *Rā ma ṇa'i gтам rgyud*:
Introductory Notes and an Annotated Translation of the First Part

NEMOTO Hiroshi, RGYA YE BKRA BHO

This article contains an annotated Japanese translation of the first half of the *Rā ma ṇa'i gтам rgyud* (*The Tale of Rāmaṇa*), an ornate epic on the story of the Tibetan *Rāmāyaṇa*, written by the Dge lugs pa scholar-monk Zhang zhung chos dbang grags pa (1404–69). The story of Rāmaṇa (Rāma) and Sītā is well known in Tibetan literary tradition. It first appeared in the Dunhuan documents that were written in circa 800 CE; and since then it has been told in many Tibetan literary works up to the present time. One important work among them is the summary of the story found in Dmar ston chos rgyal's commentary on the *Sa skya legs bshad*, written in the thirteenth century. The framework of Chos dbang grags pa's story is based primarily on Dmar ston chos rgyal's summary. The *Rā ma ṇa'i gтам rgyud* is rich in its usage of poetic ornaments (*rgyan*, *alamkāra*) and poetic vocabulary derived from Sanskrit synonymics (*mngon brjod*, *abhidhāna*), both of which are essential elements in the vivid depiction of each character's mental states. What is also of interest is its compositional style that is reminiscent of the Gauḍī from eastern India. For instance, Chos dbang grags pa prefers highly exaggerated expressions, which are characteristic of the Gauḍī style. Many of his verses are incomprehensible without the knowledge of the Sanskrit literary arts. This however does not mean that the *Rā ma ṇa'i gтам rgyud* is merely an imitation of Sanskrit literature. Chos dbang grags pa's creativity does occur in his profound expression of human sentiments as well as in his view of worldly affairs presented from the Buddhist perspective.